

市道御供所井尻線建設に伴う発掘調査報告書 V

五十川遺跡 5

—五十川遺跡第10次・11次調査の報告—

2008

福岡市教育委員会

市道御供所井尻線建設に伴う発掘調査報告書 V

ご　じゅつ　かわ
五十川遺跡 5

—五十川遺跡第10次・11次調査の報告—



2008

福岡市教育委員会

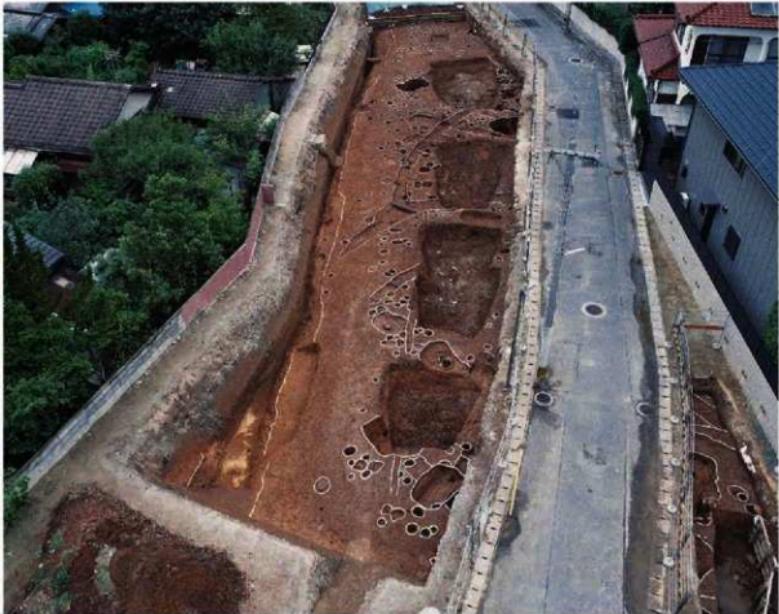


1. 第10次調査 C区土塚墓SK-3035（東から）



2. 第10次調査 C区方形周溝墓SD-3006出土土器

卷頭図版 2



1. 第11次調査 F区北半部全景（南東から）



2. 第11次調査 F区南半部全景（南東から）

序

古来より文化交流の窓口の役割を果たしてきた福岡市域には、大陸や朝鮮半島との交流を示す多くの文化財が各所に残されており、発掘調査によって数多くの文物が次々と発見されています。これらを守り伝え、先人の遺産として活用していくことは現代に生きる私たちの責務ですが、これらの大半が市街地の再開発にともなって発見されることから、その保護は困難な状況にあります。

福岡市教育委員会では、埋蔵文化財を保護するとともに、開発によって破壊される場合には事前に発掘調査を実施し、記録の保存に努めています。本書は市道御供所井尻線建設に伴って実施した五十川遺跡第10次・第11次調査成果について報告するものです。発掘調査では、弥生時代から中世にわたる各時代の遺構を確認し、これまで知られていた五十川遺跡の内容を大きく書き換える知見を得ることができました。

この報告書が市民の皆様の文化財保護への理解を深める手助けとなり、また学術研究や社会教育の分野においても幅広く活用されれば幸いと考えます。

最後になりましたが、調査に際してご協力頂きました地元作業員の方々をはじめ、土木局をはじめとする関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

平成20年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣

例　　言

1. 本書は平成14～15（2002～2003）年度に福岡市教育委員会が行った、福岡市南区五十川二丁目地内所在の五十川遺跡第10・11次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査及び整理報告書作成は、市道御供所井尻線新設に伴う土木局の令達事業として実施した。
3. 発掘調査及び整理報告書作成は、平成14年度に実施した第10次調査を横山邦継・上角智希が、平成15年度に実施した第11次調査を吉武学が担当した。発掘調査は道路用地買収後に家屋が解体され調査可能となった部分から順次を行い、調査区は調査次数を問わずAから連番でGまでアルファベットで呼称した。
4. 檜出遺構には、調査区ごとに4桁の連番号を付した（A区：1001～、B区：2001～、C区：3001～、D区：4001～、E区：5001～、F区：6001～、G区：7001～）。
5. 遺構番号の頭には、遺構の性格を示す記号としてSB（掘立柱建物）・SC（竪穴住居）・SD（溝状遺構）・SK（土坑）・SP（柱穴・性格不明ピット）を付した。これ以外に、第10次調査ではSG（貯蔵穴）・K（甕棺墓）・SX（石棺墓）、第11次調査ではSK（木棺墓・土壤墓・甕棺墓・貯蔵穴・土坑）、SX（性格不明遺構）を用いた。
6. 本書に使用した遺構実測図の作製は、調査担当者のほか、坂口剛毅（技能員）が行った。
7. 本書に使用した遺物実測図の作製は、調査担当者のほか、田中克子（技能員）が行った。
8. 本書に使用した図の製図は、調査担当者のほか、副田則子・田中が行った。
9. 本書に使用した写真的撮影は各調査担当者が行った。
10. 本書の執筆は各調査担当者が行い、一部を熊本大学小畠弘己氏にお願いした。
11. 本書に使用した方位は全て磁北である。
12. 本書の編集は、横山・上角の協力のもと吉武が行った。
13. 本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理する。

遺　跡　名	五十川遺跡第10次調査		遺跡調査番号	0229	
遺　跡　略　号	GJK-10		調　査　地　地　籍	南区五十川2丁目地内	
開　発　面　積	-m ² 、	調査対象面積	-m ²	調　査　面　積	1,100m ²
調　査　期　間	2002年（平成14年）8月19日～2003年（平成15年）3月28日				

遺　跡　名	五十川遺跡第11次調査		遺跡調査番号	0314	
遺　跡　略　号	GJK-11		調　査　地　地　籍	南区五十川2丁目地内	
開　発　面　積	-m ² 、	調査対象面積	-m ²	調　査　面　積	1,368m ²
調　査　期　間	2003年（平成15年）5月15日～2004年（平成16年）1月31日				

本文目次

第一章 はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
第二章 遺跡の地理的位置と歴史的環境	2
1. 五十川遺跡の位置と周辺遺跡	2
2. 五十川遺跡のこれまでの調査	2
3. 御供所井尻線予定地内の五十川遺跡の調査方法	6
第三章 A区の調査	7
1. 調査の概要	7
2. 積穴住居跡	7
3. 挖立柱建物	10
4. 井戸	10
5. 土坑	11
6. 溝状造構	19
7. 柱穴・造構検出面出土遺物	26
8. 小結	26
第四章 B区の調査	29
1. 調査の概要	29
2. 貯藏穴 (SG)	31
3. 溝 (SD)	34
4. 挖立柱建物 (SB)	42
5. 旧石器	43
6. その他の遺物	43
7. 小結	43
附論、五十川遺跡第10次調査B調査区出土の剥片石器群について (板倉有大)	45
第五章 C区の調査	53
1. 調査の概要	53
2. 積穴住居跡	54
3. 石棺墓	59
4. 土坑	61
5. 貯藏穴	66
6. 溝状造構	73
7. 柱穴・包含層・造構検出面出土遺物	83
8. 小結	84
第六章 D区の調査	91
1. 調査の概要	91
2. 土坑	91
3. 溝状造構	95

4. 小結	100
第七章 E区の調査	103
1. 調査の概要	103
2. 弥生時代の遺構と遺物	105
3. 古墳時代の遺構と遺物	107
(1) 方形周溝墓	107
(2) 土坑	110
4. 中世の遺構と遺物	111
5. その他の出土遺物	114
6. 小結	114
第八章 F区の調査	117
1. 調査の概要	117
2. 弥生時代～古墳時代の遺構と遺物	118
(1) 竪穴住居	118
(2) 溝状遺構	134
(3) 木棺墓	135
(4) 土壙墓	140
(5) 銀棺墓	141
(6) 貯蔵穴	148
(7) 土坑	164
(8) その他の遺構	178
3. 古代の遺構と遺物	179
4. 中世の遺構と遺物	180
(1) 柱列・掘立柱建物	180
(2) 溝状遺構	180
(3) 土坑	186
5. その他の遺物	188
6. 小結	194
第九章 G区の調査	207
1. 調査の概要	207
2. 檜出遺構と出土遺物	208
(1) 竪穴住居	208
(2) 溝状遺構	210
3. 小結	210
付. 五十川遺跡における自然科学分析 (株式会社 古環境研究所)	213

挿図目次

Fig. 1	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
Fig. 2	五十川遺跡のこれまでの調査地点 (1/4,000)	4
Fig. 3	調査区周辺の古地図 (1/4,000)	5
Fig. 4	御供所井尻線予定地内の調査区割り図 (1/2,000)	6
A区		
Fig. 5	A区遺構全体図 (1/100)	(折り込み)
Fig. 6	A区西壁南北土層断面実測図 (1/50)	7
Fig. 7	SC1052竪穴住居跡出土状況実測図 (1/50)	8
Fig. 8	SC1052竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3・1/2)	9
Fig. 9	SB1001掘立柱建物出土状況実測図	10
Fig. 10	SE1071井戸出土状況実測図 (1/30)	10
Fig. 11	SE1071井戸出土遺物実測図 (1/3)	10
Fig. 12	SK1001土坑出土状況実測図 (1/30)	11
Fig. 13	SK1001・1005・1006・1008・1014・1018・1020・1051・1055・1057・1069・1081 土坑出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)	12
Fig. 14	SK1004土坑出土状況実測図 (1/30)	13
Fig. 15	SK1005・1020・1081土坑出土状況実測図 (1/30)	14
Fig. 16	SK1006土坑出土状況実測図 (1/30)	15
Fig. 17	SK1007土坑出土状況実測図 (1/30)	15
Fig. 18	SK1008土坑出土状況実測図 (1/30)	16
Fig. 19	SK1014土坑出土状況実測図 (1/30)	16
Fig. 20	SK1018土坑出土状況実測図 (1/30)	17
Fig. 21	SK1054土坑出土状況実測図 (1/30)	17
Fig. 22	SK1051・1057土坑出土状況実測図 (1/30)	18
Fig. 23	SK1055土坑出土状況実測図 (1/30)	19
Fig. 24	SK1069土坑出土状況実測図 (1/30)	19
Fig. 25	SK1070土坑出土状況実測図 (1/30)	19
Fig. 26	SD1002溝東西土層断面実測図 (1/20)	20
Fig. 27	SD1002溝内土器出土状況 (1/20)	20
Fig. 28	SD1002溝出土遺物実測図 1 (1/3・1/1)	21
Fig. 29	SD1002溝出土遺物実測図 2 (1/6・1/4)	22
Fig. 30	SD1003溝南北土層断面実測図 (1/20)	23
Fig. 31	SD1003溝出土遺物実測図 (1/3・1/2)	23
Fig. 32	SD1017・1053・1056溝出土遺物実測図 (1/3)	24
Fig. 33	SP1030・1031・1033・1061・1080出土遺物実測図 (1/3・1/1)	24
Fig. 34	遺構検出面・南半部遺構検出面出土遺物実測図 (1/3・1/2)	25
B区		
Fig. 35	B区周辺地形図 (1/300)	29

Fig.36	B区遺構配置図 (1/150)	30
Fig.37	貯蔵穴SG2008、2009、2010、およびSP2140 (1/30、1/40)	32
Fig.38	SG2008、2009出土遺物 (1/3、1/1)	33
Fig.39	SG2010出土遺物 (1/3、1/1)	34
Fig.40	溝 (SD) 平面図 (1/300) および土層図 (1/50)	35
Fig.41	SD2001出土遺物① (1/3、1/4)	36
Fig.42	SD2001出土遺物② (1/1、1/4)	37
Fig.43	SD2005、2007出土遺物① (1/3、1/4)	38
Fig.44	SD2005、2007出土遺物② (1/1)	40
Fig.45	掘立柱建物SB2011、2012、2013 (1/60)	41
Fig.46	B区出土旧石器 (1/1)	42
Fig.47	その他の出土遺物 (1/3、1/4)	44
Fig.48	ネガ面とポジ面の剥離角	47
Fig.49	剥片の最大長/最大幅	47
Fig.50	剥片、使用痕のある剥片、石鎌、石錐の最大幅と最大厚	47
Fig.51	剥片と使用痕のある剥片の最大厚	47
Fig.52	使用痕のある剥片 3種の刃先角	47
C区		
Fig.53	C区遺構全体図 (1/100)	(折り込み)
Fig.54	C区東壁南北土層断面実測図 (1/50)	53
Fig.55	SC3005竪穴住居跡出土状況実測図 (1/50)	54
Fig.56	SC3005竪穴住居跡出土遺物実測図 1 (1/3)	55
Fig.57	SC3005竪穴住居跡出土遺物実測図 2 (1/1)	56
Fig.58	SC3016竪穴住居跡出土状況実測図 (1/30)	57
Fig.59	SC3016竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3・1/1)	58
Fig.60	SC3066竪穴住居跡出土状況実測図 (1/30)	59
Fig.61	SX3038石棺墓出土状況実測図 (1/20)	60
Fig.62	SK3010土坑出土状況実測図 (1/30)	61
Fig.63	SK3010土坑出土遺物実測図 (1/3・1/1)	61
Fig.64	SK3011土坑出土状況実測図 (1/30)	62
Fig.65	SK3011土坑出土遺物実測図 (1/3・1/1)	62
Fig.66	SK3012土坑出土状況実測図 (1/30)	63
Fig.67	SK3035土坑出土状況実測図 (1/20)	63
Fig.68	SK3035土坑出土遺物実測図 (1/3)	64
Fig.69	SK3041土坑出土状況実測図 (1/30)	65
Fig.70	SG3002貯蔵穴出土状況実測図 (1/30)	66
Fig.71	SG3002・3017貯蔵穴出土遺物実測図 (1/3・1/2)	67
Fig.72	SG3017貯蔵穴出土状況実測図 (1/30)	68
Fig.73	SG3030貯蔵穴出土状況実測図 (1/30)	69
Fig.74	SG3030貯蔵穴出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)	70

Fig.75	SG3040貯蔵穴出土状況実測図(1/30)	71
Fig.76	SG3040貯蔵穴出土遺物実測図(1/3・1/2・1/1)	72
Fig.77	SD3001溝土層断面実測図(1/20)	73
Fig.78	SD3001溝出土遺物実測図(1/3・1/2)	74
Fig.79	SD3006溝出土遺物実測図1(1/3)	75
Fig.80	SD3006溝出土遺物実測図2(1/6・1/3)	77
Fig.81	SD3006溝出土遺物実測図3(1/1)	78
Fig.82	SD3006溝出土遺物実測図4(1/2・1/1)	79
Fig.83	SD3028溝出土遺物実測図1(1/3)	80
Fig.84	SD3028溝出土遺物実測図2(1/2・1/1)	81
Fig.85	柱穴出土遺物実測図(1/3・1/2・1/1)	82
Fig.86	包含層・遺構検出面・東壁拡張部出土遺物実測図(1/3・1/2・1/1)	83
D区		
Fig.87	D区遺構全体図(1/120)	92
Fig.88	SK4001土坑内遺物出土状況実測図(1/20)	93
Fig.89	SK4001土坑出土遺物実測図1(1/3)	94
Fig.90	SK4001土坑出土遺物実測図2(1/2・1/1)	95
Fig.91	SD4002溝東西壁土層断面実測図(1/30)	96
Fig.92	SD4002溝出土遺物実測図(1/3)	97
Fig.93	SD4004溝出土状況実測図(1/30)	98
Fig.94	SD4003・4004溝出土遺物実測図(1/3・1/2・1/1)	99
Fig.95	SD4005・4006・4007・4012東側拡張区出土遺物実測図(1/3)	100
E区		
Fig.96	E区位置図(1/1,500)	103
Fig.97	E区遺構配置図(1/100)	104
Fig.98	貯蔵穴SK-5007・5092・5093実測図(1/40)	105
Fig.99	SK-5007・5092出土遺物実測図(1/3)	106
Fig.100	方形周溝墓SD-5001実測図(1/100・1/40)	107
Fig.101	SD-5001出土遺物実測図(35は1/1、他は1/3)	108
Fig.102	方形周溝墓SD-5002実測図(1/100・1/40)	110
Fig.103	SD-5002出土遺物実測図(1/3)	110
Fig.104	土坑SK-5090・5091・5094実測図(1/40)	111
Fig.105	SK-5091・5094出土遺物実測図(1/3)	111
Fig.106	溝SD-5003・5006実測図(1/200・1/40)	112
Fig.107	SD-5003出土遺物実測図(1/3)	112
Fig.108	E区出土の石器実測図(55～57は1/2、他は1/1)	113
F区		
Fig.109	F区位置図(1/1,500)	117
Fig.110	弥生～古墳時代の遺構配置図(1/400)	118
Fig.111	F区遺構配置図(1/200)・土層略測図(1/40)	(折込み)

Fig.112	豊穴住居SC-6016・6018実測図（1/40）	119
Fig.113	SC-6016出土遺物実測図（1/3）	119
Fig.114	豊穴住居SC-6032実測図（1/40）	120
Fig.115	SC-6032出土遺物実測図（1/3）	121
Fig.116	豊穴住居SC-6033実測図（1/40）	122
Fig.117	SC-6033出土遺物実測図（1/3）	123
Fig.118	豊穴住居SC-6034実測図（1/40）	124
Fig.119	SC-6034出土遺物実測図Ⅰ（1/3）	125
Fig.120	SC-6034出土遺物実測図Ⅱ（1/3）	126
Fig.121	豊穴住居SC-6035平面図と土層図（1/40）	128
Fig.122	豊穴住居SC-6035断面図（1/40）	129
Fig.123	SC-6035出土遺物実測図（1/3）	129
Fig.124	豊穴住居SC-6036実測図（1/40）	130
Fig.125	SC-6036出土遺物実測図（1/3）	131
Fig.126	豊穴住居SC-6038実測図（1/40）	132
Fig.127	SC-6038出土遺物実測図（1/3）	132
Fig.128	豊穴住居SC-6707実測図（1/40）	133
Fig.129	SC-6707出土遺物実測図（1/3）	133
Fig.130	溝SD-6006・6008・6026実測図（平面は1/200、他は1/40）	134
Fig.131	SD-6006・6008出土遺物実測図（1/3）	135
Fig.132	F区の木棺墓・土塚墓・甕棺墓の配置図（1/100）	136
Fig.133	木棺墓SK-6015実測図（1/30）	137
Fig.134	SK-6015出土遺物実測図（1/3）	137
Fig.135	木棺墓SK-6079実測図（1/30）	138
Fig.136	SK-6079出土遺物実測図（1/3）	138
Fig.137	木棺墓SK-6080実測図（1/30）	139
Fig.138	SK-6080出土遺物実測図（1/3）	139
Fig.139	土塚墓SK-6071・6087実測図（1/40）	140
Fig.140	SK-6071出土遺物実測図（1/3）	140
Fig.141	甕棺墓SK-6011実測図（1/20）	141
Fig.142	SK-6011出土遺物実測図（1/8）	141
Fig.143	甕棺墓SK-6012実測図（1/20）	142
Fig.144	SK-6012出土遺物実測図（1/8）	142
Fig.145	甕棺墓SK-6030実測図（1/20）	143
Fig.146	甕棺墓SK-6077実測図（1/20）	143
Fig.147	SK-6077出土遺物実測図（1/8）	143
Fig.148	甕棺墓SK-6078実測図（1/20）	144
Fig.149	SK-6078出土遺物実測図（1/8）	144
Fig.150	甕棺墓SK-6081実測図（1/20）	145
Fig.151	甕棺墓SK-6082実測図（1/20）	145

Fig.152	SK-6082出土遺物実測図(1/8)	145
Fig.153	甕棺墓SK-6084実測図(1/20)	147
Fig.154	SK-6084出土遺物実測図(1/8)	147
Fig.155	甕棺墓SK-6086実測図(1/20)	147
Fig.156	SK-6086出土遺物実測図(1/8)	147
Fig.157	貯蔵穴SK-6002・6004・6007・6013・6014実測図(1/40)	149
Fig.158	SK-6002・6004・6007出土遺物実測図(1/3)	150
Fig.159	SK-6013・6014出土遺物実測図(1/3)	152
Fig.160	貯蔵穴SK-6044・6057・6062・6063実測図(1/40)	153
Fig.161	SK-6044・6057出土遺物実測図(1/3)	154
Fig.162	SK-6062・6063出土遺物実測図(1/3)	156
Fig.163	貯蔵穴SK-6073実測図(1/40)	157
Fig.164	SK-6073出土遺物実測図(1/3)	157
Fig.165	貯蔵穴SK-6076実測図(1/40)	158
Fig.166	SK-6076出土遺物実測図(1/3)	159
Fig.167	貯蔵穴SK-6083・6088・6090・6091・6092・6094実測図(1/40)	161
Fig.168	SK-6083・6088・6091・6094出土遺物実測図(1/3)	162
Fig.169	貯蔵穴SK-6703・6708・6710実測図(1/40)	163
Fig.170	SK-6703・6710出土遺物実測図(1/3)	163
Fig.171	土坑SK-6003・6009・6019・6022・6023・6045実測図(1/40)	165
Fig.172	SK-6009出土遺物実測図(1/3)	166
Fig.173	SK-6045出土遺物実測図I(1/3)	167
Fig.174	SK-6045出土遺物実測図II(1/3)	168
Fig.175	土坑SK-6046・6048・6051・6050・6061実測図(1/40)	170
Fig.176	SK-6046・6048・6051・6060出土遺物実測図(1/3)	171
Fig.177	土坑SK-6064～6068・6072・6089実測図(1/40)	173
Fig.178	SK-6064～6068・6072・6089出土遺物実測図(1/3)	175
Fig.179	土坑SK-6093・6704実測図(1/40)	177
Fig.180	SK-6704出土遺物実測図(1/3)	177
Fig.181	性格不明造構SX-6041実測図(1/40)	178
Fig.182	SX-6041出土遺物実測図(1/3)	178
Fig.183	溝SD-6701実測図(1/40)	179
Fig.184	SD-6701出土遺物実測図(1/3)	179
Fig.185	中世の造構配置図(1/400)	180
Fig.186	柱列SA-6096・掘立柱建物SB-6095実測図(1/60)	181
Fig.187	溝SD-6010・6017・6025・6031・6040・6054・6055・6058実測図(1/40)	183
Fig.188	SD-6010・6031出土遺物実測図(1/3)	184
Fig.189	SD-6040・6054・6055・6058出土遺物実測図(1/3)	185
Fig.190	土坑SK-6050・6702実測図(1/40)	187
Fig.191	SK-6050・6702出土遺物実測図(1/3)	187

Fig.192 その他の土器・土製品実測図 (1/3)	188
Fig.193 F区出土の石器実測図 I (1/2)	190
Fig.194 F区出土の石器実測図 II (1/3)	191
Fig.195 F区出土の石器実測図 III (1/3)	192
Fig.196 F区出土の石器実測図 IV (1/3) • ガラス玉実測図 (1/1)	193
G区	
Fig.197 G区遺構配置図 (1/100)	207
Fig.198 土層略測図 (1/40)	207
Fig.199 G区位置図 (1/1,500)	207
Fig.200 竪穴住居SC-7003・SX-7005・7006実測図 (1/40)	208
Fig.201 SC-7003・SX-7005・7006出土遺物実測図 (1/3)	209
Fig.202 溝SD-7002・7004・7011実測図 (1/40)	210

付図 五十川遺跡第10次・11次調査区位置図 (1/500)

図版目次

- 卷頭図版 1 1. 第10次調査 C区土壤墓SK-3035（東から）
2. 第10次調査 C区方形周溝墓SD-3006出土土器

- 卷頭図版 2 1. 第11次調査 F区北半部全景（南東から）
2. 第11次調査 F区南半部全景（南東から）

A区

- PL. 1 1. 調査区北東部出土状況（南から） 2. 調査区南東部出土状況（北西から）
3. 調査区北西部出土状況（南東から）
PL. 2 1. 調査区北東部出土状況（東から） 2. SC1052出土状況（南から）
3. SK1069出土状況（東から） 4. SK1001出土状況（北から）
5. SK1054出土状況（西から）

B区

- PL. 3 1. B区調査区西半（南から） 2. B区調査区東半（北から）
PL. 4 1. 貯藏穴SG2008（東から） 2. 貯藏穴SG2010（北東から）
3. 溝群（北東から）
PL. 5 1. SD2001（北から） 2. SD2005、2007（北東から）
3. SD2005、2007土層（北から）

C区

- PL. 6 1. 調査区東端部遺構出土状況（北西から） 2. 調査区北東部遺構出土状況（南から）
3. SC3005、SG3002・3017出土状況（西から）
PL. 7 1. SG3002、SK3011出土状況（南東から） 2. SG3017出土状況（西から）
3. SG3002、SK3010出土状況（南から）
PL. 8 1. SC3005、SG3002・3017出土状況（南から） 2. SD3006内土器出土状況（西から）
3. SD3006内土器出土状況（北から）
PL. 9 1. SX3038出土状況（西から） 2. SX3038出土状況近影（西から）
3. SX3038出土状況（蓋除去後）（北から）
PL. 10 1. 調査区西部遺構出土状況（南東から） 2. 調査区西端部遺構出土状況（南から）
3. SG3030出土状況（西から） 4. SD3028内土器出土状況（北から）
PL. 11 1. SK3035出土状況（東から） 2. SK3035の東側土器群（北から）
3. SP3068出土状況（西から）

D区

- PL.12 1. 調査区南部遺構出土状況（北から） 2. 調査区全景（南から）
3. SD4004出土状況（西から）
PL.13 1. SD4002出土状況（東から） 2. SD4002出土状況（西から）
3. SD4002東壁土層断面（西から） 4. SK4001遺物出土状況（北から）

E区

- PL.14 1. E区遠景（北西から）※作業中の現場はF区 2. E区全景（南東から）
PL.15 1. 貯藏穴SK-5007（中央）・5092（手前）・5093（奥）（北東から）
2. 貯藏穴SK-5092（南西から） 3. 貯藏穴SK-5007土層断面（南東から）

4. 方形周溝墓SD-5001土層断面（東から） 5. 土坑SK-5094（北から）
 6. 溝SD-5003土層断面（南から）

F区

- | | | |
|-------|---|---|
| PL.16 | 1. F区北半部全景（北西から） | 2. F区北半部全景（南東から） |
| PL.17 | 1. F区南半部全景（北から） | 2. F区南半部全景（南から） |
| PL.18 | 1. F区東全景（西から） | 2. F区北半部調査風景（北西から） |
| PL.19 | 1. 積穴住居SC-6032（南から）
3. 積穴住居SC-6034・6035（南東から）
5. 積穴住居SC-6033・6036（北西から） | 2. SC-6032遺物出土状況（南から）
4. SC-6034遺物出土状況（西から）
6. SC-6036遺物出土状況（南から） |
| PL.20 | 1. 弥生時代溝SD-6006・6008（南東から）
3. 木棺墓SK-6015（東から）
5. 木棺墓SK-6080棺材圧痕（北西から） | 2. SD-6006E-F土層断面（南から）
4. 木棺墓SK-6079（東から）
6. 木棺墓SK-6080完掘後（北西から） |
| PL.21 | 1. 土壙墓SK-6071（東から）
3. 蓋棺墓SK-6011（南東から）
5. 蓋棺墓SK-6077・6078（南西から） | 2. F区南半部の蓋棺墓群（南西から）
4. 蓋棺墓SK-6012（北西から）
6. 蓋棺墓SK-6078（南西から） |
| PL.22 | 1. 蓋棺墓SK-6081（北東から）
3. 蓋棺墓SK-6084（東から）
5. 貯蔵穴SK-6002（北東から） | 2. 蓋棺墓SK-6082（南東から）
4. 蓋棺墓SK-6086（南から）
6. 貯蔵穴SK-6004（西から） |
| PL.23 | 1. 貯蔵穴SK-6013・6014（北から）
3. 貯蔵穴SK-6073（北から）
5. 貯蔵穴SK-6076完掘後（西から） | 2. 貯蔵穴SK-6057・6710（西から）
4. 貯蔵穴SK-6076土層断面（西から）
6. 貯蔵穴SK-6083（西から） |
| PL.24 | 1. 貯蔵穴SK-6088土層断面（西から）
3. 貯蔵穴SK-6094（西から）
5. 土坑SK-6009（東から） | 2. 貯蔵穴SK-6091（北西から）
4. 貯蔵穴SK-6708（北から）
6. 土坑SK-6045（北から） |
| PL.25 | 1. 土坑SK-6048・6050（南から）
3. 中世溝SD-6010・6040・6054・6055（北から）
5. 溝SD-6040（北から） | 2. 古代溝SD-6701（南から）
4. 溝SD-6010土層断面（北西から）
6. 中世溝SD-6040土層断面（南から） |
| PL.26 | F区出土遺物 I | |
| PL.27 | F区出土遺物 II | |
| G区 | | |
| PL.28 | 1. G区全景（南から）
3. 積穴住居SC-7003遺物出土状況（南西から） | 2. 積穴住居SC-7003遺物出土状況（北東から） |
| PL.29 | 1. 性格不明遺構SX-7005（東から） | 2. 性格不明遺構SX-7006（東から） |

表 目 次

第一章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市では文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存をはかるため、公共・民間の各種開発事業に対する事前審査を行い、これが損なわれる場合には記録保存のための緊急調査を実施している。平成13年8月1日、福岡市土木局道路建設部南部建設課より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課あてに、福岡市南区五十川2丁目の「都市計画道路御供所井戸尻道路整備事業」地内における埋蔵文化財の有無についての事前審査依頼があった。申請地は福岡市文化財分布地図上では五十川遺跡群に含まれ、周辺部では過去に数度の発掘調査も行っており、地下に遺跡の存在する可能性が高いものと推定した。このため埋蔵文化財課では、確認調査が可能な部分に対し同年10月31日、平成14年1月23日、7月23日に順次トレント調査を実施し、地表下50cm以下で遺構を検出し、台地部分についての発掘調査が必要となると判断した。この結果を踏まえて申請者と協議を行い、用地買収後、既存建物の解体が終了し、ある程度の面積が確保できた段階で順次発掘調査を行うこととした。五十川遺跡の調査は平成14年8月19日より開始し、その後断続的に平成17年6月3日まで第10次・11次・13次・14次の4次にわたりて行い、未買収地300m²を残し中断している。

発掘調査は、第10次調査を平成14年8月19日～平成15年3月28日に、第11次調査を平成15年5月15日～平成16年1月31日に、整理報告書作成を平成19年度に、ともに土木局の令達事業として埋蔵文化財課が行った。なお、第13・14次調査については平成20年度に報告予定である。

2. 調査の組織

調査にあたり地元の皆様にご理解とご協力を頂いた。平成14～15及び19年度の組織は以下の通り。

調査委託 福岡市土木局道路建設部南部建設課

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 生田征生（調査時）、山田裕嗣

調査総括 埋蔵文化財課長 山崎純男（調査時）、山口謙治（現：埋蔵文化財第1課）

調査第2係長 田中壽夫（調査時）、米倉秀紀（現：調査係）

調査庶務 文化財整備課管理係 御手洗 清（調査時）、鈴木由喜（現：文化財管理課）

調査担当 事前審査係（試掘・協議担当）大塚紀宣、田上勇一郎（調査時）、星野恵美

調査第2係 横山邦繼・上角智希（第10次）、吉武 学（第11次）

調査協力 板口剛毅（技能員）、池田省三、一ノ瀬フミヨ、一宮義幸、伊藤ミドリ、伊藤美伸、乾俊夫、上野龍夫、牛尾與志輔、浦伸英、江島光子、大塩皓、海津宏子、加藤常信、唐島栄子、川岡涼子、倉光政彦、香田信子、坂下達男、佐藤俊治、嶋ヒサ子、清水明、其田昌洋、大長正弘、高野瑛子、高橋茂子、横良平、横智子、谷英二、谷正則、遠山歎、徳永静雄、中園登美子、永松トミ子、中村尚美、西田文子、布江孝子、税所篤英、

野口ミヨ、野田淳一、土生ヨシ子、林厚子、平川正夫、廣田安平、藤原直子、前山政義、

松永重子、満田雅子、三浦力、宮川ヤエ子、宮崎タマ子、三好道子、持丸玲子、

森田祐子、森本良樹、山内恵、山崎光一、山下智子、山田ヤス子、大和育江、大和武史、

結城フチ子、吉住政光、吉田恭子、吉田米男（五十音順、敬省略）

整理協力 板倉有大・田中克子（技能員）、青木悦子、久家春美、四反田美香子、下山慎子、副田則子、荻尾朱美、花田友美子、松田弘子、森 寿恵、八代和美（五十音順、敬省略）

第二章 遺跡の地理的位置と歴史的環境

1. 五十川遺跡の位置と周辺遺跡 (Fig.1)

背振山系と東平尾丘陵に挟まれた福岡平野中央部には、御笠川・那珂川等の河川により形成された洪積中位段丘面の断続的な連なりが東西に2列認められる。福岡市博多区博多駅南から那珂、南区五十川、井尻、寺島、春日市須玖、下白水を経て那珂川町安徳にのびる面と、福岡市博多区板付から諸岡、麦野、元町を経て春日市春日原に達する面で、これらは地質学上須玖面と呼ばれ、主に阿蘇山起源の広域テラであるAso-4火碎流堆積物によって構成され、沖積低地から3~20mの比高差を有する平坦な台地となっている。五十川遺跡はこのような低平な独立台地のひとつに立地するが、この台地は南北約800m、東西240mほどの広さを持ち、標高9~11mで北へ緩やかに傾斜している。周囲は沖積低地に囲まれているが、北端は鞍部を介して更に北へ台地が広がり、ここには那珂・比恵遺跡群が立地している。他方、狭い谷を挟んだ南側の台地上には井尻B遺跡群が隣接する。

北方の那珂・比恵遺跡群は、水稻耕作の始まりとともにまず台地縁辺部に集落が営まれ、以後、弥生時代中期、古墳時代前期、古代をピークとして遺構が営まれる。特に弥生時代中期には樹林を伐採して台地中央部に集落が拡大するが後期には一旦衰え、終末にかけて新たな大規模開発が始まり、那珂八幡古墳を中心とした意図的な墓地エリアや集落エリアの配置が認められる。5~6世紀には集落が減少するが、6世紀中葉に東光寺創建前後円墳が営まれたのち、後半~末にかけて集落が再び拡大する。これらの一部では強制的に集落が撤去され、那津宮家や那珂評衛・郡衙などの官衙とも推定される大型掘立柱建物群や柱列、溝などが規則的に配置されるようになる。

南方の井尻B遺跡群では先土器時代や弥生時代前期の遺物が台地縁辺部で出土するが、弥生時代後期前半までの遺構・遺物はさほど多くなく、後期後半になって青銅器生産を伴う集落が大規模に営まれる。集住の状況は古墳時代前期まで続き、中期には古墳群が営まれる。7世紀末から奈良時代には台地北部を縦横に走る正方位の溝が確認され、瓦や「寺」と刻んだ須恵器等が出土するなど、寺院跡もしくは官衙が存在した可能性が指摘されている。

東方には諸岡A遺跡群、次いで同B遺跡群が位置し、ナイフ形石器など先土器時代包含層、縄文時代晚期住居、弥生時代の貯蔵穴・甕棺墓地、古墳時代墓地、諸岡館跡をはじめとする中世集落や地下水式土壙等を確認しており、これらに伴ってゴホウラ製貝輪や朝鮮系無文土器が出土したほか、台地縁辺部では突堤式土器が出土することがこれまでの調査で判明している。

一方、西方は河川氾濫原となり、那珂川西岸の丘陵部あたりまで広く遺跡の空白地域となっている。

2. 五十川遺跡のこれまでの調査 (Fig.2, Tab.1)

分布地図と一覧表に示したとおり、五十川遺跡では現在第15次までの発掘調査が終了している。ただし、今回の道路予定地と第1次調査を除けば、いずれも民間宅地開発に伴う1,000m²以下の小規模な調査に留まっている。五十川遺跡ではこれまでに弥生時代から中~近世までの遺構を確認しているが、集落が連続して展開する様相をみせず、各時期の遺構が散発的に点在しているという印象が強い。今回の調査では弥生時代前期から中期前半まで継続した集落と墓地、古墳時代前期の集落と墓地が一組みとなって確認でき、特定の時期に五十川遺跡へ集住する状況のあったことが分かった。隣接する那珂・比恵遺跡群や井尻B遺跡群等との関係について論じる基礎資料を得ることができたと言えよう。

報告と前後するが今回の調査成果を含めて五十川遺跡の概要を見てみたい。先土器時代の遺物が今回第10~14次で少量出土し、統いて南西(第10~11次)と北東(第1~2次)の台地端部に弥生時



1. 五十川遺跡群（●は調査地点）、2. 久保園遺跡、3. 唐田大谷遺跡群、4. 宝満尾遺跡、5. 鶴居遺跡、6. 東都河遺跡、7. 下月隈C遺跡群、8. 立花B遺跡群、9. 井相田C遺跡群、10. 那珂君休遺跡、11. 枚付遺跡、12. 枚付東遺跡、13. 高畠遺跡、14. 芙哥A遺跡群、15. 虎野D遺跡群、16. 南八幡遺跡群、17. 楠岡A遺跡群、18. 楠岡B遺跡群、19. 三筑遺跡、20. 相原遺跡群、21. 山王遺跡、22. 北熊遺跡群、23. 那珂遺跡群、24. 井尻A遺跡群、25. 井尻B遺跡群、26. 井尻C遺跡群、27. 寺島遺跡群、28. 須玖遺跡群、29. 佐永原遺跡群、30. 横手遺跡群、31. 白佐遺跡群、32. 館山B遺跡群、33. 舞間A遺跡、34. 舞間B遺跡、35. 大塚A遺跡、36. 大塚B遺跡、37. 大塚C遺跡、38. 大塚D遺跡、39. 大塚E遺跡、40. 三宅A遺跡、41. 三宅B遺跡、42. 三宅C遺跡、43. 和田田原池遺跡、44. 和田A遺跡、45. 和田B遺跡、46. 舞多目A遺跡群

Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

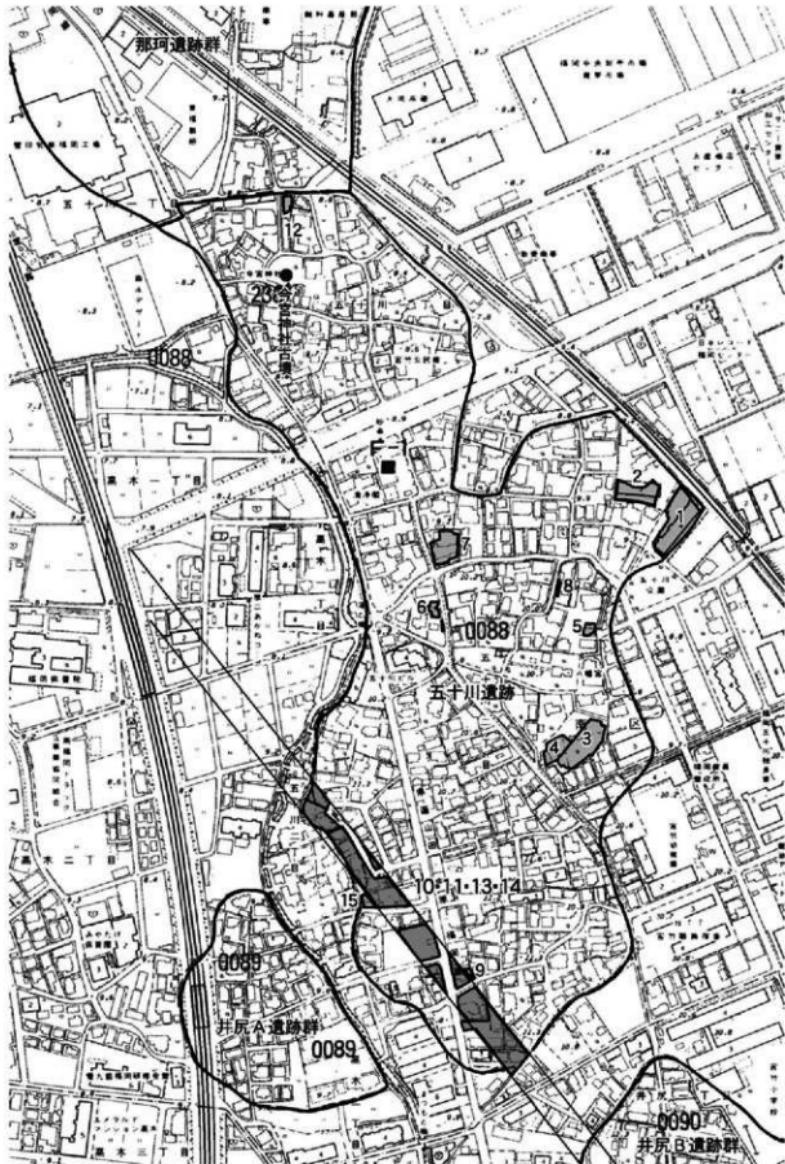


Fig.2 五十川遺跡のこれまでの調査地点 (1/4,000)

代前期前葉以降に集落が営まれ、前者では中期前葉まで継続する。中期後葉では北東部で土器が出土するものの遺構はなく、同後期には第3次で住居・建物各1があるのみ。古墳時代前期には第1～4次と本道路予定地の調査で集落・墓地を確認しており、台地上に広く遺構が展開する可能性がある。古墳時代中期の遺構・遺物はなく、後期になると再び集落が前期程度の広がりを示すとみられる。古代には台地上の各所で溝等の遺構が確認でき、瓦が出土する地点もある。中世前半の遺構は希薄だが、後半になると溝を中心とする遺構が多くみられ、溝の一部は居館に伴う堀と考えられる。

Tab.1 五十川遺跡発掘調査一覧

調査 回数	調査 番号	調査面 積(㎡)	調査期間	主な検出遺構/特記すべき出土遺物	報告書
1	7502	1,449	1973.1.22～3.10	弥生・古墳 古代－溝+土坑、中世前半－井戸／古代瓦+黒陶石器	市報363巻
2	8338	681	1983.4.25～6.18	弥生前半－住居+溝、古墳前期－住居+井戸、中世－建物+溝	市報111巻
3	9538	905	1985.11.6～1986.1.9	弥生中期－貯蔵穴、後期－住居+建物、古墳前期－土坑、後期－建物、古代－井戸+土坑、中世後半－溝+井戸+土坑(土坑墓合2)／鉄物	市報570巻
4	9704	285	1997.4.8～5.6	古墳前期－井戸、中世(14～15c)－溝+建物+土坑	市報570巻
5	9757	96	1997.12.4～12.11	古墳後期－溝+住居建物	市報720巻
6	9835	127	1998.9.24～9.30	古代－建物、近世－土坑	市報720巻
7	9837	510	1998.10.1～11.10	古墳－土坑、中～近世－建物+土坑+溝	市報720巻
8	9846	19	1998.11.6～11.10	時期不詳－土坑	市報720巻
9	0215	42	2002.5.10～5.29	弥生・木棺墓、中世－溝+井戸?／古代瓦	市報733巻
10	0229	1,100	2002.8.19～2003.3.28	弥生前期－住居+溝+貯蔵穴+土坑、中期－住居+溝、古墳前期－凹壠+方形簡溝墓+石棺墓、後期－住居+溝、古代－溝+土坑墓、中世後半－溝+土坑	本書
11	0314	1,368	2003.5.15～2004.1.31	弥生前～中期－住居+溝+貯蔵穴+土坑+木棺墓+土坑墓+櫛状墓、古墳前期－住居+土坑墓、後期－土坑、古代－溝、中世後半－建物+溝+土坑	本書
12	0407	150	2004.4.5～5.10	古墳後期－土坑、古代－溝、中世－溝ほか	年報19
13	0444	129	2004.8.2～8.31	古代－井戸、中世後半－溝+地下式窓+井戸+土坑	未報告
14	0481	961	2005.1.24～6.3	先土器－包含窓、弥生－貯蔵穴、古墳前期－土坑+井戸、古代－土坑、中世－建物+土坑	未報告
15	0610	2006.4.24～5.31	中世後期－溝ほか	未報告	



Fig.3 調査区周辺の古地図 (1/4,000)

3. 御供所井尻線予定地内の五十川遺跡の調査方法 (Fig.4)

五十川遺跡は南北約800m、東西約240m、標高9～11mほどの洪積中位段丘面上に立地し、北は鞍部を介して那珂遺跡群の立地する段丘面に連続するが、その他は沖積地に囲まれて独立した台地となる。今回の道路用地はこの台地の南西端を斜めに貫通する。用地内の事業前の状況は戸建てを主とする住宅地であり、これらの用地買収と解体が終了し、ある程度まとまった面積が確保された段階で発掘調査に着手していった。調査は平成14年度に開始したが、用地買収の関係等から断続的となり、平成17年度までの4年にわたり都合4回の発掘調査を実施した。

調査次数は年度で区別した。対象地は生活道路等によって寸断されるため、区画ごとに調査区を設定したが、調査区の呼称は調査次数を問わず着手順にAからIまでアルファベットを付した。平成14年度（調査番号0229）の第10次調査ではA～D区、同15年度（0314）の第11次調査ではE～G区、同16年度（0444）の第13次調査ではH区、同16～17年度（0481）の第14次調査ではI区を対象とした。調査番号は調査区ごとに4桁の連番号を付した（A区：1001～、B区：2001～、…、I区：9001～）。うち、本書ではA～G区の報告を行い、H・I区については次年度に報告する予定である。

遺構実測の基準線は計画道路軸線をもとに設定し、土木局より国土座標データの提供を受けた。ただし埋蔵文化財課保管の『博多区・南区内（那珂～井尻地区）遺跡基準点測量委託 四級基準点測量成果簿（平成6年2月）』の成果データとは若干の誤差があったため、後者の数値を使用して国土座標（第2系）に位置づけている。

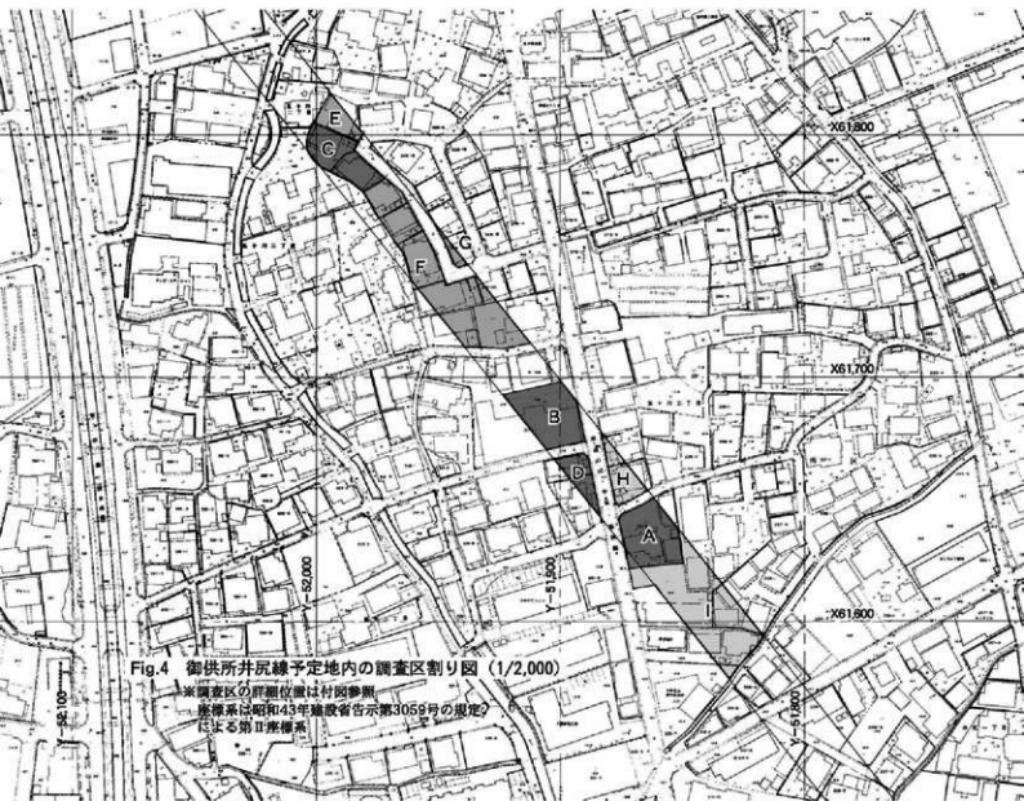


Fig.4 御供所井尻線予定地内の調査区割り図 (1/2,000)

*調査区の詳細位置は付図参照

座標系は昭和43年建設省告示第3059号の規定による第2座標系



Fig.5 A区遺構全体図 (1/100)

第三章 A区の調査

1. 調査の概要

A調査区は、五十川遺跡の丘陵南端付近に位置し、南方の井尻遺跡と浅い谷を挟んで近接する。地形的には南側に緩く傾斜する丘陵裾部分にあたる。

調査は区域内での排土処理が必要であったために先ず南半部の調査を行い、続いて北半部を打って返し、調査を行った。

本調査区の土層基本層序は、厚さ約30~20cmの表土（砂礫層）下に厚さ20~30cmの黒褐色~茶褐色粘質土が続き地山の鳥栖ロームへ至るもので、表土下50~60cmで遺構が検出される（Fig.6）。

また、地表面の状況は、自然地形が複雑にあることを示している。

調査で検出された主な遺構は、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物1棟、井戸1基、土坑16基、溝状遺構8基などである。

遺構の調査にあたっては、検出時に遺構平面形の確定とともに埋土の違いについても観察を行い、掘り下げを行った。

各遺構の埋土は、黒褐色土、茶褐色土、暗褐色土、黄褐色土などが区別できるが、このうち明らかに遺構と判断できるものでは黒褐色土や茶褐色土が殆どであり、他は後世の攪乱坑が多い。さらに、遺構の掘り下げの結果、黒褐色の埋土をもつ遺構が全体として古い時期の所産であることが明らかとなった。

特徴的な遺構としては、6世紀末のカマドをもつ方形竪穴住居SC1052や幅広の区画溝と考えられるSD1002、円形古墳の周溝と考えられるSD1003などがある。また、墳墓的な長方形の形状をなす土坑SK1001・1055・1069などが知られる。

また、遺物では、溝SD1002から6世紀末から7世紀初めにかけての大型甕などの須恵器類、中世期の型押し青白磁・フイゴ羽口などが出土した。さらに遺構検出面出土の遺物には少量ではあるが、古墳時代土器や小型の土師皿、龍泉窯青磁碗などが採集された。

このようにA調査区では、検出遺構・出土遺物から古墳時代後期から中世期にかけての生活跡・墓地が明らかとなった。

2. 竪穴住居跡（Fig.5・7・8、PL.1・2）

本住居跡は、調査区の南東隅に検出された。平面プランは、隅丸長方形を呈する。東壁及び南壁下には幅員50~60cmのベッド状遺構が伴う。

また、主柱穴は4本と考えられ、東壁に沿った2本と西壁寄りの1本である。柱間は、2m前後を測り、掘り方も10cm弱を残す。柱痕は、15cm程度である。

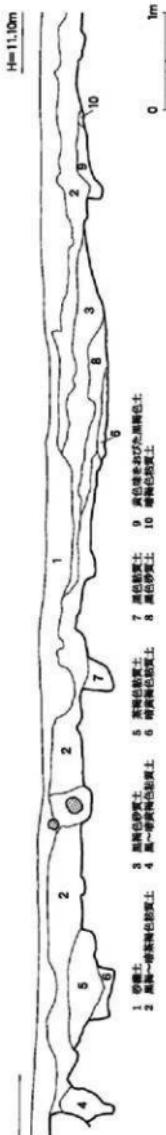


Fig. 6 西豊南北土層断面実測図 (1/50)

また、壁規模は、東辺4.85m・西辺4.3m・南辺3.8m・北辺4.2mで、壁高はほぼ30cm程度を残し、西壁に作り付けのカマドが認められる。全体に壁の立ち上がりも緩く、断面は皿状の様相である。

出土遺物（Fig.8）01007は口縁がやや肥厚して外反する土師器甕破片である。外面に荒いタテハケメ、口縁部内外にナデ、胴部内面はヘラケズリである。01005も口縁の立ちあがった土師器甕である。頸部に荒いハケメ、口縁部内外はハケメ後にナデか。胴部はヘラケズリを残す。口径17.6cmを測る。01010はやや小型の土師器甕である。外反する短い口縁部をもつ。外面はタテ・ヨコ方向のナデ調整が残る。また、内面胴部には指オサエが見られる。胴部下半には使用時のススが付着する。口径14.5cmを測る。カマドに据え置きの甕である。01004は土師器鉢である。口縁は直立し、外面にナデ調整が残る。器色は灰褐色を呈する。口径15.9cmを測る。01006は土師器大型瓶である。口縁・底部を欠失する。器色は外面灰白色、内面淡赤橙色を呈する。内面にヘラケズリ調整を残す。

01001は須恵器杯蓋である。天井部に「×」印かと思われるヘラ記号を残す。外面天井部に回転ヘラケズリ、他はヨコナデである。口径14cmを測る。01009も須恵器杯蓋である。丸味を持った低い胴

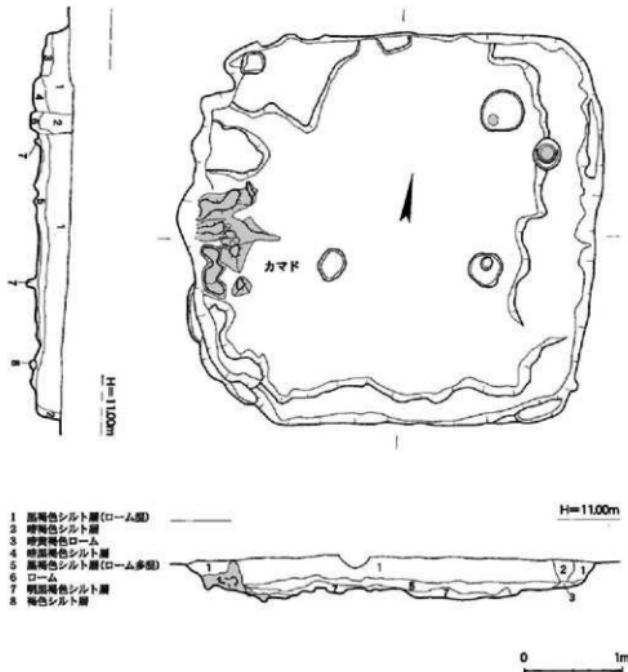


Fig.7 SC1052整穴住居跡出土状況実測図 (1/50)

部を有する。天井部に回転ヘラケズリ、他はヨコナデである。ロクロは時計回りである。口径14.2cmを測る。器色は青灰色を呈し、焼成は堅緻である。カマド周辺出土。

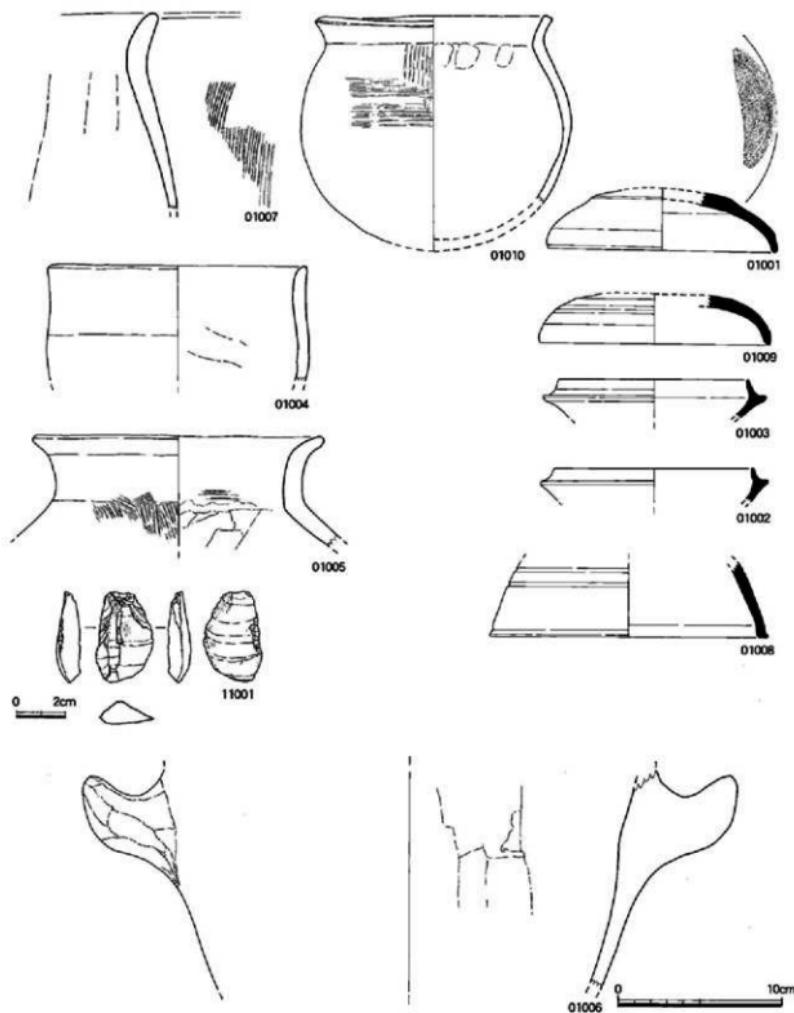


Fig.8 SC1052堅穴住居跡出土遺物実測図 (1/3・1/2)

01003は受け部立ち上がりの低い須恵器杯である。調整は内外面ともにヨコナデである。器色は外面が灰白色、内面灰褐色を呈する。焼成は堅緻である。口径13.6cmを測る。

01002も立ち上がりの低い須恵器杯である。外面胴部は灰被りである。調整は内外ともにヨコナデである。器色は明るい青灰色を呈する。口径13.9cmを測る。01008は須恵器高杯脚である。下端部は平坦で、上部に沈線を2条巡らす。調整は内外ともにヨコナデである。器色は外面が青色、内面暗青色を呈する。底部径17cmを測る。カマド周辺出土。11001は主要剥離面の側面に二次加工を施す剥片である。黒曜石製。埋積時の混入品である。

3. 挖立柱建物 (Fig.5・9・33)

建物は、調査区の南側中央に検出された規模 1×2 間の東西棟のものである。小型倉庫と考えられる。

規模は、梁間全長2.8m、桁行き全長3mを測り、柱痕は15~25cm程度である。

出土遺物 (Fig.33) 01070は、当該建物の時期を示すものではないが、弥生中期初頭の甕底部である。底部は非常に分厚く、外底は上げ底をなす。底部径7.1cmを測る。他に土師器破片も出土した。南側桁行き中央柱穴出土。

4. 井戸 (Fig. 5・10・11)

井戸SE1071は、調査区の南西隅で検出された。径が65~70cmを測る不整円形の平面プランを呈し、深さ1.4mを残す。底面は丸く、埋土から土師器甕・高杯などの破片が若干出土した。

出土遺物 (Fig.11) 01054は、土師器小型甕である。

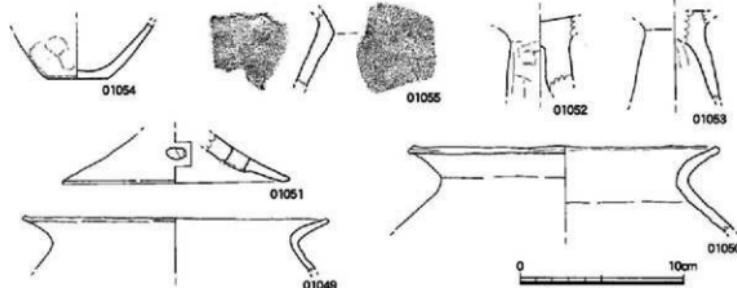


Fig.11 SE1071井戸出土遺物実測図 (1/3)

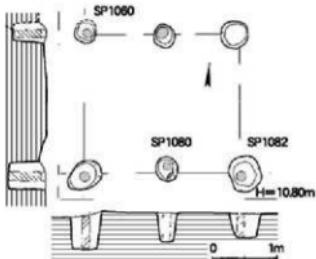


Fig.9 SB1001掘立柱建物出土状況実測図

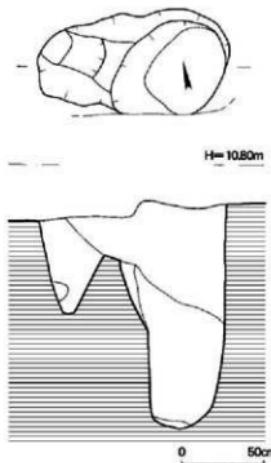


Fig.10 SE1071井戸出土状況実測図(1/30)

不安定な底部を有し、調整はナデである。器色は鈍い橙色を呈する。焼成は堅緻である。底部径3.6cmを測る。

01055は、縄文時代晚期深鉢の胸屈曲部破片である。

器色は外面が明灰褐色、内面黒褐色を呈する。胎土には石英・長石

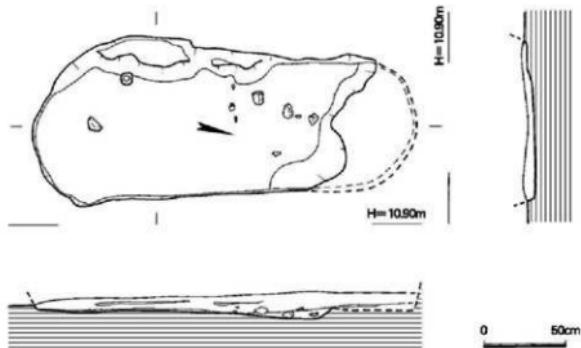


Fig.12 SK1001土坑出土状況実測図 (1/30)

礫を多量に混入する。焼成は堅緻である。磨滅のため器面調整は不詳である。01052は、土師器高杯脚部破片である。脚の外面は、縦のヘラナデで面取り状となる。また、内面はシボリで、杯部はナデが残る。器色は、内外面共に鈍い橙色を呈する。胎土に石英・長石粒を多量に混入する。焼成は堅緻である。脚頂部径3.6cmを測る。01053も土師器高杯脚部破片である。筒部は中央がやや膨らみ、裾部は外開する形態である。器色は、外面が灰褐色で、内面は鈍い橙色を呈する。器面調整は、外面が荒れのために不明、内面にはシボリが残る。胎土には石英・長石を多量に混入する。焼成は堅緻である。脚頂部径3.6cmを測る。01051は、土師器高杯脚部の破片である。緩やかに外開する脚である。器色は、外面が鈍い橙色、内面が灰黄褐色を呈する。器面調整は、板ナデか。脚中位に外面から焼成前の円形透かしを施す。胎土には石英・長石粒を若干混入する。焼成は堅緻である。脚部径14cmを測る。

01049は、薄手の土師器甕である。頸部は良くしまり、口縁は急激に外反する。器色は、外面が鈍い橙色、内面が黄灰色を呈する。器面調整は内外面共にヘラナデか。胎土には石英・長石粒を多量に混入する。焼成は堅緻である。口径18.8cmを測る。

また、01050は、01049と同様に頸部がよくしまり、急激に外反する口縁部内端が跳ね上げ状となる土師器甕である。器色は、外面が鈍い橙色、内面が鈍い黄褐色を呈する。器面調整は、外面の一部にヨコナデを残し、内面胴部は斜めのヘラケズリ調整を施している。胎土には石英・長石粒を若干混入する。焼成は堅緻である。口径19cmを測る。

5. 土坑 (Fig.5・12~25、PL.1・2)

土坑は、調査区の中央部を除く北側・南西側を中心として16基 (1001・1004~1008・1014・1018・1020・1051・1054・1055・1057・1069・1070・1081) が検出された。全体に削平を受けているため、残りは深さ20cm前後と非常に浅い。形状には隅丸長方形を呈するものが多く見られるが、副葬品を伴い、明確に墳墓と認められるものは少ない。

土坑SK1001 (Fig.12・13、PL.2) 本土坑は、調査区北端部に検出された隅丸長方形の土坑である。プランは、南側がやや広く、バチ形をなす。規模は、長軸長2.38m・短軸長が南端で1m・北端で0.8mを測る。また、深さは10~15cmを測る。隣接する東西溝SD1002を切る時期の所産である。坑内

埋土から土師器杯破片、自然角礫片など少量の遺物が出土した。

出土遺物 (Fig.13) 01035は、土師器杯破片である。器壁はやや分厚く、つくりは全体的に鈍い感じを受ける。器面の荒れのために調整は不詳であるが、底部はへら切りによる。器色は、内外面共に灰白色を呈する。胎土には石英・長石粒を少量混入する。焼成は堅緻である。口径14cm・器高3cm

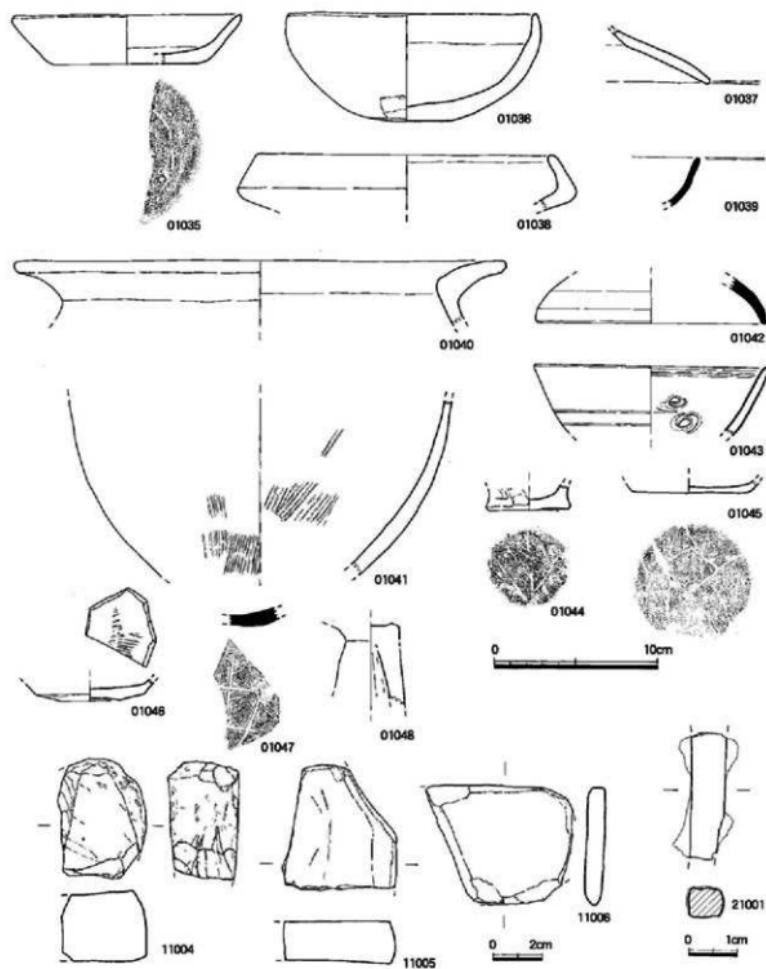


Fig. 13 SK1001・1005・1006・1008・1014・1018・1020・1051・1055・1057・1069・1081土坑出土遺物
実測図 (1/3・1/2・1/1)

を測る。

土坑SK1004 (Fig.14)

本土坑は、調査区北側で検出した不整形土坑である。規模は、南北長1.7m、東西最大長2.3mを測る。床面中央には1.1×0.6mを測る不整形な土坑が見られ、不安定な床面を形成する。全体には断面が緩い皿状を呈する。深さは中央部で15cm、周辺部で5cmを測る。埋土からは特に出土遺物はないが、形状から廃棄土坑の可能性が高い。

土坑SK1005 (Fig.15・13)

本土坑は、調査区の西壁で検出された隅丸長方形土坑である。南側に隣接してSK1020・1081と切り合いにあるが、出土遺物からこれらより新しい時期の所産と考えられる。

土坑はほぼ東西に軸を取り、西側を

完掘できていないが、東西長2m以上、南北幅1.2m、深さ0.7m規模のものである。側辺や短辺部には底面に至るまで段状の部分が顕著に見られ、床面が不安定であることから墳墓とは想定できない。土坑埋土からは、少量の土器類が出土している。

出土遺物 (Fig.13) 01036は、ほぼ完形の土師器碗である。底部は小さい平坦をなす。器面調整は、荒れのために不詳であるが、外面脚部の下半は板によるミガキ調整か。器色は、外面が褐灰色、内面が灰色を帯びた褐色を呈する。胎土には石英・長石粒を多量に混入する。焼成は堅緻である。口径15.2cm、器高5.6cmを測る。

01037は、土師器高杯の脚破片である。低く踏ん張る脚部である。器面の荒れのために調整は不明である。器色は、内外面共に鈍い橙色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。

01038は、弥生後期の二重口縁壺破片である。口縁は鈍く内傾し、端部は丸く收める。器面調整は、荒れのため不詳である。器色は、外面が黄橙色で、内面が鈍い橙色を呈する。また、胎土には多量の石英・長石粒を多量に混入する。焼成は堅緻である。口径18.2cmを測る。

土坑SK1006 (Fig.16・13)

本土坑は、調査区の北端部中央で検出した不整形土坑である。東西にコーナーが見られることから不整な長方形土坑である可能性もある。東西辺は延長が湾曲しているが、全長は2.8m程度で、南北辺長は0.7m以上、深さ0.15mを測る。

また、南辺に沿ってベッド状の高まりが確認できる。調査区外のため、北側の立ち上がりを確認できていないが、隣接する溝SD1002と切り合い関係にあると考えられる。残りが悪く、埋土からの出土遺物は少量である。

出土遺物 (Fig.13) 01039は、小型の須恵器杯身破片である。器面調整は、脚部下半にカキ目調整、口縁部内外面にはヨコナデを施す。器色は、内外面共に青灰色を呈する。胎土には石英粒を少量混入する。焼成は堅緻である。

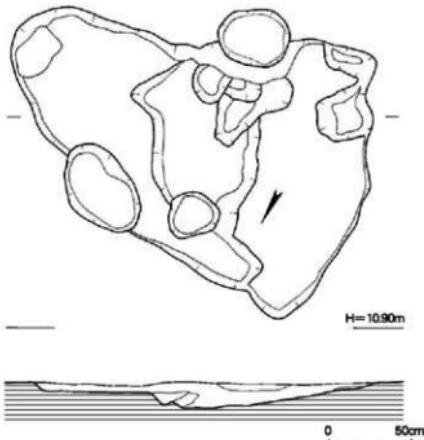


Fig.14 SK1004土坑出土状況実測図 (1/30)

— 13 —

01040は、土師器壺破片である。口縁部は内傾して「く」字に屈曲する。

器面調整は、内外面共にナデ調整か。胴部内面には斜めのヘラケズリが残る。器色は、内外面共に橙色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を多量に混入する。焼成は堅緻である。口径30cmを測る。

土坑SK1007 (Fig.17・13)

本土坑は、調査区の西側中央付近で軸をほぼ東西に向けて検出された。

土坑は、平面プランがほぼ隅丸長方形を呈し、長軸長で1.9m、短軸長0.65m、深さ7~10cmの規模である。床面はほぼ平坦をなす。

土坑SK1008 (Fig.18・13)

本土坑は、調査区の北東側に位置し、北西・南側の壁を後世の攪乱で失った隅丸長方形プランの大土坑である。規模は、南北長3m、東西長2.2m前後、深さ10~15cmを測る。埋土からの出土品は少

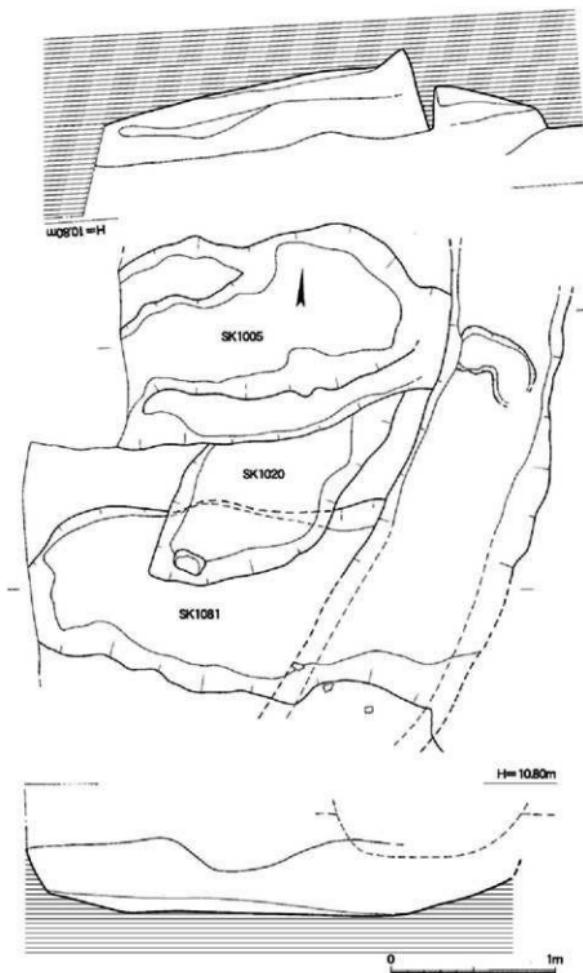


Fig.15 SK1005・1020・1081土坑出土状況実測図 (1/30)

量である。
形状から廃棄物処理坑の可能性がある。

出土遺物
(Fig.13)

01041は、
弥生後期土器壺破片で
ある。

器面調整は、内外面共に荒いタテハケメを
部分的に残す。

土坑SK1014 (Fig.19・13)

本土坑は、調査区の北端側中央に検出された不整円形土坑の断片と考えられる。溝SD1002に切られる遺構である。南北長1.7m以上、東西長2.5m、深さ5cm程度を測る。埋土からは時期を示す遺物は出土しなかったが、11004は一部に打痕をもつサスカイト自然礫である。

土坑SK1018 (Fig.20・13)

本土坑は、調査区の東壁際に検出された不整形土坑である。輪郭を追うことのできる東西長は1.9m、南北長1.2m以上と推定される。深さは15cm程度である。底面の断面は、緩く皿状をなす。埋土からは少量の土器類が出土した。実測に耐えるのは2点である。

出土遺物 (Fig.13) 01042は、須恵器杯蓋破片である。器高は低く、天井部を欠失する。器面調整は、内外面共にヨコナデを施す。器色は、外面が青灰色で、内面は明青灰色を呈する。

胎土には黒色の微粒子を若干混入する。焼成は堅緻である。口径14cmを測る。

01043は、龍泉窯系青磁碗である。内外面共に灰色を帯びたオリーブ釉を厚く掛ける。また、内外面共に水裂が著しい。外面の肩部下半には2条沈線を巡らす。また、口縁部内面には数条

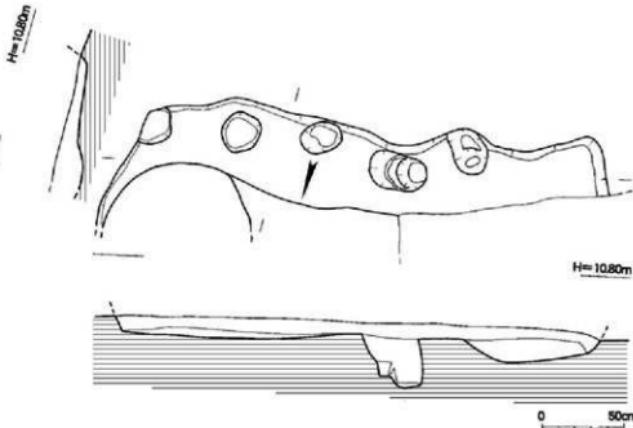
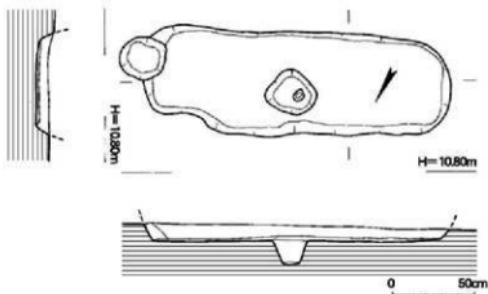


Fig.16 SK1006土坑出土状況実測図 (1/30)

Fig.17 SK1007土坑出土状況実測図 (1/30)



の条線を
施す。

また、
内面下部
にはヘラ
彫りの花
文を巡ら
す。露胎
部は、灰
白色を呈
する。

胎土は
柔く、焼
成もやや
軟質であ
る。口径
14.4 cmを
測る。

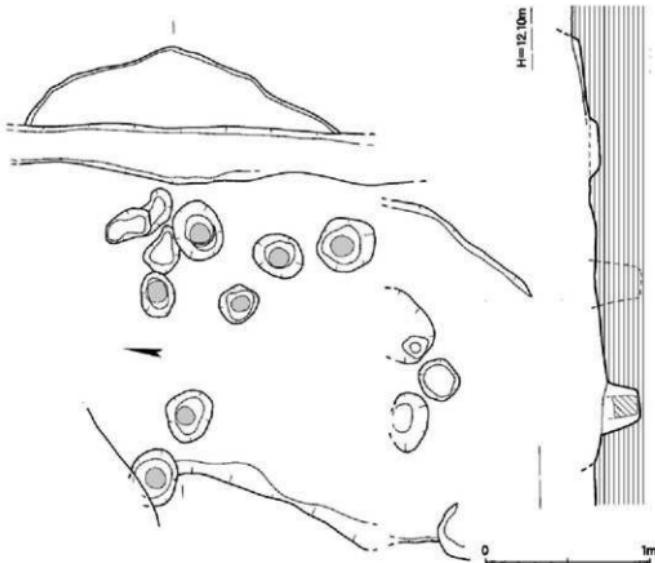


Fig.18 SK1008土坑出土状況実測図 (1/30)

土坑SK1020 (Fig.15・13)

本土坑は、調査区の西側壁で検出
した長円形土坑である。SK1008と切
り合いにあり、これよりも新しい時
期の所産である。また、南側では
SK1081とも切り合い、これより新し
い時期のものと考えられる。

規模は、長軸長が1.6m、短軸長0.9m
を測る。深さは0.3~0.4m程度であ
る。造構としての性格は不明である。

出土遺物 (Fig.13) 01044は、弥生
前期小型壺底部である。外底部はや
や上げ底で、木葉痕を残す。葉脈も
顯著である。底部外端には指オサエ
が顯著に残る。

器色は、外面が橙～褐灰色で、内
面は純い橙色を呈する。胎土には石
英・長石を多量に含み、雲母も見え
る。焼成は堅緻である。底部径は5

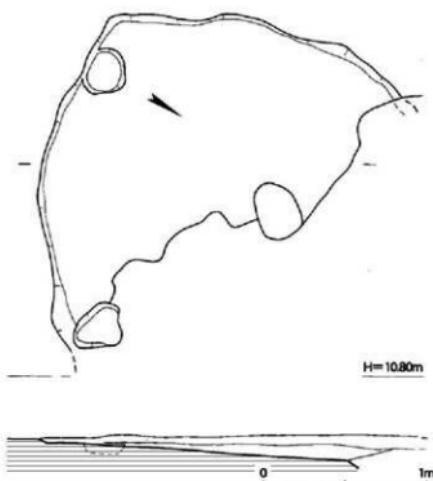


Fig.19 SK1014土坑出土状況実測図 (1/30)

cmを測る。

土坑SK1051 (Fig.22・13)

本土坑は、調査区東端部で検出した大型の隅丸長方形土坑である。ほぼ東西に軸線をとる。北側に隣接する土坑SK1057に切られ、これより新しい所産である。

規模は、東側端を完掘できていないが、長軸長2.8m以上、西短軸長1.25m、東短軸長0.9mとやや東側ですぼまる。

また、深さは0.2m程度を測り、床面は凹凸が著しい。

出土遺物 (Fig.13) 01046は、土器器皿である。口縁部を欠失する。底部は糸切り離して、板目圧痕を残す。器色は、内外面共に灰白色を呈する。胎土に赤色粒・石英砂を含む。焼成は堅緻である。底部径7cmを測る。

01046は、同安窯系青磁皿である。屈曲する胴部を有し、口縁端部を欠失する。外底部は回転ケズりが顕著に残り、内面及び口縁部外面に灰色釉を掛ける。露胎部は灰白色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。底部径3.6cmを測る。

土坑SK1054 (Fig.21)

本土坑は、調査区の南西隅付近で検出された隅丸長方形の土坑である。長軸をほぼ南北にとる。

その規模は、南北長1.5m、東西長0.9~1.1mを測り、ややバチ形をなす。深さは15cm強を測り、床面は殆ど平坦をなす。また、Fig.20 SK1018土坑出土状況実測図(1/30)床面には北東隅から対角線状に、幅20cm・深さ5cmほどの小溝が走る。埋土内からは土器類などの出土品は無かった。廃棄土坑か。

土坑SK1057 (Fig.22・13)

本土坑は、調査区の東端部で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、東側端が完掘されなかった。隣接するSK1051を切っており、これより新しい時期の所産である。長軸はほぼ東西を向く。その規模は、東西長2.4m以上、南北長1.4m、深さ15cm程度を測る。床面は緩い凹凸が見られる。埋土からは、土器器破片、焼土塊、須恵器底部破片など少量が出土した。

出土遺物 (Fig.13) 01047は、器形は不明であるが、須恵器底部破片である。外底部に「井」字形のヘラ記号を有する。器色は、内外面共に灰色を呈する。また、胎土には石英・長石粒を少量混入する。焼成は堅緻である。

土坑SK1055 (Fig.23・13)

本土坑は、調査区の南西隅に検出されたややいびつな隅丸の長方形土坑である。東西に走る溝SD1053を切っており、これより新しい時期の所産である。長軸はほぼ南北にとる。その規模は、南北長1.75m・東西長0.55~0.65mを測る。また、深さは10cm程度と浅く、特に北側の短辺

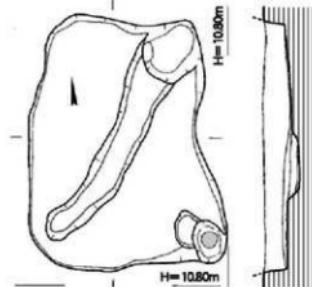
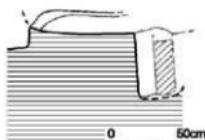
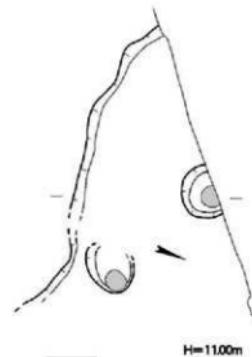


Fig.21 SK1054土坑出土状況実測図(1/30)

付近は残りが悪い。

埋土からの出土遺物は少なく、僅かに鉄器1点が出土したにすぎない。

出土遺物 (Fig.13) 21

001は、断面が鈍い長方形をなす小型の鉄器断片である。両端部を失っている。残存長2.6cm・厚さ6mm・幅7mmを測る。その形状から鉄鎌茎かと考えられる。

土坑SK1069 (Fig.24)

・13)

本土坑は、調査区の南西隅付近で検出された。平面プランは、隅丸長方形を呈するやや大型の土坑である。ほぼ東西方向に軸をとる。

規模は、東西長2.05m・南北長0.75~0.85m、深さは床面で25cm程度を測る。なお、床面下には当初の掘り方が残る。この掘り方の底面までの深さは天端から45cm程度を測る。埋土からは沈線文を有する弥生時代前期壺破片や土師器破片が少量出土した。

出土遺物 (Fig.13)

01048は、土師器高杯の脚部破片である。ややいびつな器形である。器面調整は、外面がヘラナデで、内面にはシボリが見られる。器色は、内外面ともに灰褐色を呈する。胎土には石英・長石を多量に含む。焼成は堅緻である。

土坑SK1070 (Fig.25)

本土坑は、調査区の南端付近で検出された小型の隅丸長方形土坑である。ほぼ東西に軸をとる。その規模は、東西長1.15m・南北長0.3~0.25m、深さ0.25m強を測る。東西に走る溝SD1053を切り、これより新しい時期の所産と考えられる。埋土からの土器類の出土は無かった。その形状から墳墓の可能性もある。

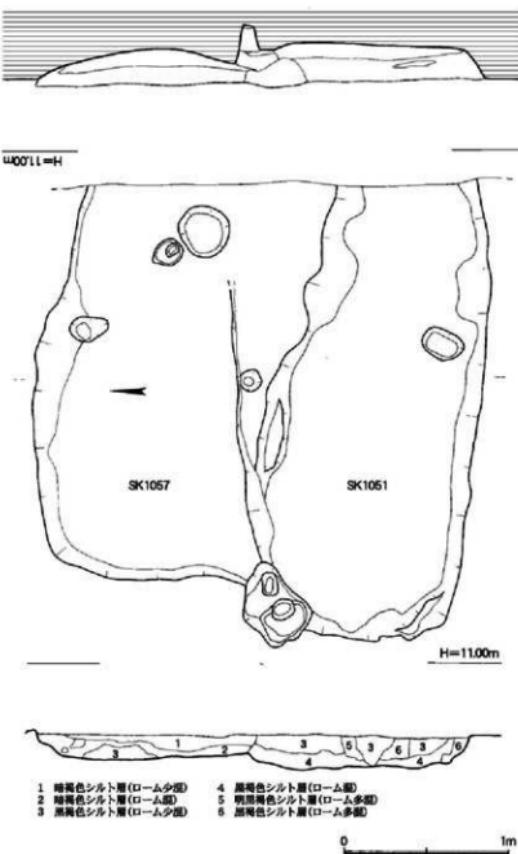


Fig.22 SK1051-1057土坑出土状況実測図 (1/30)

土坑SK1081 (Fig.15・13)

本土坑は、調査区の西側壁近くで検出された。隣接するSK1020に切られしており、これより古い時期の所産である。本坑は、東側を溝SD1003に切られて欠失するが、軸をほぼ東西にとる長方形土坑である。その規模は、東西長が2m以上・南北長が0.85~1.2m、深さ0.45m程度を測る。埋土から砾石、石包丁破片が出土した。

出土遺物 (Fig.13) 11005は、扁平に使い込まれた手持ち砥石である。全面が砥面となっている。長さ5.1cm・幅4.6cm・厚さ1.7cm・重量56.86gを測る。砂岩製。

11006は、両刃の磨製石包丁破片である。形態はやや身幅の狭い半月形となろうか。残存長6cm・重量34.82gを測る。頁岩製。

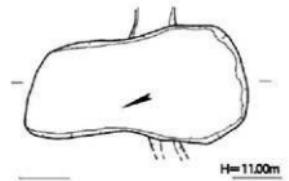


Fig.23 SK1055土坑出土状況実測図(1/30)

6. 溝状遺構 (Fig.5)

- 26~32, PL1・2)

溝状遺構は、何れも端部が明らかでないものを含めると8条が検出された。特徴的なのは調査区の北東で検出された東西に走る大溝SD1002、西側で検出された円弧を描く溝SD1003であり、他は細く、延長の短い小溝である。

溝SD1002 (Fig.26~29)

本溝は、調査区の北東隅をほぼ東西に走る大溝である。規模は、幅員が1.4~1.5m・延長10m以上・深さ25cmを測る。土坑SK1001に切られ、これより古い時期の所産である。西側端の中央底面付近に須恵器大甕が破碎した状態で出土した。溝の覆土は、東・西両面の土層図 (Fig.26) に見るよう、黒褐色シルトである。壁の立ち上がりは非常に緩い。西側の溝底で出土した須恵器大甕は2個体が別々に潰れた状態で出土した。

出土遺物 (Fig.28・29) 覆土内からはまとまった遺物が出土したが、時期の異なる磁器なども一部に混じる。01015は、弥生中期甕である。外底部はやや上げ底をなす。器色は赤橙色を呈し、焼成は堅緻である。胎土に石英・長石粒を多量に混入する。底部径12.5cmを測る。01025は、土師器高杯脚部破片である。器色は、灰白色を呈し、焼成は堅緻である。胎土に石英・長石粒を多量に混入する。01013は、土師器甕破片である。器色は、内外面ともに鈍い橙色を呈する。焼成は堅緻である。胎土

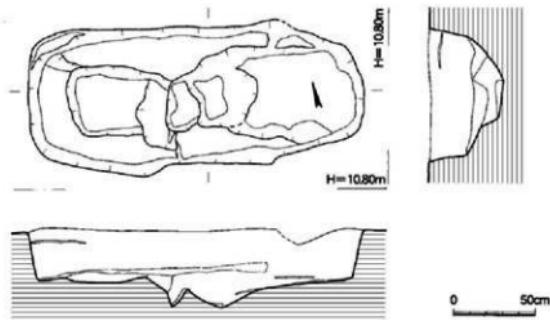


Fig.24 SK1069土坑出土状況実測図(1/30)

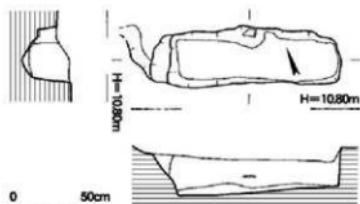


Fig.25 SK1070土坑出土状況実測図(1/30)

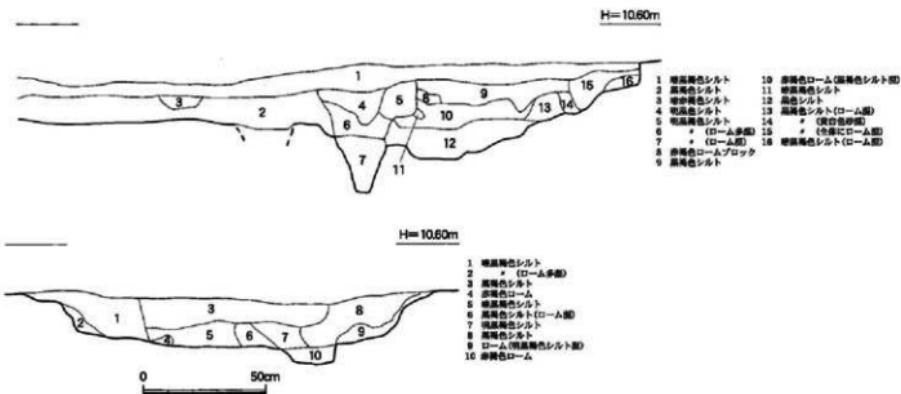


Fig. 26 SD1002溝東西土層断面実測図 (1/20)

に石英・長石粒を少量混入する。01021も土師器甕である。器面調整は、内面にヘラケズリを残す以外は不明である。器色は、外面が橙へ褐色、内面が赤灰色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石砂粒を少量混入する。口縁部径15.2cmを測る。01022も土師器甕である。口縁は短く外開する。外面に荒いナナメハケ、内面にヘラケズリを施す。器色は、外面が橙色、内面赤灰色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石粒を多量に混入する。口径18.8cmを測る。01019は、須恵器の小型高杯である。浅い杯部に低い脚部を付す。内外面ともにナデ調整を施す。器色は、内外面ともに灰白色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石粒を若干混入する。口径9.5cm・器高6.6cmを測る。01016は、須恵器杯蓋である。口縁端部にかえりが残る。器色は、内外面ともに暗青灰色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石粒を少量含む。口径10.8cm・器高2.6cmを測る。01024も須恵器杯蓋である。受け部のかえりは小さく、器高は低い。器面調整は、天井部に一部ケズリが残る以外は全てヨコナデである。

器色は、内外面ともに青灰色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英粒を少量混入する。受け部径12.6cm、器高2.2cmを測る。

01017は、須恵器高台杯である。高台疊みつきがやや踏ん張る。調整は、外底が回転ヘラケズリ、他はナデである。器色は、灰白色を呈する。焼成は良好で、胎土に石英・長石粒を少量混入する。高台部径10.3cmを測る。

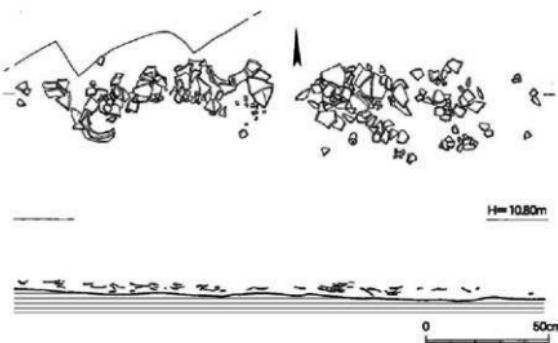


Fig. 27 SD1002溝内土器出土状況 (1/20)

01018は、須恵器高台杯である。浅い杯部に、低い裾広がりの高台を付す。調整は、胴部外面の下端と外底部にカキ目調整を施し、他はナデである。器色は、青灰色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石粒を少量混入する。外底部に「し」字形のヘラ書きあり。口径15cm、器高5.5cmを測る。

01020は、赤焼け硬質の須恵器甕である。低い重心と跳ね上げ状の口縁に特徴がある。調整は、外面が細かい格子のタタキ、内面は荒いアテ具痕をナデ消している。器色は、外面赤色、内面灰赤色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石粒を少量混入する。口径16.6cm、器高6.7cmを測る。

01026は、円筒埴輪破片である。突帯部はやや下向きである。器色は内外面共に灰白色を呈する。焼成は堅緻で、胎土は精良で石英・長石粒を少量混入する。突帯部径26.5cmを測る。01014は、フイゴ羽口の先端部破片である。熱を受け、先端には津が付着する。器色は、灰白色を呈する。胎土に石英・長石砂を多量に混入する。01023は、青白磁の合子蓋である。口縁端部と内面の一部が露胎で、

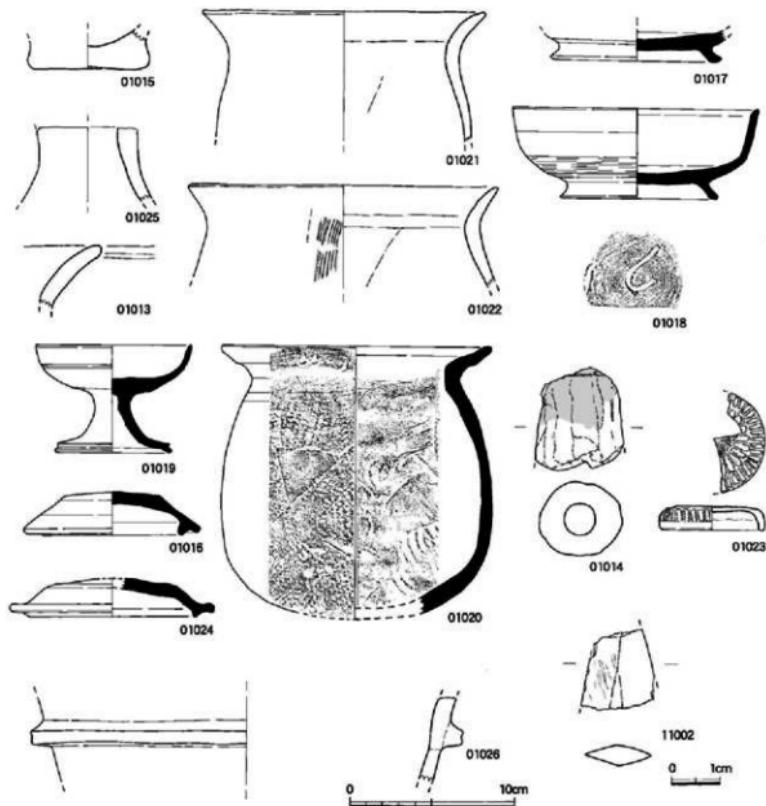


Fig.28 SD1002溝出土遺物実測図1 (1/3・1/1)

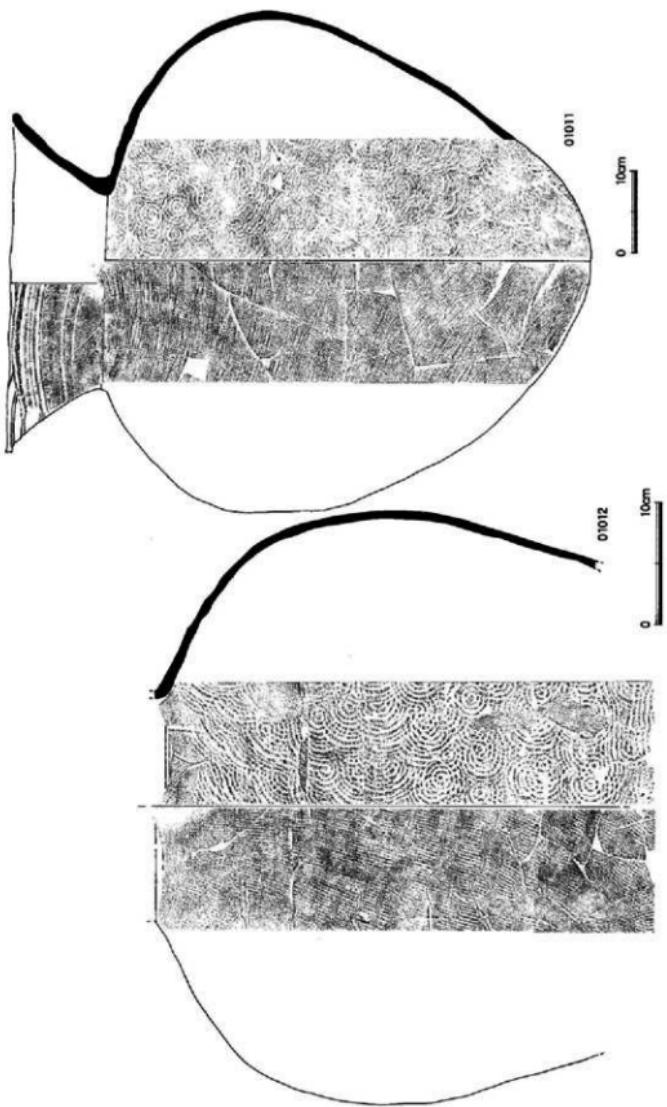


Fig.29 SD1002出土上埴輪実測図2(1/6-1/4)

他は明青色の釉を掛ける。型押し製品である。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径6.4cm、器高1.5cmを測る。11002は、磨製石鎌の先端部破片である。断面は両面ともに鎌を有する。残存長1.6cmを測る。

01011は、須恵器大甕である。肩部がやや張り、底部に從って胴がすぼまる。口縁部中位には粗雑な波状文を巡らす。器面の調整は、外表面が擬格子タタキ後にナデで、内面のアテ具痕は鮮やかな青海波文として残る。器色は、内外面ともに灰色である。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石砂を少量混入する。口径41.8cm、器高72cmを測る。01012は、口縁を欠失

する須恵器大甕である。薄造りである。器面調整は、外表面が繊細な平行タタキで、その後に圓線状の平行なナデを加える。また、内面のアテ具は径5cm前後のサイズで鮮やかな青海波文となっている。器色は、内外面ともに青灰色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石砂を少量混入する。胴部最大径48.4cmを測る。

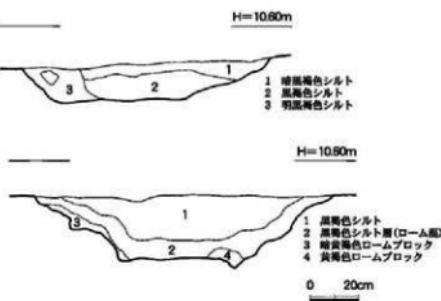


Fig.30 SD1003溝南北土層断面実測図 (1/20)

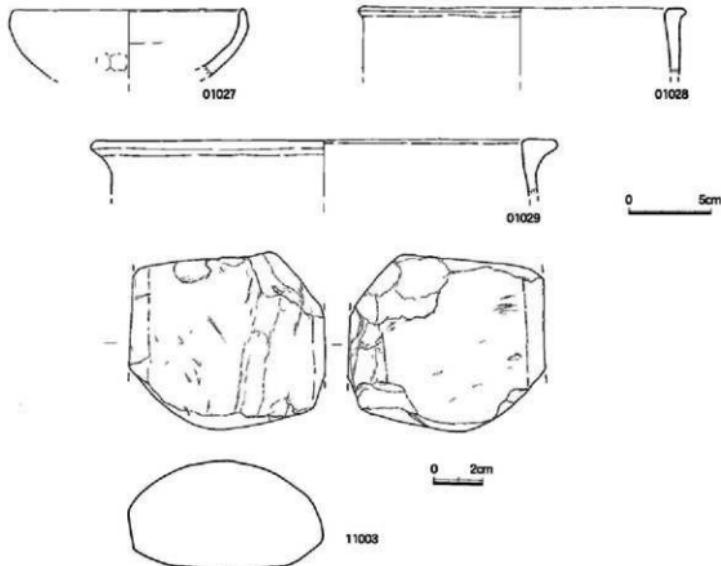


Fig.31 SD1003溝出土遺物実測図 (1/3+1/2)

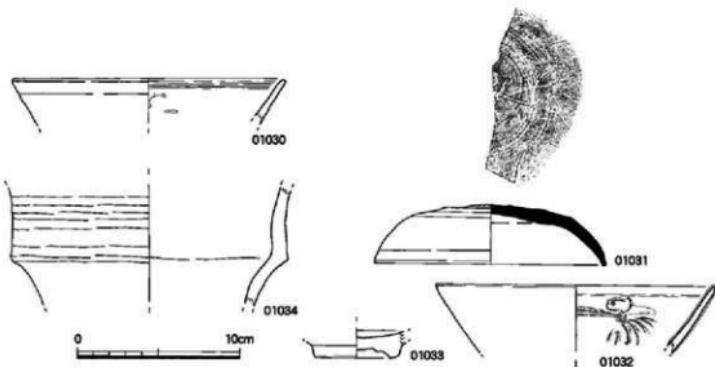


Fig.32 SD1017・1053・1056溝出土遺物実測図 (1/3)

溝SD1003 (Fig.30・31)

本溝は、調査区の西側壁側で検出された溝で、円形溝の一部と考えられる。全体の2/3以上が西側の調査区外になるが、推定規模は径10~12m程となろうか。溝の覆土は、前のSD1002とほぼ同一で、黒褐色シルトと最下層ではこれにロームが混じるものとなっている (Fig.30)。溝の断面は緩い逆台形であり、古墳周溝などによく見られる形状である。溝規模は、西側壁で外周差し渡し11mで、幅員1~1.3m、深さ0.25m前後である。溝内の覆土からは少量の遺物が出土した。

出土遺物 (Fig.31) 01027は、土師器碗である。口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。器面調整は、一部に指オサエが残り、他はナデか。器色は、外面が灰褐色、内面が明褐色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石砂を多量に混入する。口径14.2cmを測る。01028は、口縁外端の発達が弱い小型の甕である。器色は、内外面ともに黄橙色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に砂粒の混入が多い。口径20cmを測る。01029は、小型の平坦口縁を有する甕である。磨滅の為に調整は不明である。器色は、橙色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に砂粒を多量に含む。口径28.6cmを測る。11003は、太形始刃石斧破片である。二次的に磨石として使用する。玄武岩製。

溝SD1017 (Fig.5)

本溝は、調査区北東部に位置する。ほぼ南北に走る小溝である。規模は、長さ7.5m以上・幅40m・深さ5cm程度を測る。

出土遺物 (Fig.32) 01030は、龍泉窯青磁碗破片である。内面に花文が見える。口縁内面は平行沈線状となる。器色は、外面が灰オリーブ色、内面が灰白色を呈する。焼成は堅緻で、生地に黒色微砂を含む。口径16.6cmを測る。

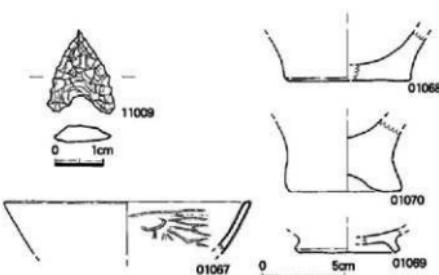


Fig.33 SP1030・1031・1033・1061・1080出土遺物実測図 (1/3-1/1)

溝SD1019 (Fig.5) 本溝は、調査区東端部で検出した長さ2.5m以上、幅0.5m、深さ10cm程度の小溝である。不定形の土坑となる可能性もある。

溝SD1029 (Fig.5) 本溝は、円形溝SD1003の内側にあり、長さ70cm・幅25cm・深さ20cmを測る。長方形土坑か。

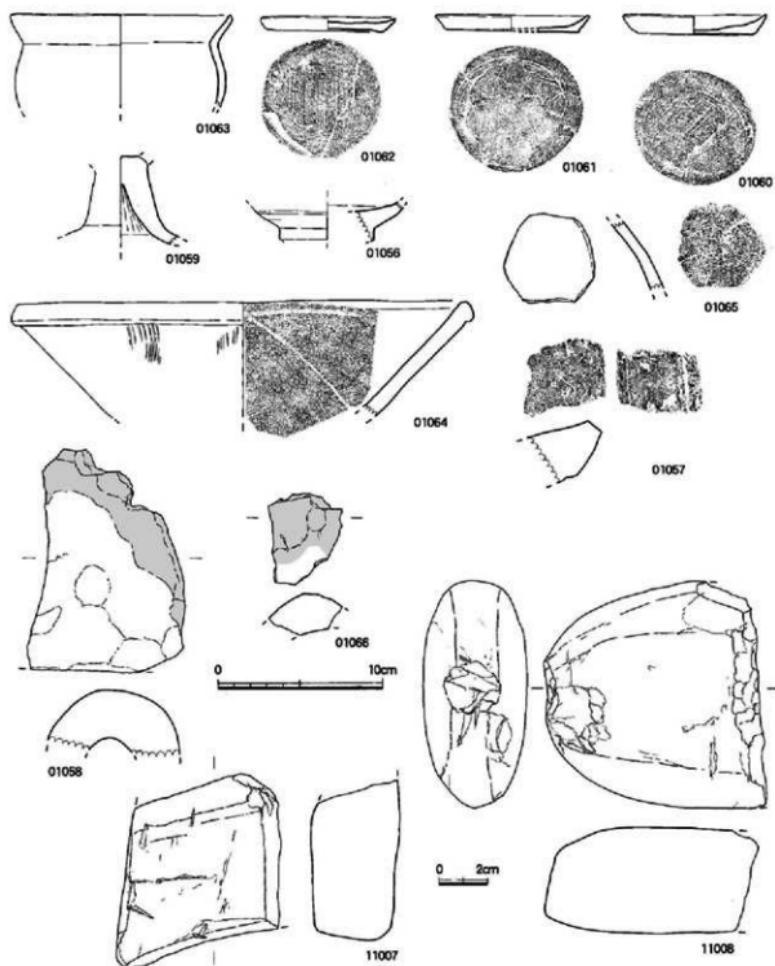


Fig.34 遺構検出面・南半部遺構検出面出土遺物実測図 (1/3-1/2)

溝SD1035 (Fig.5) 本溝は、調査区東端部に位置し、長さ80cm・幅30cmの土坑状をなす。

溝SD1053 (Fig.5・32) 本溝は、調査区南端に位置し、ほぼ東西に走る小溝である。東端部は深さ15cm程の浅い溜まり状となる。延長は9~10mを測り、西側では幅20cmとなる。

出土遺物 (Fig.32) 01031は、須恵器杯蓋である。天井部にヘラケズリあり。口径14cm・器高3.6cmを測る。01032は、龍泉窯系青磁碗である。口径17cmを測る。01033も、龍泉窯系青磁碗である。底部径5.2cmを測る。

溝SD1056 (Fig.5・32) 本溝は、調査区西側に位置し、円形溝SD1003に接する。長さ1.4m・幅0.3m・深さ10cmを測る。土坑である可能性がある。

出土遺物 (Fig.32) 01034は、土師器壺である。口縁部外面は強いヨコナデが残る。器色は、内外ともに橙色を呈する。頸部径17cmを測る。

7. 柱穴・遺構検出面出土遺物 (Fig.33・34)

11009は、黒曜石製打製石鎌である。柱穴1030出土。01067は、龍泉窯系青磁碗である。口径15cmを測る。柱穴1031出土。01068は、弥生中期壺底部である。底部径7.8cmを測る。柱穴1033出土。01070は、弥生中期初頭の甕底部である。底部径7.1cmを測る。柱穴1080出土。01069は、黒色土器高台付椀である。底部径6.4cmを測る。柱穴1061出土。

次に、南半部を中心とした遺構の検出時に若干の遺物が出土した。

01063は、土師器の小型丸底壺である。器面は磨滅が著しく、内面にナデを残す。器色は灰白～橙色を呈する。口径13.6cmを測る。01060~01062は、小型の土師皿である。いずれも糸切り離し後の板目圧痕が残る。口径はそれぞれ8.7・9.1・13.2cmを測る。また、焼成は堅綴である。01059は、土師器の短脚高杯破片である。器色は橙～灰白色を呈する。頸部径3.2cmを測る。01066は、白磁碗である。高台内面を欠き、外面は露胎となる。底部径4.7cmを測る。01064は、瓦質土器の捏ね鉢である。器色は灰白～褐色を呈する。内面にナメのカキ目、外面にタテハケメを一部残す。胎土にも石英・長石砂の混入が多い。口径28.2cmを測る。01065は、弥生式土器片を加工した円盤状製品である。特に破片の上下端を緩く抉る。器色は灰褐～黄褐色を呈する。サイズは長短で、5.5×5.5cmを測る。01057は、古代の平瓦破片である。器色は褐色を呈し、胎土に石英・長石砂を多量に含む。01058及び01066は、フイゴ羽口破片である。器壁は厚く、2.5~2.8cmを測る。何れも図のアミ掛け部が熱による変成を受けた。11007は、平板な砥石である。右側短辺以外は砥面となる。砂岩製。11008は、片面を破損するが、端部に叩打による抉入部が見られる円碟である。鍾として使用か。花崗岩碟を利用し、長さ9.1・幅9.3・厚さ4.4cm・重さ485gを測る。

8. 小 結

A区調査では、散漫な遺構の残りではあるが、弥生時代前期土坑等の生活遺構や古墳時代前期井戸、同後期の円墳などの墓地、7世紀初め頃の堅穴住居・大溝、区画溝と考えられる東西・南北溝・廐棄坑或いは墳墓と考えられる土壤からなる中世期の集落の一部が検出できたものと考えられる。

また、跡跡は遺構以外から出土した遊離遺物から推定すれば、弥生時代前期から中世の時期まで断続的に小規模な集落・墓地として利用されてきたことが明らかとなった。



1. 調査区北東部遺構出土状況
(南から)



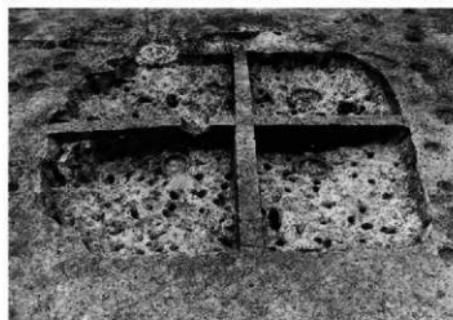
2. 調査区南東部遺構出土状況
(北西から)



3. 調査区北西部遺構出土状況 (南東から)



1. 調査区北東部遺構出土状況
(東から)
2. SC1052出土状況 (南から)
3. SK1069出土状況 (東から)
4. SK1001出土状況 (北から)
5. SK1054出土状況 (西から)



1

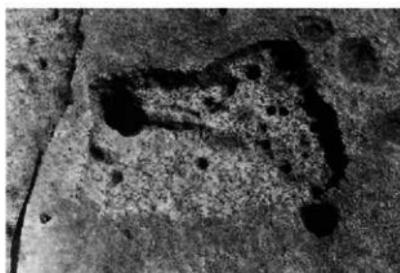
2

3



4

5



第四章 B区の調査

1. 調査の概要

B区の調査は平成14年9月2日から同年10月25日にかけて行った。調査対象面積は830m²、実際の調査面積は400m²である。最初に調査区の北東部から重機による表土剥ぎを開始したが、試掘成果とは異なり、現地表下-70cmまでの客土の下は暗灰色シルト質土が厚く堆積し-170~200cmでようやく地山の黄白色粘土を検出した。シルト層からは近世の遺物が少量出土した。溜池のような窪地で遺構は存在しない。したがって、この部分は調査からはずし、まず西側を調査し、次に廃土を反転して東側の調査を行った。遺構面の地山は赤褐色のロームで、深さは現地表下-60~70cmである。

本地点の土地利用の変遷について、隣地に長年住んでいる住民の方から聞くことができた。戦前までこの周辺は水田であったが、戦時中に大規模な埋め立てをして軍需工場がつくられた。そして戦後はこの方が製材工場を営んでいたという。

B区で検出された主な遺構は、弥生時代前期の貯蔵穴3基と溝1条、古代の溝1条、中世後半の溝2条で、ピットも相当数存在し3棟の掘立柱建物が復元できた。遺物はコンテナ12箱分が出土した。旧石器から中近世まで各時期の遺物がある。特筆すべきは、黒曜石の石器や剥片が1000点近く出土したことである。これら石器類については、板倉有大が実測および分析・執筆を担当し、剥片石器群については付論で報告する。

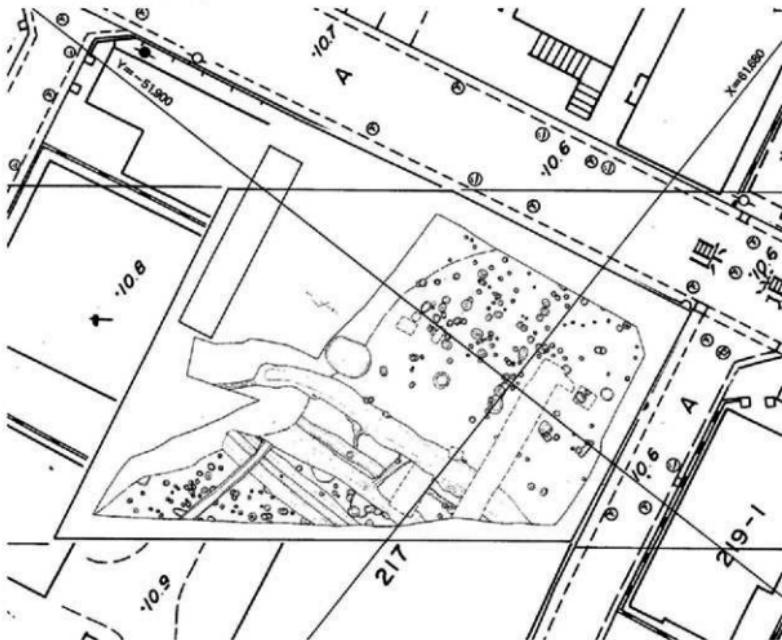


Fig.35 B区周辺地形図 (1/300)

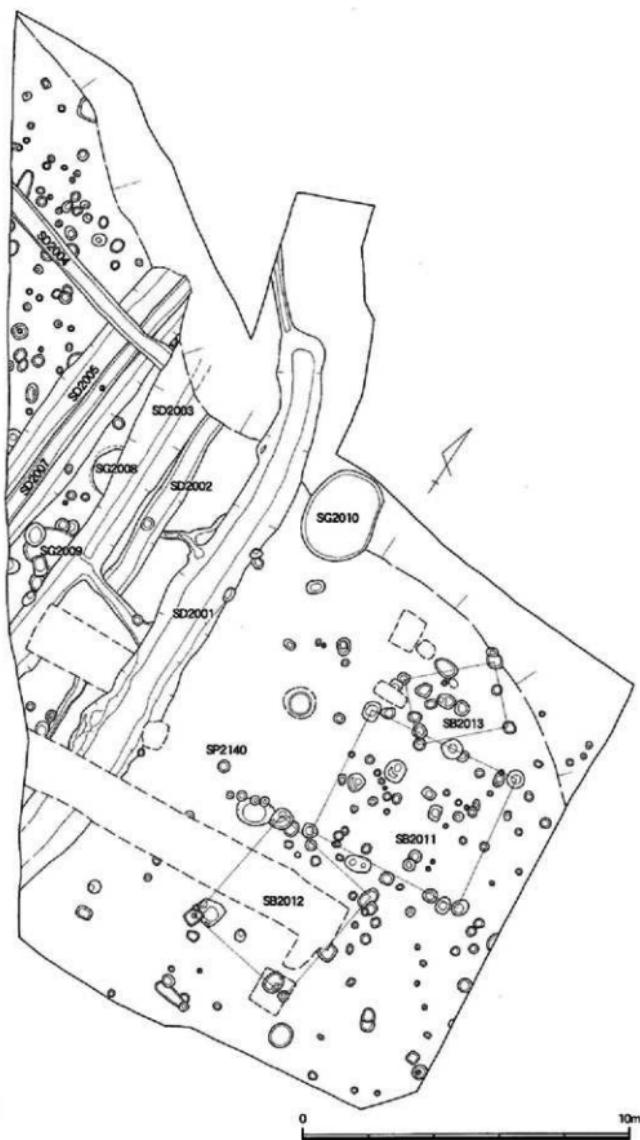


Fig.36 B区造構配置図 (1/150)

2. 貯藏穴 (SG)

円形の貯藏穴 3 基を検出した。貯藏した有機物は確認できないが、垂直またはオーバーハングして立ち上がる壁面から貯藏穴と判断した。後世の造構に切られるなどして残りは良くない。深さがそれほどではないのは、旧地表がかなり削平されていることを示すのか。出土遺物よりいずれも弥生時代前期に位置づけられる。また、ピットのひとつから炭化米が出土した。非常に小さいので貯藏穴とは呼べないであろうが一緒に報告しておく。

SG2008 (Fig.37) 底面での直径 1.6m、深さ 70cm を測る。壁面は底面から 50cm ほどまでは垂直に立ち上がりそこからオーバーハングしている。東側は搅乱溝 SD2003 に切られる。底には黒色粘土が堆積し、途中の赤褐色ローム（第 3 層）はオーバーハングした上部の壁面が崩落したもの。弥生時代前期の土器、石器が少量出土した。

出土遺物 (Fig.38) 1 は刻目突帯文土器の口縁部である。2 は弥生土器の甌底部である。底径 6.4cm。底面中央が窪む。石器は石錐 1 点、使用痕のある剥片 9 点、剥片 21 点、残核 6 点、計 37 点が出土している。すべて黒色黒曜石である。3 は石錐で、長さ 2.2cm、幅 1.35cm、厚さ 0.9cm、重量 1.87g を測る。後面稜部・左側に擦痕がみられる。4 は二次加工・使用痕のある剥片で、長さ 3.8cm、幅 2.83cm、厚さ 0.73cm、重量 6.3g を測る。前面稜部に二次加工が施され、左側辺の両面、下端・右側辺の片面に微細剥離が認められる。5 は使用痕のある剥片で、長さ 2.14cm、幅 2.63cm、厚さ 0.75cm、重量 3.3g を測る。左側辺の片面、右側辺の両面に微細剥離が認められる。

SG2009 (Fig.37) SG2008 のすぐ南に位置する。直径 1.3~1.6m の不整円形で深さは 45cm を測る。壁は垂直に立ち上がる。底には暗褐色と褐色の粘土が互層に堆積する。弥生時代前期の土器、石器が少量出土した。

出土遺物 (Fig.38) 6 は弥生時代前期の甌である。復元口径 23.4cm を測る。口縁部の刻目は浅く磨滅が著しい。7 は弥生時代前期の刻目突帯文の口縁部である。刻目は幅が狭く深い。石器は、石錐 1 点、使用痕のある剥片 4 点、剥片 13 点、残核 7 点、計 25 点が出土している。すべて黒色黒曜石である。8 は石錐で、長さ 2.2cm、幅 1.15cm、厚さ 0.4cm、重量 0.71g を測る。先端が摩滅し、前後面に部分的な擦痕がみられる。9 は使用痕のある剥片で、長さ 2.46cm、幅 3.14cm、厚さ 0.6cm、重量 3.4g を測る。左側辺の両面、右側辺の片面に微細剥離が認められる。10 は小型の使用痕のある剥片で、長さ 1.17cm、幅 1.67cm、厚さ 0.4cm、重量 0.7g を測る。下端辺の片面に微細剥離がみられる。

SG2010 (Fig.37) 長軸 2.9m、短軸 2.4m の楕円形で深さは 80cm を測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底の第 5、6 層は褐色、黄褐色の粘土で、黒色粘土はかなり浅いレベルにある。この点、他の貯藏穴と異なる。弥生時代前期の土器、石器が少量出土した。

出土遺物 (Fig.39) 11 は刻目突帯文土器の口縁部である。12 は黒色磨研土器の口縁部である。内外面を丁寧に磨いている。13 は弥生土器の蓋である。石器は、石錐 1 点、使用痕のある剥片 2 点、剥片 10 点、残核 5 点、計 18 点が出土している。すべて黒色黒曜石である。14 は短三角形凹基石錐で、長さ 1.35cm、残存幅 1.8cm、厚さ 0.4cm、残存重量 0.62g を測る。15 は使用痕のある剥片で、長さ 2.11cm、幅 2.99cm、厚さ 0.53cm、重量 2.5g を測る。下端辺の両面に微細剥離が認められる。

SP2140 (Fig.37) 直径 36cm、深さ 40cm の小さなピットである。炭化米が少量出土した。

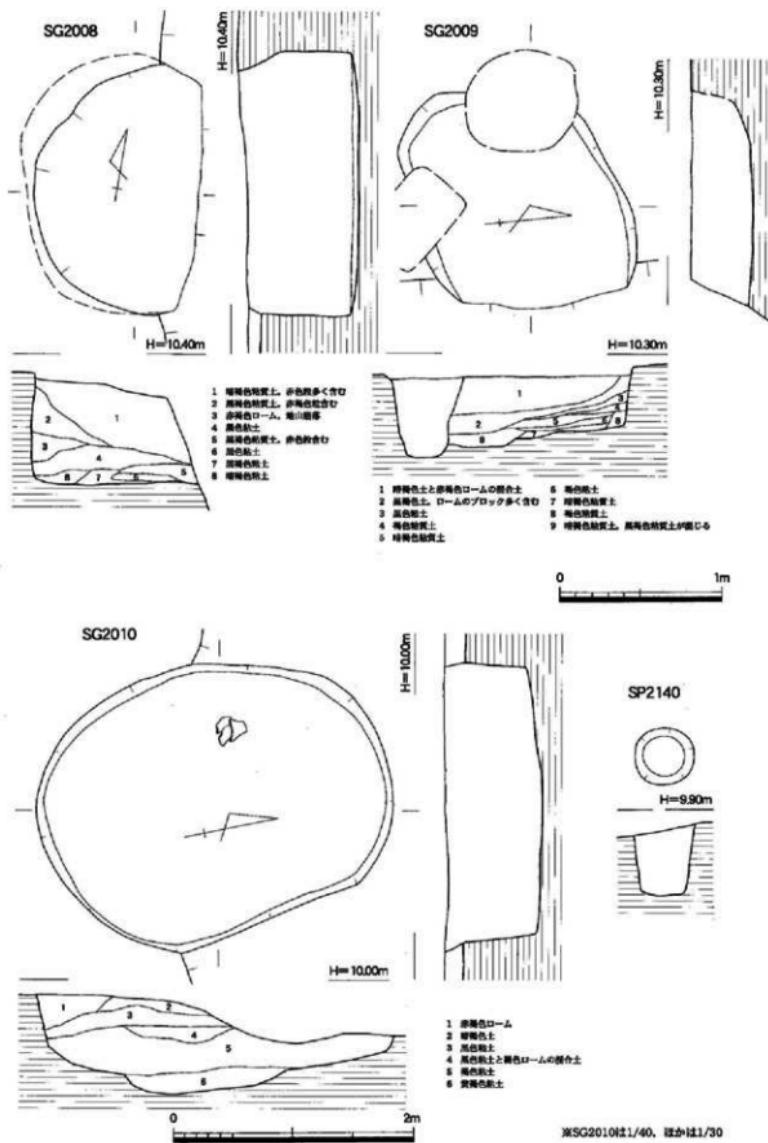
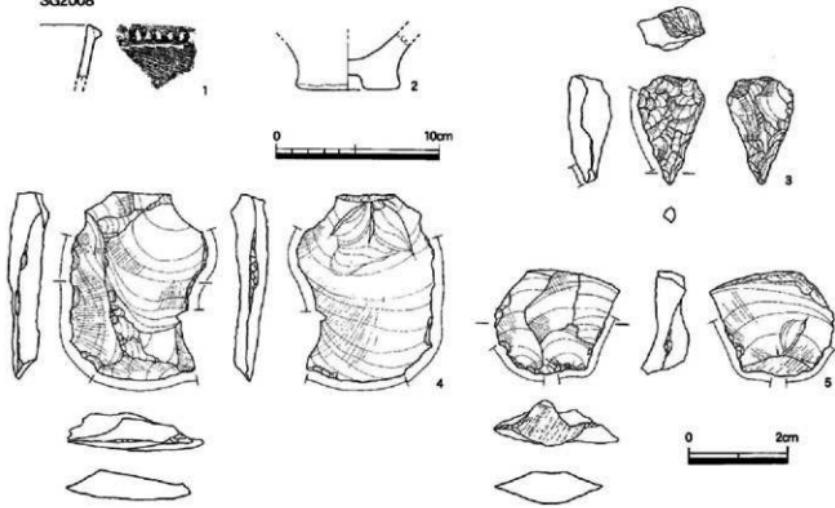


Fig.37 貯蔵穴SG2008、2009、2010、およびSP2140 (1/30, 1/40)

SG2008



SG2009

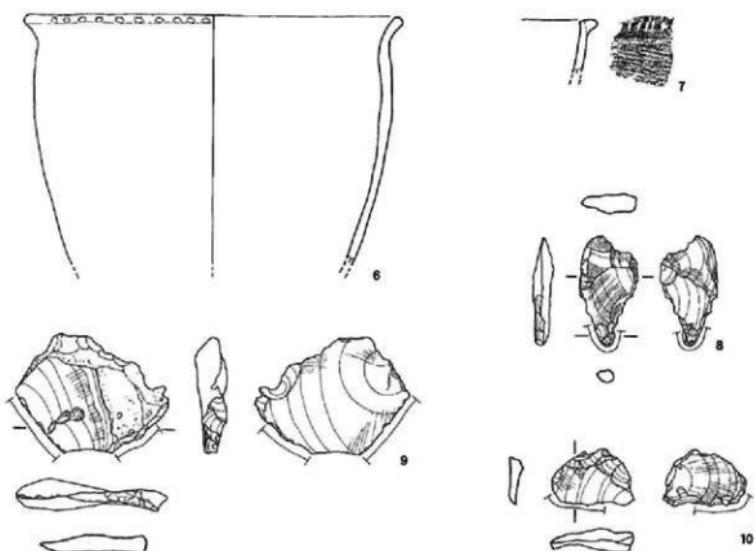


Fig.38 SG2008、2009出土遺物 (1/3, 1/1)

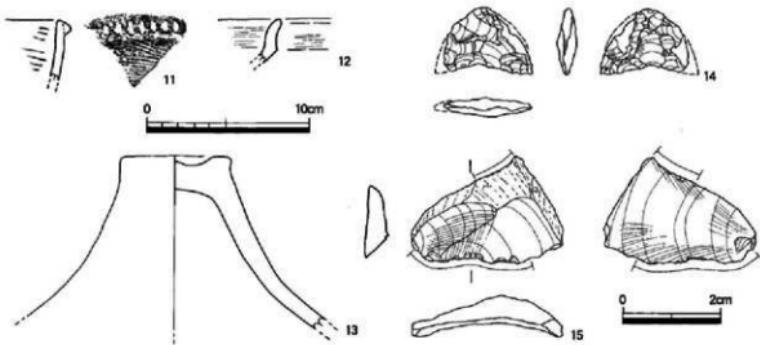


Fig.39 SG2010出土遺物 (1/3, 1/1)

3. 溝 (SD)

6条の溝（うち1条は近現代）を検出した（Fig.40）。調査区の中央から西側にかけて弥生時代前期、古代、中世後半、近現代の5本の溝が南北に縦走し、中世後半の溝1条がそれに直交する。

SD2001（Fig.40）調査区の中央を南北に縦断する溝である。肩での幅が1.6～1.8m、底面の幅が0.8m程度、深さ80cmの逆台形を呈する。溝の埋没後も、この溝に沿って地面がレンズ状に窪んでいたようで、表土剥ぎで除去した客土とは異なる暗褐色土が帯状にかぶっていた。土層断面図①、③の第1層がこれで、幅は広いところで3.8m、概ね3m以上はあり、深さは遺構検出面から30～40cmである。遺物の取上げはこの窪み部分をSD2001上層、溝本体をSD2001下層あるいは底とした。

出土遺物はコンテナ3箱分で、時期は中世後半が主体で、弥生時代から古代の遺物も相当量出土した。埋没時期は、下層で出土した輸入陶器から中世後半に位置づけられる。

出土遺物（Fig.41、42）25、33～35は溝本体上に2次的に堆積した「上層」で取り上げたもの。それ以外は溝本体からの出土である。

16～19は青磁である。16、17は雷文帶蓮弁文の青磁碗。14～15世紀。16は口径15.2cmで、釉は不透明で雷文帯の文様は明確でない。18は細蓮弁文の青磁碗である。口径16.4cmで内面にも文様がある。オリーブ緑色の釉が厚くかかり貫入はない。15世紀。19も青磁碗。底径6.0cmで釉は高台の側面までかかる。20～23は白磁である。20は玉縁口縁の白磁碗である。11世紀後半～12世紀前半。21は白磁碗で口径14.6cmを測る。胎土は陶器質で釉は黄色がかった灰白色を呈する。22は碗の底部である。底径4.8cmを測る。胎土は粗く、釉は灰白色でガラス質、貫入が入る。全体に釉掛けしたあと中央部を残して蛇の目状に釉を拭き取っている。23は白磁皿で口径10.0cm、器高2.4cm、底径3.6cmを測る。胎土は陶器質で釉は乳白色。高台に抉り込みが見られる。24は李朝の象嵌青磁碗である。胎土は灰色で緻密。白色土で象嵌する。25は土師質の火鉢である。外面に六角形のスタンプを押す。26は土師質のすり鉢で

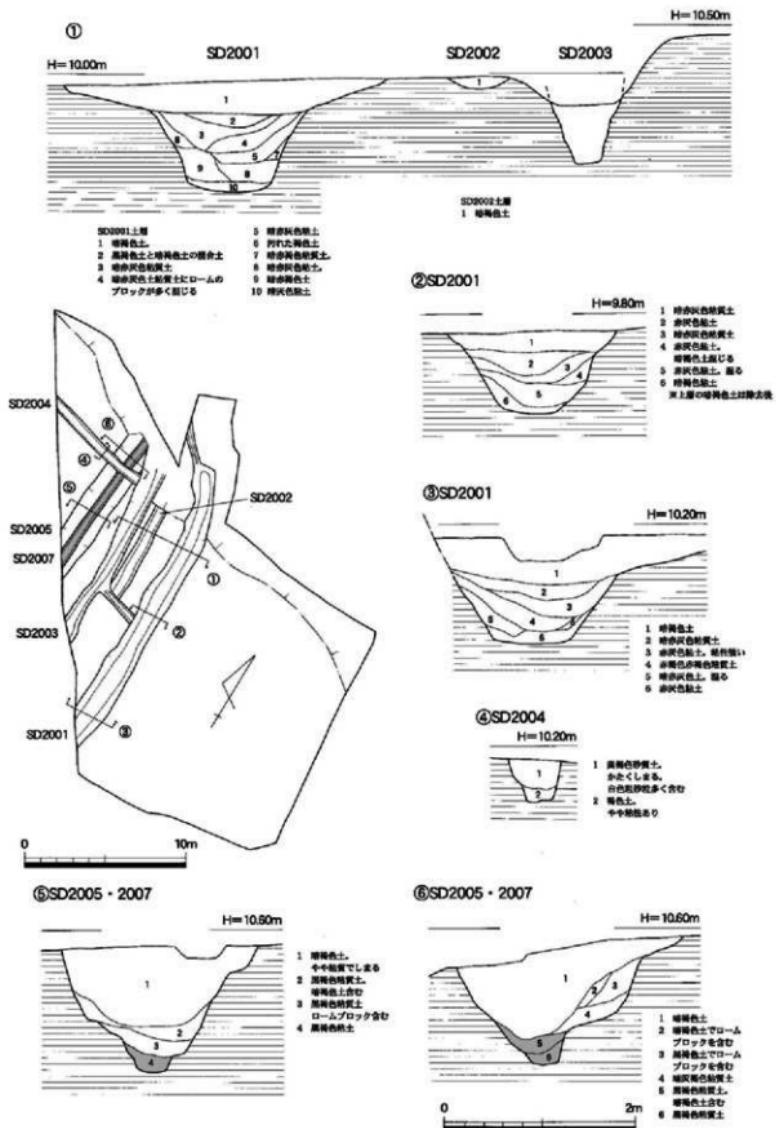


Fig.40 溝（SD）平面図（1/300）および土層図（1/50）

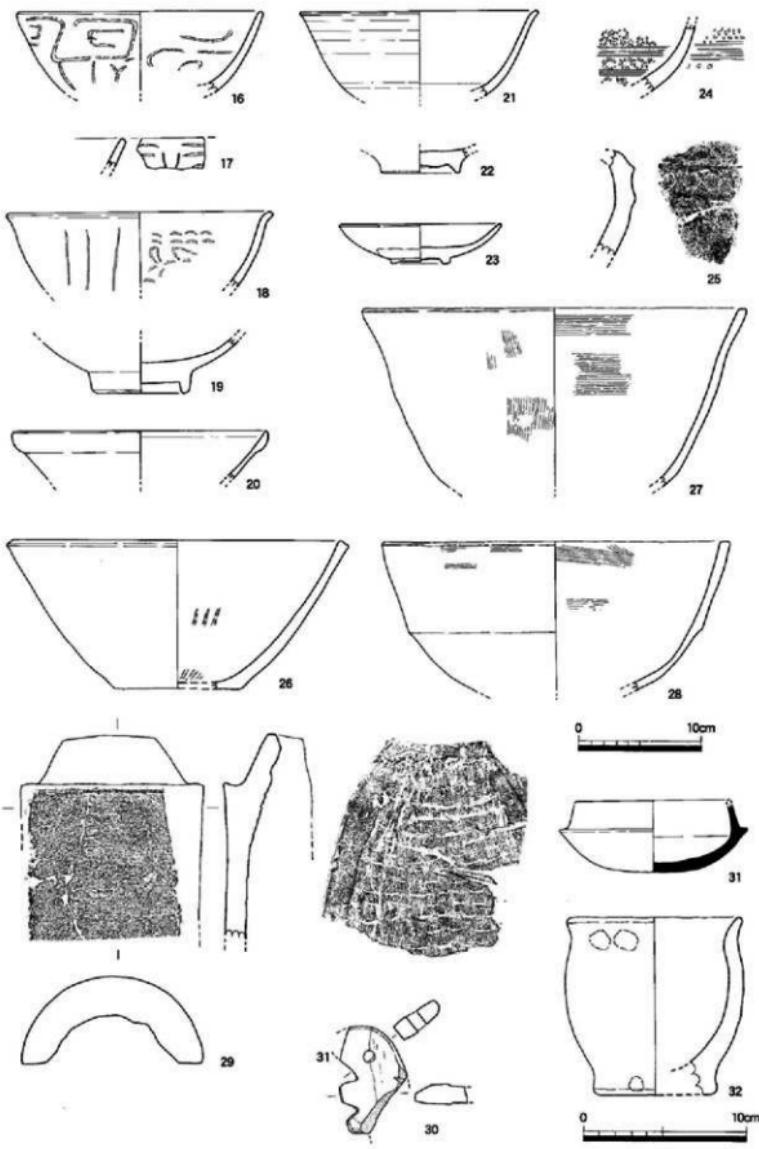


Fig.41 SD2001出土遺物① (1/3, 1/4)

図26~29は1/4, 図31は1/3

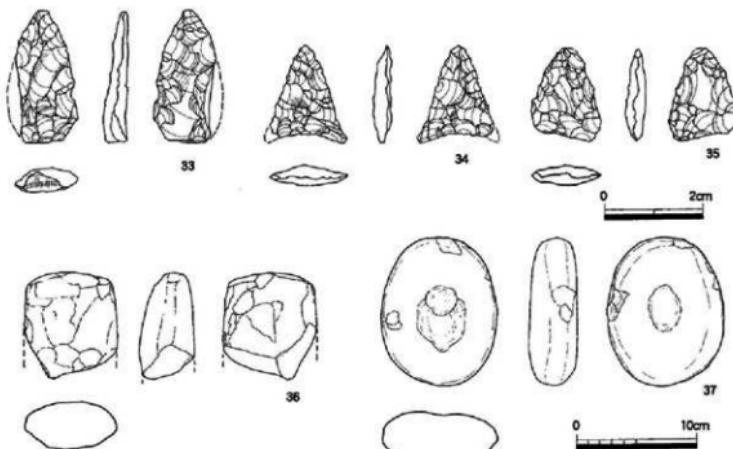
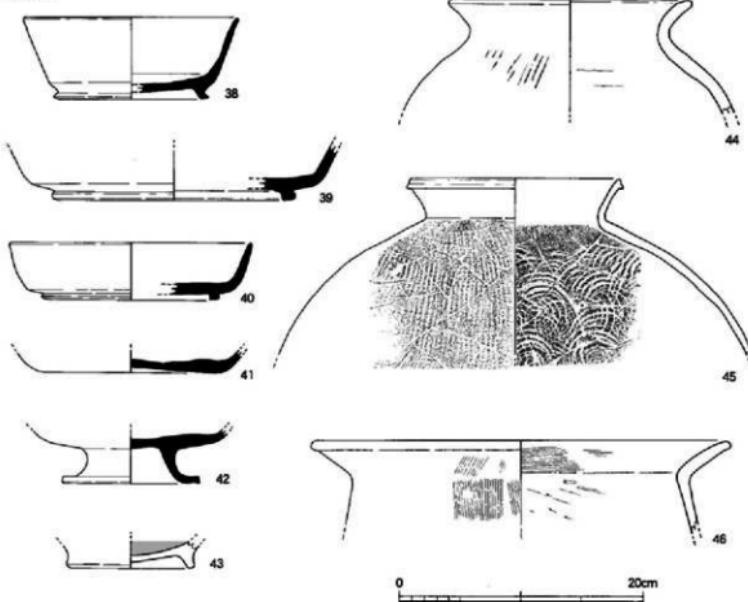


Fig.42 SD2001出土遺物② (1/1, 1/4)

ある。焼成が悪く軟質で触ると手に粉が付くほどである。内面にすり目が残っている。27は土製鍋で口径31.4cmを測り、外面は縦刷毛、内面は横刷毛を施す。外面は口縁まで全体的に煤が付着し、内面はちょうど真ん中あたりの高さに幅3cm程度の帯状に黒っぽくなった部分があり、それより上は汚れていない。煮汁の痕跡だろう。28も土製鍋で、口径28.4cmを測る。体部中位で一度屈曲する。外面の中ほど以下に煤が付着する。29は中世の丸瓦である。凸面は縄目叩きをなで消す。側面および玉縁の上端部は2段階で面取りしている。焼成は良好で灰色を呈する。30は滑石製の子持勾玉である。腹部に2つの突起があり、そこから下は欠けている。大まかな形をつくり各面を磨いているが、細部の装飾は施さず角張っている。作成途中であろうか。31は須恵器の壺で口径9.4cm、器高4.4cmを測る。焼成良好で明青灰色を呈する。32は弥生土器の小型甌である。口径10.8cm、器高10.9cm、底径7.6cmを測る。胎土は石英礫を非常に多く含む。

石器は、石鎌3点、石錐2点、磨製石斧1点、磨石1点、使用痕のある剥片60点、剥片21点、残核19点、計107点が出土している。剥片石器類105点中、安山岩の剥片（調整剥片）1点、灰色黒曜石の残核1点が認められ、それ以外の103点はすべて黑色黒曜石である。33～35は黒色黒曜石である。33は長三角形石鎌で、長さ2.7cm、残存幅1.3cm、厚さ0.5cm、残存重量1.28gを測る。基部加工が不十分であり、未完成の可能性もある。34は三角形凹基石鎌で、長さ2cm、残存幅1.7cm、厚さ0.4cm、残存重量0.71gを測る。右脚端が外方にやや張り出す。35は三角形平基石鎌で、長さ1.95cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重量0.8gを測る。基部平面形は非対称を呈す。36は玄武岩製磨製石斧（今山系石斧）の基部片で、残存長8.8cm、残存幅7.7cm、残存厚4.6cm、残存重量443.85gを測る。37は、花崗岩製磨石で、長さ12.2cm、幅9.5cm、厚さ3.95cm、重量709.31gを測る。前後に磨面と凹部をもつ。

SD2005



SD2007

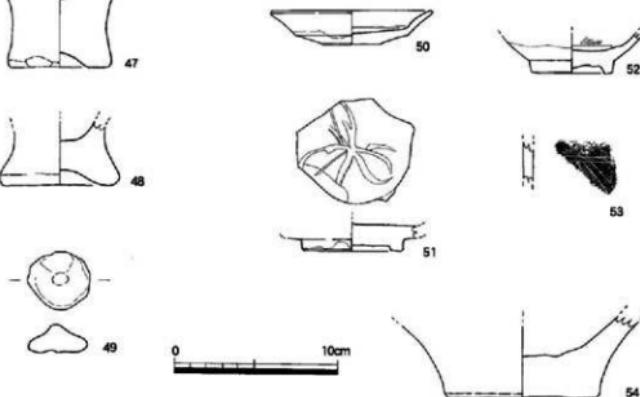


Fig.43 SD2005、2007出土遺物① (1/3, 1/4) 44~46 1/4, 50~54 1/3

SD2002 (Fig.40) SD2001のすぐ西側と同じ向きに走る小さな溝である。幅60~70cm、深さ15cm程度を測る。埋土は暗褐色土である。出土遺物はごく少量で弥生土器と古代の土師器片があるが、時期の特定はできない。

SD2003 (Fig.40) SD2002のすぐ西を南北に縱走する溝で、途中で東側に分岐している。細く深い溝で、調査区北側の溜池状の窪み部分にまで続いている。そこに入りすぐの部分に木の板を垂直に立ててあった。戦前までここは水田であったが、その水田に関わる用水路である。

SD2004 (Fig.40) 調査区の西側で検出した東西方向に走る溝である。断面は幅50cm、深さ40cmの逆台形を呈する。遺物は少量だけ出土した。中世後半か。

出土遺物 (Fig.47) 67は李朝の灰釉陶器碗である。底径5.5cm。胎土は灰色で白色粒・黒色粒を含む。釉は灰色を呈する。内面の見込に目跡が5つあり、外底の疊付にも重ね焼きした際の目跡の痕跡が確認できる。焼成は非常に良好でかたく焼けている。

SD2005 (Fig.40) 調査区西北部を南北に走る溝である。弥生時代前期の溝SD2007の真上にほぼ同じ向きで掘られている。検出面での幅が2.0~2.2m、深さ90~110cmを測る。土層の観察より一度埋没した後、断面が船底状に弧を描く形にもう一度掘り直されている（土層断面図の1層、暗褐色土）。出土遺物はコンテナ3箱分で、8世紀頃の古代が主で、弥生土器や黒曜石が少し混入する。

出土遺物 (Fig.43, 44) 38~42は須恵器である。38は壺で口径13.4cm、器高5.0cm、底径9.6cmを測る。39は大皿で底径15.0cmを測る。40は壺で口径15.0cm、器高3.5cm、底径11.0cmを測る。41は皿あるいは壺の底部。42は高壺で脚部の径は8.6cm。43は内黒の黒色土器である。底径8.0cmを測る。44は土師質の甕である。口径15.0cmを測り、外面肩部に縦刷毛を施す。灰白色で焼成は悪く、触ると手に粉がつくほどである。45は土師質の甕である。口径16.8cm。外面は擬格子の叩き、内面は同心円の当具痕が残る。須恵器の技法で作られているが、非常に焼成が悪く土師器質の灰白色で、触ると手に粉が付くほどである。窓内で焼成されたとは思えない。46は土師器の甕口縁部である。口径34.4cmを測る。外面は縦刷毛、内面は口縁部を横刷毛、体部を削り。47、48は弥生時代前期の甕の底部である。47は底径6.4cmで底面の真ん中が窪む。48は底径7.4cm。49は土製品。胎土は粗い礫を多く含んでおり弥生時代のものか。

石器は、石鎚5点、石鎚未成品2点、石錐2点、使用痕のある剥片139点、二次加工のある剥片2点、剥片253点、残核96点、小原石3点、計502点が出土している。安山岩の石鎚1点、残核1点、灰色黒曜石の剥片1点、残核1点が認められ、それ以外の498点はすべて黑色黒曜石である。報告した資料は59が安産岩で、その他はすべて黑色黒曜石である。55は五角形凹基石鎚で、長さ2.95cm、幅2cm、厚さ0.6cm、重量1.73gを測る。右脚端が外方にやや張り出す。56は短三角形凹基石鎚で、長さ1.3cm、残存幅1.95cm、厚さ0.4cm、重量0.56gを測る。57は三角形凹基石鎚で、残存長1.5cm、幅1.7cm、厚さ0.35cm、残存重量0.59gを測る。先端・基部が非対称形を呈す。58は三角形平基石鎚で、残存長1.85cm、残存幅1.6cm、厚さ0.45cm、残存重量1gを測る。59は安山岩製の三角形平基石鎚で、残存長1.25cm、残存幅1.6cm、残存厚0.45cm、残存重量0.68gを測る。60は石錐で、残存長3cm、幅1.3cm、厚さ0.8cm、残存重量2.89gを測る。61は石錐で、長さ1.87cm、幅0.92cm、厚さ1.16cm、重量1.7gを測る。先端に摩滅が認められる。

SD2007 (Fig.40) 弥生時代前期のV字溝である。古代の溝SD2005が真上にほぼ同じ向きで掘られているため、溝の底だけが残っていた。底面の幅は30cm、遺構検出面から底までの深さは130cmだが、実際に残っていたのは底の20~30cm分だけである。直上のSD2005の上半（1層）を掘りあげた段階で、黒褐色粘質土とそれに弥生土器が含まれることに気付き、検出は丹念に行った。トレンチを2箇

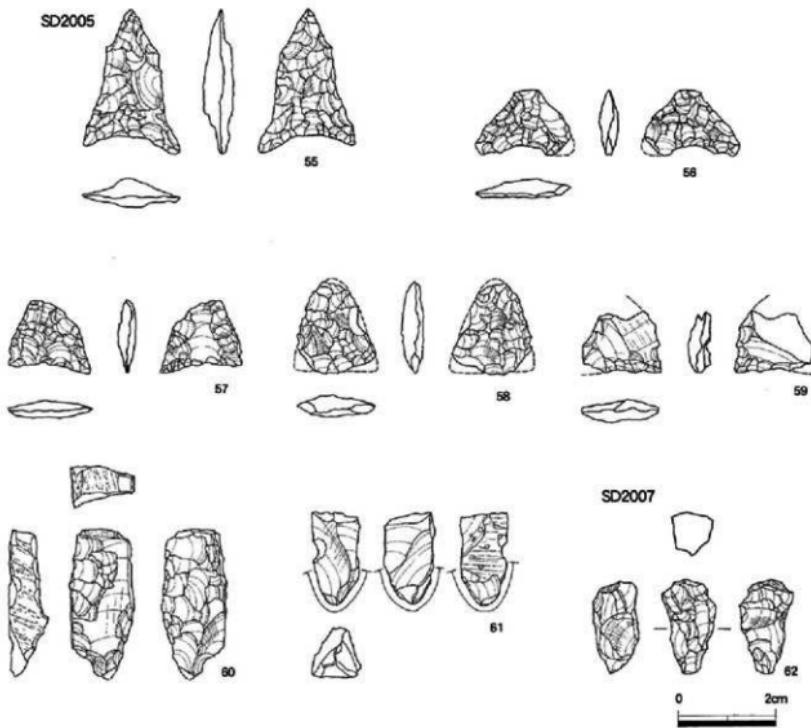


Fig.44 SD2005、2007出土遺物② (1/1)

所設定し、先に断面を確認したところ、2つの溝が切り合った高さで、新しい溝の底の一部が犬走り状に残ることが確認でき、これに注意しつつ掘り下げを行った。SD2005の底面まで掘ると、弥生時代のSD2007の底部が、主軸方向をSD2005よりも若干東に振って残っていることを確認できた。底の掘り下げ中、あまり大きな破片は出土しなかったが、弥生前期の腰底部片 (Fig.43の54) が出土し、溝の時期は弥生時代前期と判断した。

後日、注記・接合作業を終えて図化遺物を選別する時点で、中世前期の青磁3点をSD2007出土遺物の中に見つけた。これには現場段階では気付いていなかった。この評価であるが、SD2007直上には古代の溝SD2005が切っているが、これには中世の遺物は混じらない。また、SD2007は遺構検出面よりも100cmほど下でようやく検出したもので、この深さで中世の別遺構が切り合っており気付かずと一緒に取り上げたとも考えづらい。これらは土器洗いから接合にいたる整理作業中に誤ってSD2007出土遺物に混入したものである可能性が高い。確証がないため報告しておく。

出土遺物 (Fig.43、44) 50～52の青磁は整理段階で誤って混入した可能性が高い。50は龍泉窯系青磁の皿である。口径10.0cm、器高2.1cm、底径3.6cmを測り、外面下半は露胎である。釉は黄色がかった

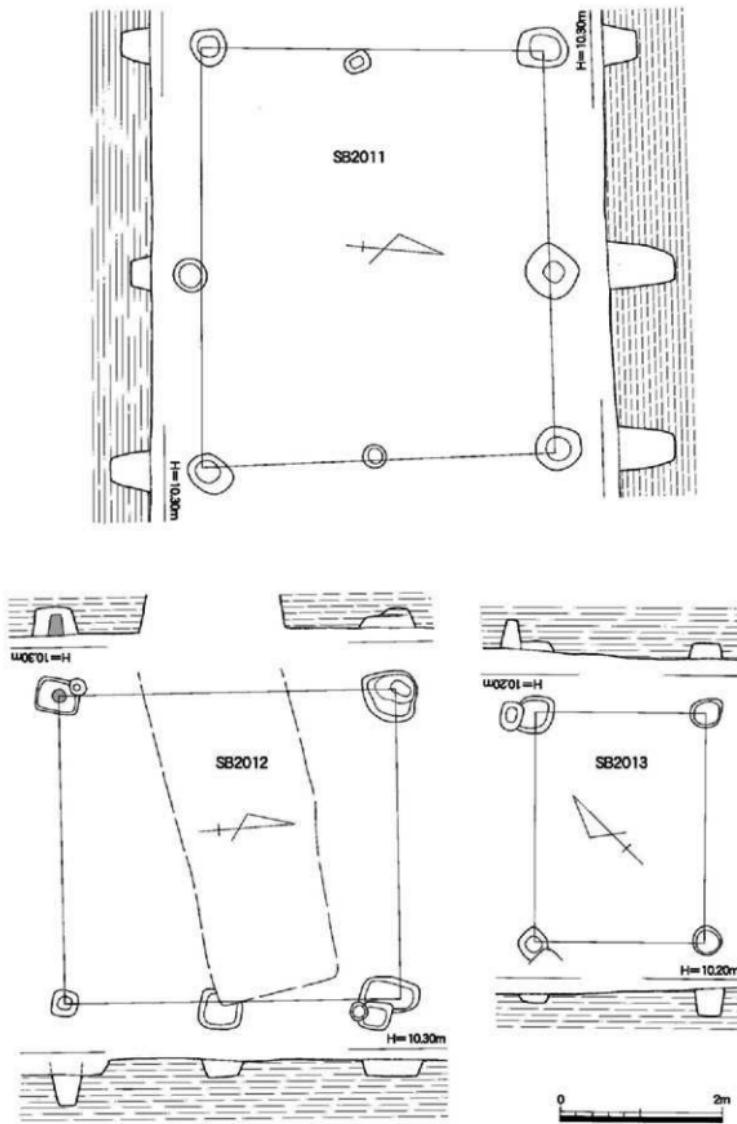


Fig.45 挖立柱建物SB2011、2012、2013 (1/60)

緑色を呈する。51は龍泉窯系青磁碗で見込に文様を彫る。底径6.4cmで高台側面まで釉が掛かる。釉はオリーブ緑色を呈し、光沢があり貫入がみられる。52は同安窯系青磁の小碗で口径5.0cmを測る。釉は灰色を呈する。外面下半は露胎。53は弥生時代前期の壺の小片である。外面に線刻を施している。54は弥生土器の壺底部である。平底で底径9.6cmを測る。石器は、石錐1点、使用痕のある剥片14点、剥片25点、残核8点、計48点が出土している。すべて黒色黒曜石である。62は石錐で、長さ1.9cm、幅1.1cm、厚さ0.9cm、重量1.6gを測る。

4. 挖立柱建物 (SB)

調査区内には多くのピットが存在し、3棟の掘立柱建物を復元した。このうち、SB2011、2012は現場段階で復元し、SB2013は整理作業段階で図上復元したものである。遺物が出土しないので建物の時期は不明である。ただ、掘立柱建物と溝の主軸方向に着目するとSB2011は中世後半の溝SD2001と、SB2012は8世紀代の溝SD2005と、それぞれ主軸方向が揃うようである。

SB2011 (Fig.45) 桁行5.2m、梁行4.2mの2×2間の掘立柱建物である。桁側の6つの柱穴は直径40~60cmであるが、梁側の真ん中の柱は直径30cmでひと回り小さい。

SB2012 (Fig.45) 桁行4.3m、梁行3.8mの2×1間の掘立柱建物である。西側の桁の中央の柱は搅乱で消滅している。

SB2013 (Fig.45) 桁行2.8m、梁行2.1mの1×1間の掘立柱建物である。

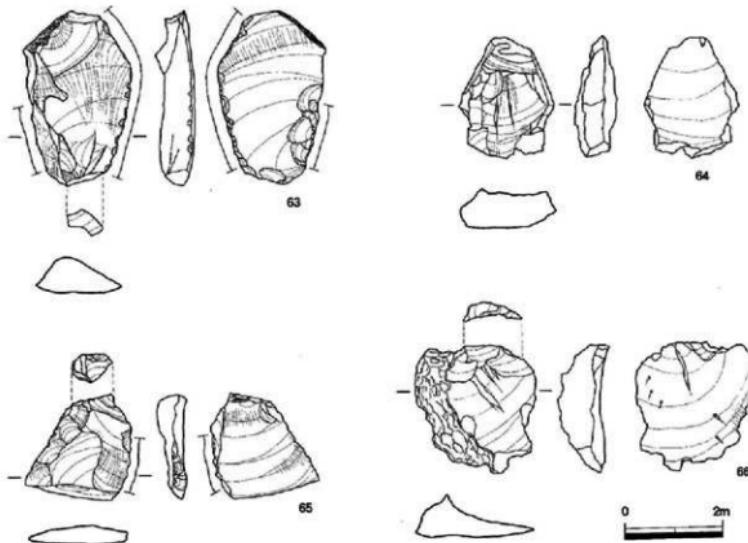


Fig.46 B区出土旧石器 (1/1)

5. 旧石器

本調査区では多量の黒曜石の石器、剥片が出土したが、わずかながら旧石器が含まれている。

旧石器 (Fig.46)

本調査区出土剥片石器群中、①黒色黒曜石の「円礫」を素材とする、②打面調整を行う、③バルバースカー（打瘤裂痕）が発達している、④風化度合いが強い、という特徴を有す一群（計6点）については、旧石器時代に属する可能性が高い。63～66はすべて黒色黒曜石製で強い風化が認められる。63は、溝SD2001出土の使用痕のある剥片で、長さ3.55cm、幅2.2cm、厚さ0.7cm、重量4.98gを測る。両側辺の両面に微細剥離がみられ、上端に円礫面を残し、下端および前面には平坦打面と発達したバルバースカー・フィッシャーが認められる。64は、溝SD2001下層出土の剥片で、長さ2.5cm、幅1.93cm、厚さ0.85cm、重量3.75gを測る。前面剥離面に発達したバルバースカーが認められる。65は、溝SD2005底出土の剥片で、長さ2.15cm、幅2.2cm、厚さ0.6cm、重量1.9gを測る。上端に切子打面が認められる。右側辺の片面に微細剥離が認められるが、剥離面が他の面に比べて新鮮で二重バティナをなしている。後世の再利用の可能性が考えられる。66は溝SD2005底出土の剥片で、長さ2.6cm、幅2.5cm、厚さ0.9cm、重量4.04gを測る。左側に円礫面を残し、上端に平坦打面、前後面剥離面に発達したバルバースカーが認められる。これら以外に、使用痕のある剥片が2点出土している。（板倉有大）

6. その他の遺物

その他の遺物 (Fig.47)

67は李朝の象嵌青磁である。SD2004出土。そちらの説明（39頁）を参照のこと。68は土師器の小皿である。口径7.0cm、器高1.5cm、底径5.1cmを測る。底部は回転糸切り。SP2200出土。69は龍泉窯系青磁碗である。底径6.8cm。見込み文様を片彫りする。釉はオリーブ緑色を呈し、全体に施釉した後、疊付の釉を搔き取る。SP2180出土。70は青磁碗の口縁部である。釉はオリーブ緑色を呈する。SP2195出土。71は砥石である。図の右側の面以外はすべていきており、図左側の側面以外の4面はすべて研磨に使用している。SP2195出土。72は石製品か。表面に凹凸のない滑らかな円礫を使用し、片面の中央が渦んでいる。SP2155出土。73は弥生土器の甕底部である。底径6.0cm。SP2101出土。74は弥生土器の口縁部。口縁部外面を肥厚させる。外面は磨き丹塗りする。内面は磨滅するが一部丹塗りを確認できる。SP2152出土。75は弥生土器の甕である。口径29.4cmを測る。SP2158出土。

石器は、石鎚4点、使用痕のある剥片44点、剥片110点、残核31点、計189点が出土している。安山岩の石鎚2点、剥片1点が出土した以外は、すべて黒色黒曜石である。76は溝SD2003出土の安山岩製三角形凹基石鎚で、残存長1.9cm、幅2cm、厚さ0.4cm、残存重量0.98gを測る。77も溝SD2003出土の安山岩製三角形平基石鎚で、長さ1.7cm、幅1.5cm、厚さ0.45cm、重量0.95gを測る。78は包含層出土の黒色黒曜石製三角形平基石鎚で、長さ1.9cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重量0.79gを測る。79はSP2155出土の黒色黒曜石製三角形凹基石鎚で、残存長1.4cm、残存幅1.35cm、厚さ0.3cm、残存重量0.47gを測る。

7. 小 結

B区の調査では、弥生時代前期の貯蔵穴3基と溝1条、古代の溝1条、中世後半の溝2条のほか、掘立柱建物3棟、ピット多数を検出した。また、出土遺物では旧石器6点が確認されている。

五十川遺跡群は那珂遺跡群のすぐ南に位置している。那珂遺跡群は弥生時代から古代にかけての質量ともに際立った内容をもつ集落遺跡として有名である。本遺跡はそのすぐ近くに位置し、地質的にも同じロームの基盤層上に立地するため、同様の大規模集落遺跡があつても不自然ではない。しかし、

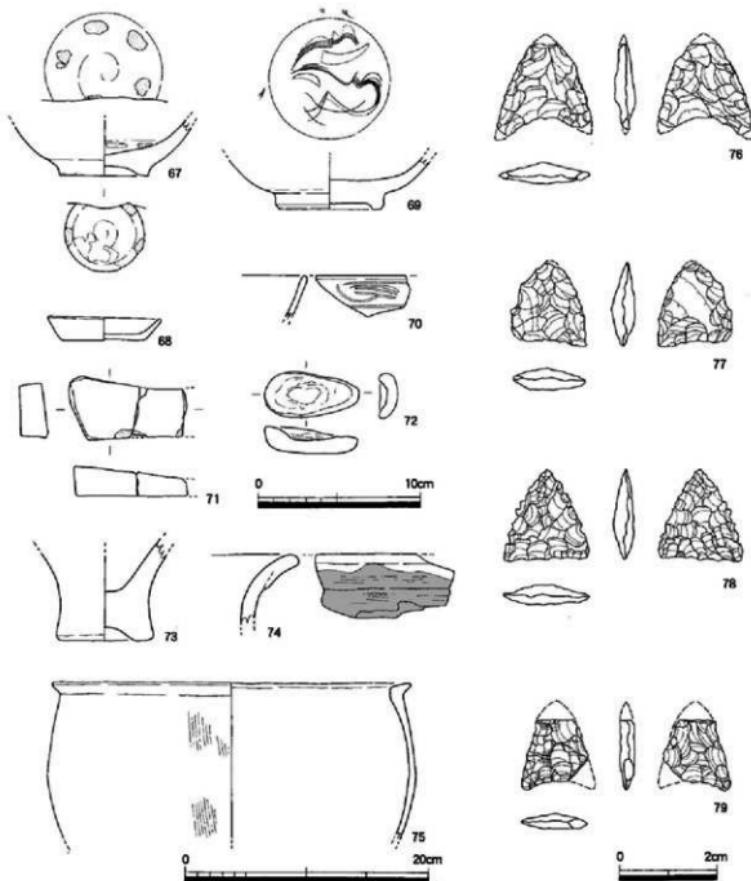


Fig.47 その他の出土遺物 (1/3、1/4、1/1)

これまで当地区における発掘調査の事例がわずかであったため、その詳細は不明であった。

B区の調査では、特に弥生時代前期頃、突帯文土器を伴う溝（おそらく大きなV字溝であったろう）や貯蔵穴が注目される。また、1000点弱の黒曜石の石器および剥片類が出土し、この地で石器製作が行われたことも分かった。今回の道路建設予定地における発掘調査により、本遺跡の姿がようやく明らかになってきつつある。

付論：五十川遺跡10次調査B調査区出土の剥片石器群について

板倉有大

はじめに

五十川遺跡第10次調査B区では、959点、総重量2068.13gの剥片石器類が出土している。本稿では、それらの基本情報の報告を行うとともに、整理に開わった立場からその位置づけについて若干の検討を行う。紙数・時間の都合上、石器群すべての図・写真・計測値・観察所見を掲載できない点や、石材の理化学分析を行っていない点は今後の課題としてご留意・ご寛容頂きたい。なお、剥片石器類全点の計測観察表については、福岡市埋蔵文化財センターで保管・公開する予定である。

I 石器群の所属時期

本遺跡出土剥片石器類は、弥生時代貯蔵穴（SG2008～2010）出土資料（Fig.38, 39）を除けば、弥生時代～中世の造構埋土および包含層から広く出土しており、土器との共伴関係が不明確な資料が大半を占める。ここでは、石器自体の特徴や周辺状況から所属時期の推定を行いたい。

まず、本石器群中の一部の資料は、いくつかの根拠から旧石器時代に属する可能性が高いものとして分離できる（Fig.46）。これらは、溝の底部など比較的下層から出土する点も共通している。それ以外の資料の大半は、西北九州産と思われる角礫状の良質黒曜石から打面調整をほとんど施さずに剥片剥離を行っており、入念な剥離前調整と石刃状剥片に特徴づけられる鈴桶型石刃技法（小畠ほか2003；杉原ほか1966）関連の石器類は認められなかった。鈴桶型石刃技法が北部九州において縄文時代後期～晩期前半を中心に盛行することをふまえると、本資料の大半はその後の縄文時代晩期後半～弥生時代に属する可能性が高いと考えられる。

吉留秀敏氏によると、北部九州における剥片石器類は、弥生時代中期中葉に急激に減少し、中期後葉にはほぼ消滅する。この様相には若干の地域差があり、博多湾岸付近では早く、周辺に行くにしたがい遅れる傾向がある、という（吉留2002a: 117）。本石器群の特徴および吉留氏による弥生時代剥片石器群の概要をふまえると、本資料の大半は、縄文時代晩期末～弥生時代前期に属すると考えられる。この傾向は、同一包含層出土土器の傾向とも矛盾はない。以下では、これら石器群の剥片剥離技術および製作器種について検討を行う。

II 剥片剥離技術および製作器種

福岡・良早両平野の西北九州産黒曜石の利用については、縄文時代晩期前半では、1辺6～7cm以上の原石が用いられるが、晩期後半からは、剥片石器類の素材は1辺4～5cm以下の角礫状の黒曜石が主体を占める（吉留2002a: 121・122）。その剥離技術については、打面調整を行わず、打面を頻繁に転移させる「無作為」「アトランダム」な剥離法とされている（小畠1991: 192）。ここでは、剥片石器類のサイズ、礫面残存率、剥離角などの量的属性から、剥離技術の傾向について検討する。

また、福岡平野における弥生時代剥片石器群の器種は、石鏸・石錐・搔器・削器・くさび形石器・二次調整（微細剥離）剥片からなる、とされる（吉留2002a: 122）。ただし、くさび形石器は、剥片剥離最終段階の残核の可能性も残る（吉留2003a: 538）。本資料中には、西北九州産黒曜石の小原石、残核・剥片、打製石鏸・石錐、使用痕のある剥片がみられ、器種の存否については他の同時期遺跡の様相とほぼ同じと言える。本節では特に、竹岡俊樹氏（1980・1989）の「微細な剥離痕をもつ剥片」の分析を参照しながら、使用痕のある剥片（used flake）について若干の検討を試みたい。竹岡氏は、

香川県朱雀台遺跡採集の微細な剥離痕をもつ資料について、剥離痕の位置、剥離痕の方向、刃先角、剥片の大きさ、剥離痕の形状、という属性を挙げ、その属性間関係から2つのグループ（削る作業を行った器種、切る作業を行った器種）に分類している（竹岡1989：130–132）。ここでは、使用痕のある剥片のサイズ、微細剥離の位置・形成面、刃先角など、主に用途の違いに関わる属性に着目して、器種分類を行う。

1. 計測・観察項目

サイズ計測の基準となる石器の置き方は、剥片については主要剥離面の打点剣を下位に置き、使用痕のある剥片については、使用部位（刃部）を下位に置いた。その置き方を基準として長さと幅の最大長を計測し（竹岡1989：39–41の「方法2」を参照）、バルブや剥片末端部の肥大部を避けた最大厚を計測した（前掲：42–44の「方法2」を参照）。打面と剥離面（ボジ面・ネガ面）からなる剥離角は、バルブ突出の影響を避けて計測した（前掲：61–63の「方法3」を参照）。剥片に残された疊面残存率については、通常は1石核あたりの剥片の量が少ないほど背面に疊面をもつ剥片の比率が高く、目的的剥片は背面に疊面を残す比率が低いと言われる（前掲：49）。ここでは、面積など量的な記述ではなく、見た目の傾向程度のものであるが、剥片に残された疊面の比率を記述している。打面については、疊面打面・平坦打面・点打面・切子打面に分類する（前掲：59）。これらの属性から目的的剥片の形状および剥離法の傾向について検討する。

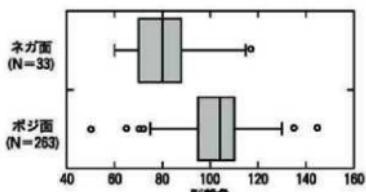
本資料中で微細剥離を有する石器群の大半は、使用痕のある剥片石器と認定している。微細剥離の形成要因については、①使用痕、②二次加工、③人為的でないキズ、の可能性が考えられる。本資料群については、微細剥離の位置が锐利な線辺にはほぼ限られ、剥離形成面が片面と両面にパターン化しており、その微細剥離によって一定の全体形状が指向されていないため、二次加工や破損というよりは①の使用痕である可能性が最も高いと考えられる。微細剥離が形成される刃部刃先角については、1個体でも複数箇所を計測し、分析においてはその平均値を用いた。

その他剥離技術に関する属性、例えば、剥離面の長さ、剥離面の数、打面転移、吉留氏（2002a：122）が指摘する「熱剥離痕」などについては詳細に検討できなかった。

2. 分析結果

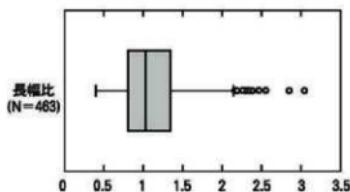
(1) 剥片剥離技術

肉眼観察による石材分類によると、腰岳近辺産と考えられる黒色良質黒曜石943点（99%）、長崎県佐世保市針尾島近辺産と考えられる灰色良質黒曜石4点（0.4%）、安山岩6点（0.6%）からなり、疊面の残存する資料はすべて角疊状を呈す。器種構成については、弥生時代石器群953点中、小原石3、残核178、剥片468、二次加工剥片2、使用痕のある剥片280（分類については後述）、石鎚（未成品含む）15、石錐7である。剥片・残核類の最大サイズは、最大幅6.03cmを測る剥片が1点あるが、それ以外はすべて5cmを超えない。この点から原石も1辺5cmを超えないと考える。打面形状は、観察可能資料315点中、疊面204点（64.8%）、平坦53点（16.8%）、点36点（11.4%）、と積極的な打面調整を施さないものが9割を占め、打面調整を行っている可能性がある切子打面が22点（7%）である。剥離角は、ネガティブ面（計測33面）で平均値82.3度、中央値80度、ポジティブ面（計測263面）で平均値102.8度、中央値104度である（Fig.48）。この剥離角の大きさは、打面形状の違いによる影響を受けている。剥片の長幅比（値が1より大きいほど縦長）は、平均値1.12、中央値1.03で、剥片が縦長・横長に偏ることはない（Fig.49）。剥片および使用痕のある剥片と石鎚・石錐の最大幅・最大厚を比較すると、石鎚が剥片のサイズ範囲に収まるのに対し、石錐は剥片よりも厚みをもつ（Fig.50）。また、使用痕のある剥片の方が、剥片よりも厚い傾向がある（Fig.51）。石鎚・石錐を除いた剥片・残核類

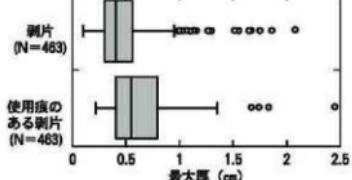
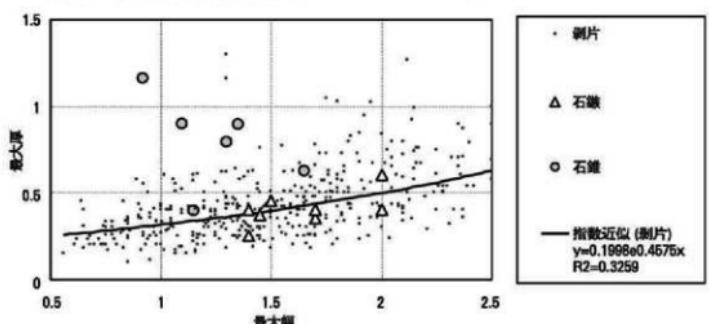


ネガ面 最小値60度 最大値117度 平均値82.3度
中央値80度 標準偏差15.5度

ポジ面 最小値50度 最大値145度 平均値102.8度
中央値104度 標準偏差13.8度

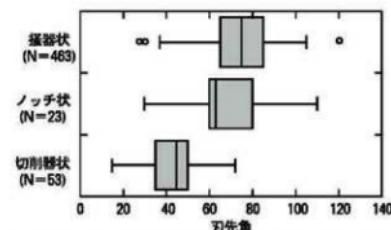


最小値0.4 最大値3.04 平均値1.12
中央値1.03 標準偏差0.43



剥片 最小値0.1cm 最大値2.08cm
平均値0.47cm 中央値0.41cm
標準偏差0.26cm

使用痕のある剥片
最小値0.22cm 最大値2.45cm
平均値0.63cm 中央値0.55cm
標準偏差0.3cm



掻器状 最小値27.5度 最大値120度 平均値73.7度
中央値75度 標準偏差15.4度

ノッチ状 最小値30度 最大値110度 平均値69.4度
中央値68度 標準偏差15.5度

切削器状 最小値15度 最大値72度 平均値43.9度
中央値45度 標準偏差11.9度

931点中、625点（67.1%）に礫面が残存しており、その比率は1/10以下が274点、1/7～1/5が165点、1/4～1/3が90点、1/2以上が96点である。礫面残存率ごとの最大幅平均値をまとめると、1/4以上が2.1cm、1/7～1/5が2.0cm、1/10以下が1.9cm、礫面なしが1.5cmとなり、礫面残存率が高いほど剥片のサイズが大きい。石錐に礫面を残すものはみられないが、石錐は7点中4点に礫面が残されている。これらの点から、石錐の素材は礫面を多く残すような厚みのある剥片であり、剥片剝離工程の初期に得られたものが多いと考えられる。

剥片類においてはその他に、バルブ突出、ちょうつがい状・アーチ状の末端形状、折断などがみられるが、いずれも安定的な特徴ではない。

（2）使用痕のある剥片の分類

使用痕のある剥片において、微細剥離は（a）片面微細剥離、（b）片面微細剥離の集中（ノッチ状）、（c）両面微細剥離、（d）1個体内に片面・両面微細剥離の両方がみられる、（e）上下端の階段状剥離・微細剥離、に分けられる。この使用痕パターンは搔く・削る・切る・割るといった使用法の違いを反映すると考えられ（竹岡1980・1989）、それぞれ（a）搔器状剥片、（b）ノッチ状剥片、（c）切削器状剥片、（d）搔・切削器状剥片、（e）クサビ状剥片、とした。刃先角についてみると、（a）搔器状剥片では、平均値73.7°、中央値75°、（c）切削器状剥片では、平均値43.9°、中央値45°となり（Fig.52）、搔器状剥片（鈍角刃先+片面微細剥離）、切削器状剥片（鋭角刃先+両面微細剥離）というパターンがみられる。また、片面微細剥離（搔器様使用痕）は剥片短辺部に、両面微細剥離（切削器様使用痕）は剥片長辺部に形成される傾向もある。

以上の分類に基づくと、使用痕のある剥片280点の細別器種組成は、搔器状剥片174点（62.2%）、ノッチ状剥片23点（8.2%）、搔・切削器状剥片23点（8.2%）、切削器状剥片53点（18.9%）、クサビ状剥片7点（2.5%）となる。搔く・削る作業に用いられたと想定できる搔器的な剥片石器が8割近くを占めている。

III まとめと展望 一本資料の持つ可能性－

縄文時代末～弥生時代前期には、1辺4～5cmの角礫状黒曜石が西北九州腰岳近辺から福岡平野内に持ち込まれており、そのルートは縄文時代後期以来の海上ルートであったと考えられる（吉留2003b・2004：241）。そのような西北九州産黒曜石の流入において、五十川遺跡に居住していた集団は、福岡平野内でも比較的豊富に良質黒曜石を有していたと評価できよう。福岡・早良両平野では、縄文時代晚期後半を境に、剥片石器類の素材が小型化する（吉留2002a：121・122）。この変化の要因について、吉留氏は（1）腰岳山麓での大型原石枯渇、（2）鉛桶技法の解体によって大型石材が不用になった、（3）石材採取地の変化、という可能性を挙げている（吉留2002b）。また、縄文時代の石材供給がリスク過減のために複数確保されていたのに対し、縄文時代晚期後半以降は腰岳産へ単一化する点については、「供給ルートの安定化を見るより、黒曜石を資材とする生産活動への意義が低下し続けた結果、ルートを削減したとみるべきであろう」としている（吉留2002a：122・123）。

黒曜石需要の低下に伴って、その交易ルートが削減されていったという側面とともに、その限られた交易ルートが、どのように運営されていたのかという問題は重要である。弥生時代前期社会において、今山斧や立岩石庖丁など、偏在する石材・技術をもとにした人工物の流通が知られるが、西北九州産黒曜石もまたそのような「特産品」の1つとして扱われていた可能性もある。弥生時代前期から中期にかけての北部九州における部族社会の展開過程（田中2000）を考える上でも、五十川遺跡とその周辺遺跡における西北九州産黒曜石の消費形態の解明は、今後の重要な課題であると言えよう。

また、五十川遺跡出土石器群では、剥片剥離前調整をほとんど行わず、得られた剥片に対しても二次加工をほとんど施さない小型剥片石器が主体を占めており、黒曜石製石器の便宜的な使用が特徴的である。これには2つの側面があると考える。1つには、五十川遺跡での西北九州産黒曜石の消費形態が、石鏃・石錐製作のための目的剥片の作出と、それ以外の剥片の便宜的な使用、というレベルに分かれるという側面である。非目的剥片の便宜的な使用というレベルでは、五十川遺跡に持ち込まれた西北九州産黒曜石は、五十川遺跡で消費されていたと言えるが、石鏃・石錐の目的剥片の作出というレベルでは、それらが遺跡外に持ち出され、周辺に流通していた可能性も考えられる。ここではこの問題を詳細に論じることができないが、先述した弥生時代前期から中期にかけての福岡平野における社会復元を考える上でも、石鏃・石錐の素材剥片の流通という問題は検討の余地があろう。

もう1つには、便宜的な製作と使用とはいえ、西北九州産黒曜石製石器を用いた、何らかの対象物（黒曜石に微細剥離が生じる程度の硬さを有する）に対する加工（搔く・切る・削る・割る）という行為がなされていたという側面である。現段階では詳細は不明と言わざるを得ないが、木質・骨角質・皮質の加工に使用された可能性が高いと思われ、木器・骨角器・皮革品との関連も含めて検討する必要がある。このような加工工具としての黒曜石製剥片石器の実態は、大陸系磨製石斧類や鉄器使用への移行の問題を考える上でも、重要な要素となる。

以上、五十川遺跡10次調査B調査区出土の剥片石器群について、主に資料の持つ可能性について述べてきた。弥生時代における剥片石器類の研究は、縄文時代から弥生時代への文化的連続性を理解し、かつ部族社会の原理から階層化社会への移行を考える上でも、重要な課題である。今後の調査・研究において、本資料の可能性が十分に活かされることを期待したい。

謝辞：福岡市教育委員会および上角智希氏には本資料報告の機会を与えて頂き、吉留秀敏氏には本資料の検討上ご指導を頂いた。九州大学大学院人文科学府修士課程の森貴教氏にはデータ整理に協力して頂いた。記して感謝したい。また、久住雄三氏、境聰子氏、田中良之先生、溝口孝司先生にも、機会に応じてご助言を頂いた。記して御礼申し上げたい。

参考文献

- 小畠弘己 1991「第6章 第26次調査地点」吉留秀敏編『比恵遺跡群』、168-202頁、福岡市教育委員会
 小畠弘己・水ノ江和同・富永明子 2003「鉛型石刃技法とその意義」『日韓新石器時代の石器』、1-12頁、九州
 　　縄文研究会・韓国新石器研究会
 杉原莊介・戸沢充則・横田義章 1966「九州における特殊な刃器技法」『考古学雑誌』51-3、147-170頁
 竹岡俊樹 1980「香川県朱雀台第一地点における石刃技法の分析」『考古学研究』26-4、
 竹岡俊樹 1989「第2章 遺跡研究の方法」『石器研究法』、33-164頁、言叢社
 田中良之 2000「墓地から見た親族・家族」都出比呂志・佐原真編『古代史の論点2』、131-152頁、小学館
 吉留秀敏 2002a「北部九州弥生時代中期の剥片石器」25周年記念論文集編集委員会編『究班II』、117-124頁、
 　　埋蔵文化財研究会
 吉留秀敏 2002b「北部九州の剥片石器石材の流通」『Stone Sources』1、63-65頁
 吉留秀敏 2003a「弥生時代開始期の石器技術：石鏃について」立命館大学考古学論集刊行会編『立命館大学考古
 　　古学論集III』、537-548頁、同刊行会
 吉留秀敏 2003b「北部九州における鹿島産黒曜石の流通」『Stone Sources』3、91-94頁
 吉留秀敏 2004「縄文時代後・曉期の剥片石器生産について：石器・石材供給システムの構造」広島大学大学院
 　　文学研究科文化財学研究室編『考古論集：河瀬正利先生退官記念論文集』、231-244頁、河瀬正利先生退
 　　官記念事業会



1. B区調査区西半（南から）



2. B区調査区東半（北から）



1. 貯蔵穴SG2008（東から）



2. 貯蔵穴SG2010（北東から）



3. 溝群（北東から）



1. SD2001 (北から)



2. SD2005、2007 (北東から)



3. SD2005、2007土層 (北から)

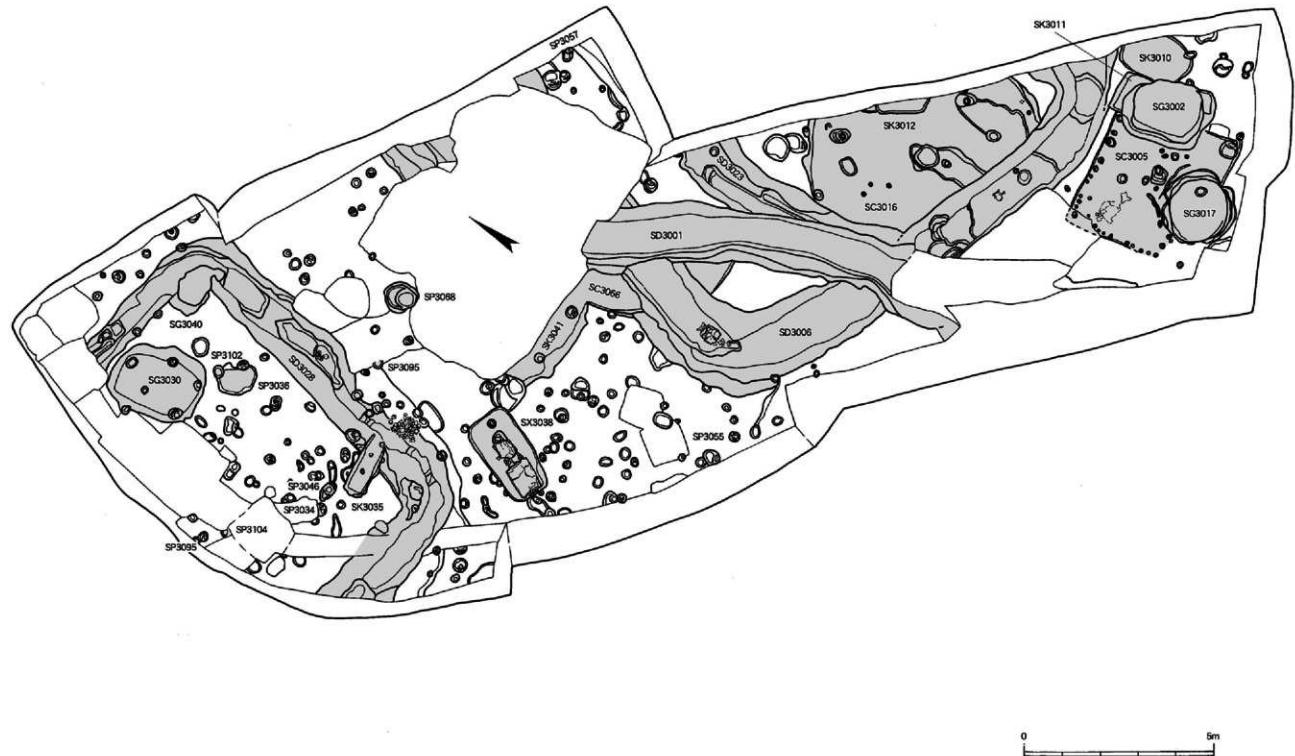


Fig.53 C区造構全体図 (1/100)

第五章 C区の調査

1. 調査の概要

C調査区は、五十川遺跡の西北部端に位置し、これ以北は遺跡のる丘陵が崖をなして落ち、沖積地へと移行する。この地形は、西側の那珂川の度重なる氾濫攻撃によってもたらされたものと考えられる。

調査区は、建物解体後の整地のために真砂土で全体が約30cmほど被覆されていたため遺構面までの土量が多く、先ず南半部の調査を行い、ついで打って返しを行い、北半部側を調査した。

調査区の基本的層序は、東壁の土層図(Fig.50)によれば、1層-客土真砂土、2層-擾乱土、3層-黄灰色砂質土(小礫・炭化物混)、4層-黄褐色シルト(小礫・土器片・炭化物混)、5層-黄灰色シルト、6層-暗褐色シルト(土器片混)、10・13・17層-黒褐色シルト(ローム塊・土器片混)となり、客土などを除けば基本的に殆ど水平の堆積と認められる。基盤層は鳥栖ロームである。

なお、3層上面で海拔標高は11m弱を測る。

また、第6層下面で殆どの遺構が壁面の立ち上がりを断たれていますから、この時期に周辺一帯で何らかの削平行為があったものと推定される。

主要な遺構は、竪穴住居跡3軒(SC3005・3016・3066)、貯蔵穴4基(SG3002・3017・3030・3040)、土坑5基(SK3010・3011・3012・3035・3041)、箱式石棺墓1基(SX3038)、溝状遺構4条(SD3001・3006・3023・3028)などが検出されたが、削平のためか全体に残りは浅く、柱穴などのまとまった遺構は殆ど残っていない。

特徴的な遺構としては、竪穴住居は長方形と円形があり、前～中期の所産である。特に前期住居では黒曜石石核などが多く伴っている。

また、貯蔵穴SK3030は前期の所産で、隅丸長方形を呈し、壁が直立する。内部より多量の炭化米が出土した。

また、溝状遺構のうちSD3006・3028は方形周

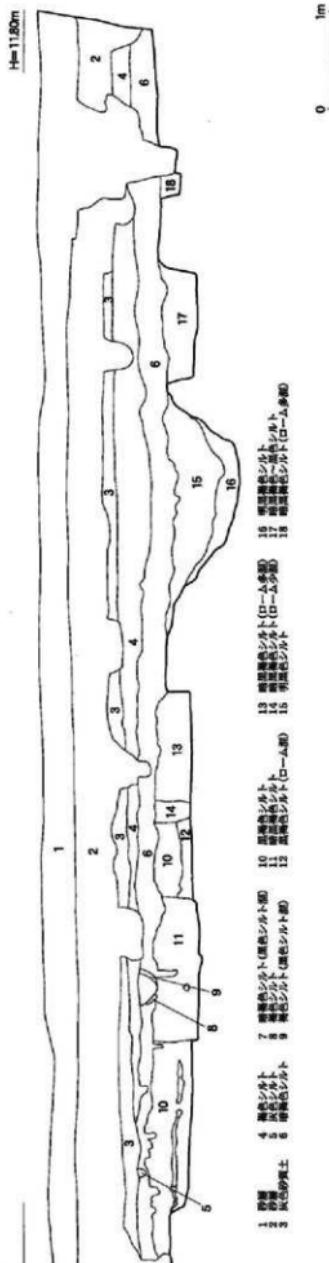


Fig.54 東壁南北土層断面実測図 (1/50)

溝墓の周溝であり、いずれからも該期の二重口縁壺や小型丸底壺・高杯などの土師器を出土している。

さらに、平安後期土塙墓とともに居館の区画と考えられる溝も検出されている。

このようにC調査区では弥生時代前期から室町時代までの生活跡・墓地が知られる。

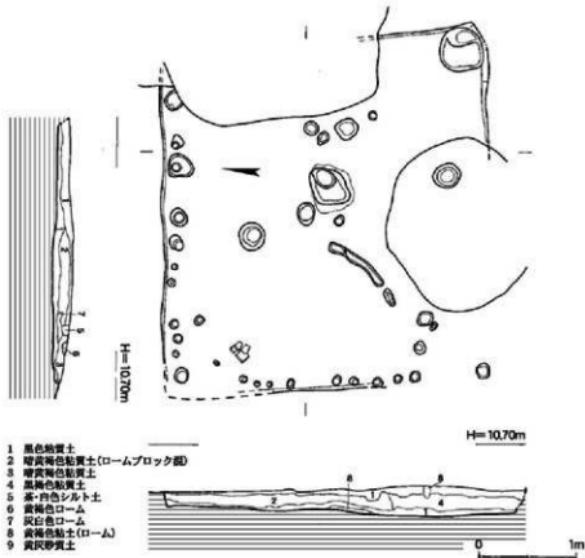


Fig.55 SC3005堅穴住居跡出土状況実測図 (1/50)

2. 堅穴住居跡 (Fig.53・55～57, PL.8)

堅穴住居SC3005 (Fig.53・55, PL.8)

本住居跡は、調査区の南端部に位置し、長方形を呈する。ほぼ東西方向に軸線をとる。プラン壁は、貯蔵穴SG3002・3024に重複し、また周辺の削平によって遺存状況が悪い。プランは南東壁のコーナーと北壁・西壁の一部を残す。残存する壁延長から推定すると、住居規模は東西辺長3.6m、南北辺長3.35mを測る。壁高は10~20cmを残す。主柱穴は明らかではないが、床面中央には径50cm・深さ5cmほどを測り、壁周辺が焼けで赤変した不整円形の浅い土坑が知られ、中には炭化物・焼土が詰まっていることから炉跡と考えられる。また、西・北壁に沿っては径10cm程度の小ビットが約20cm間隔に連続して見つかった。壁の支柱かと考えられる。遺物は、覆土の全体から出土したが、特に北西隅の床面付近では甕破片がまとまって出土したほか、黒曜石の石鎚や石核・剥片類も伴っている。

出土遺物 (Fig.56・57) 03016は、薄手の夜臼式甕口縁破片である。上端部突帯いっぱいに刻み目を施す。器色は灰褐色である。胎土には石英・長石砂を少量含み、焼成は堅緻である。03013は、丸味のある低い突帯を巡らす夜臼式甕の口縁破片である。刻み目は鈍く、大きい。器色は褐色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石砂を多量に含む。03014も同様に鈍い突帯を巡らす夜臼式甕である。器面調整は、磨減のために不詳である。器色は灰褐色を呈する。焼成は堅緻で、胎土には石英・長石砂を多量に含む。口径25.4cm。床面出土。03006は、やや口縁が立つが、小型の鉢であろう。口縁上端部を小さく引き出している。器面調整は荒れのために不詳である。器色は明灰色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石砂を少量と赤色粒を含む。03004は、緩く開く口縁端部の全面いっぱいに

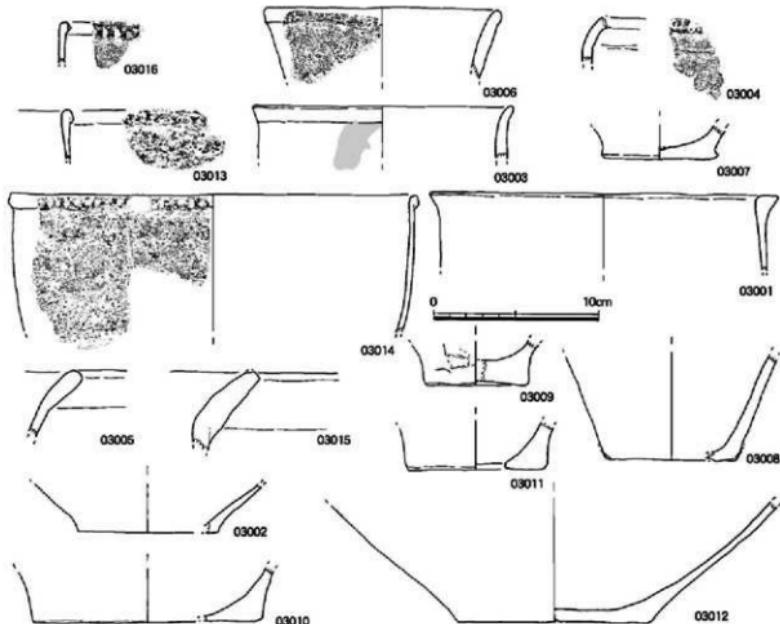


Fig.56 SC3005全穴住居跡出土遺物実測図1(1/3)

刻み目を施す前期壺の小破片である。口縁下は低い段をなす。器面調整は、口縁直下にタテハケ、これ以下はヨコハケが残る。器色は橙色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石を多量に混入する。03003は、小型の鉢か。器面は荒れが著しいが、外面に丹を塗布する。器色は暗灰～灰白色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石砂を少量混入する。口径は16.2cmを測る。

03001は、口縁外端が飛び出し、小さい平坦口縁をなし、口縁から肩部へは器壁が大きく減じる印象の甌である。器面調整は、荒れ・剥落のために不詳である。器色は使用による二次的熱変成のためか、鈍い黄橙～明灰色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石砂を多量に含む。口径は21.6cmを測る。03007は、底部の下端がやや飛び出し、緩い上げ底となる甌破片である。稀少は灰褐～灰白色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石砂を多量に混入する。底径6.4cmを測る。

03005は、端部が肥厚する壺の口縁部破片である。器面調整は磨滅のために不詳である。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石砂を多量に混入する。03015は、壺の口縁部破片で、頸部との境に段を有する。内面及び外面の上部に丹の痕跡がある。器色は灰白色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石砂を多量に含む。03002は、中心部を殆ど失う壺底部破片である。器壁は非常に薄い。器面調整は荒れ・剥落の為に不詳である。内外面共に丹塗か。器色は橙～灰白色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。復元底径8.8cmを測る。03010は、大型壺の底部である。調整は荒れのために不詳である。器色は淡黄橙～灰白色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石砂を多量に混入する。底部径14.2cmを測る。03009は、やや上げ底となる甌底部破片である。器面の調整は、内外面共にナデである。

器色は明灰～灰白色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石砂を多量に混入する。底部径6.4cmを測る。03011は、底部中央に二次穿孔のある壺底部破片である。器面調整は、内外面共にナデを施す。

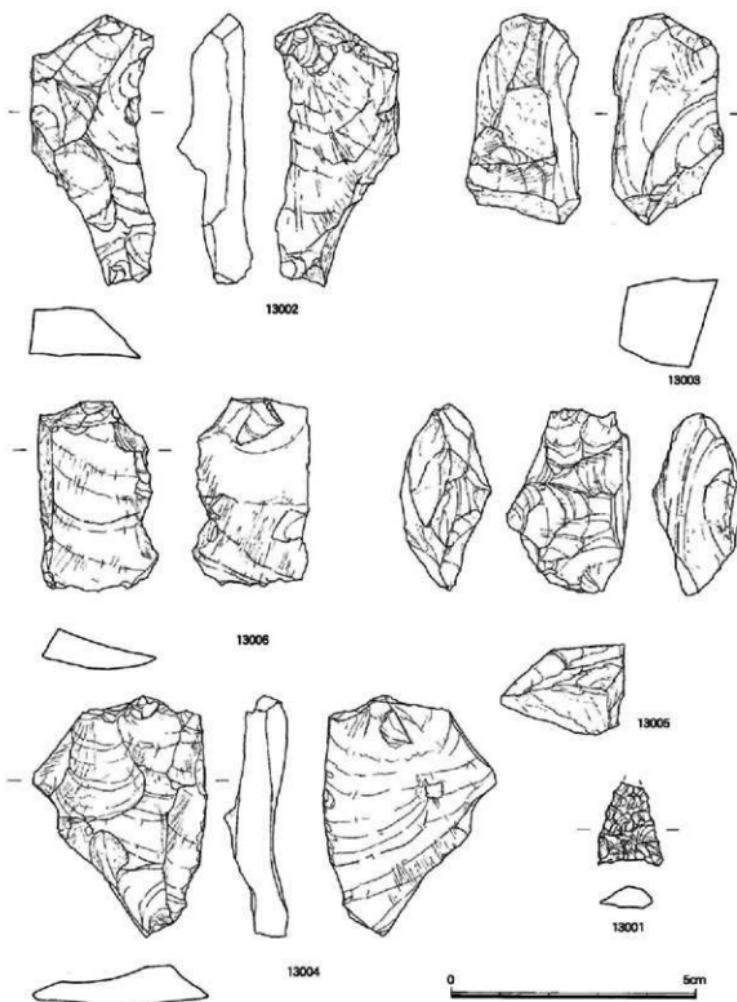


Fig.57 SC3005整穴住居跡出土遺物実測図 2 (1/1)

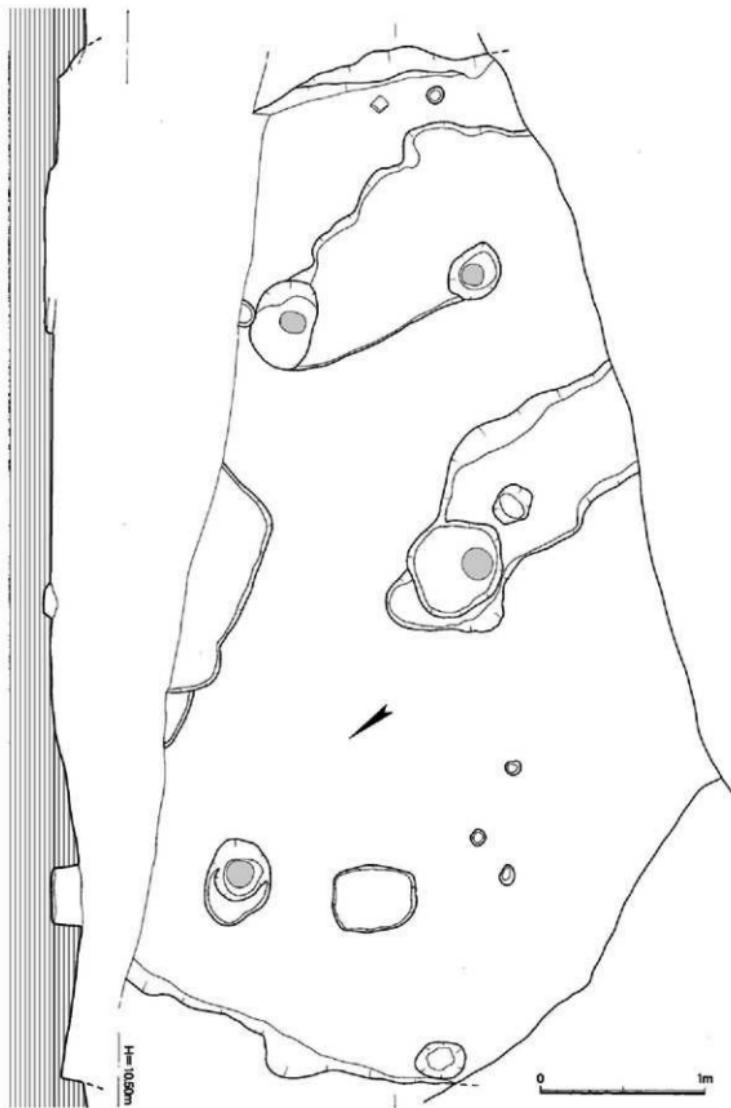


Fig.58 SC3016整穴住居跡出土状況実測図 (1/30)

器色は褐灰～明褐灰色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石砂を多量に混入する。底部径8.8cmを測る。03008は、甕の底部破片である。器面調整は、荒れのために不詳である。器色は内外面ともに褐色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石砂を多量に混入する。底部径8cmを測る。03012は、薄造りの大型甕底部破片である。器面調整は、荒れ・剥離のために不詳である。器色は鈍い橙色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石砂を多量に混入する。底部径11.8cmを測る。床面出土。

次に、石器類は黒曜石の石核・剥片がまとまって出土している。図示しなかった黒曜石の製品も全て黒色を呈し、比較的小型の角礫が素材として集められ、加工されている。

13002は、自然面を打面とするやや縦長の不整な剥片である。側辺にも自然面を残す。法量は、縦長・横長・厚さが $55 \times 25 \times 15$ mm、重さ13gを測る。

13006も自然面を打面とする剥片である。気泡を含むためか主要剥離面のリングは乱れる。側辺に自然面を残す。法量は、縦長・横長・厚さが $39 \times 24 \times 5$ mmで、重量5gを測る。

13004は、使用痕のある剥片である。剥片の両側辺に使用による刃こぼれが見られる。法量は、縦長・横長・厚さが $49 \times 36 \times 13$ mmで、重さ約14gを測る。

13003は、自然面を打面とする黒曜石石核である。2～3回程の剥片はぎ取りを行っているが、原材料のサイズから最大で横長3cm・縦長2cm程度の剥片を得ることができたと思われる。石核の法量は、縦長・横長・厚さが $22 \times 12 \times 18$ mmで、重量20g強を測る。

13005は、打面調整をもつ黒曜石石核である。打剥できた剥片はかなり小形である。法量は、縦長・横長・厚さが、 $25 \times 30 \times 18$ mmで、重量約15gを測る。

13001は、基部が平基式に近い脇挟りをなす黒曜石の打製石器である。先端部を欠失する。断面は片面加工に近い「D」字形をなす。残存長は17mm・重さ0.68gを測る。

住居跡SC3016 (Fig.58・59)

本住居跡は、調査区の南東壁近くで検出し、円形プランをなす。東側は調査区外で、南～西側を古墳時代溝SD3006や中世溝SD3001・3023より切られて壁を失っている。規模は、残存する壁の差し渡しから径が6.5m程度と推定できる。主柱穴と考えられるのは、北壁側に径が50cm程度の不整円形のものが2個確認できる。このうち東側の柱穴では径が20cm弱の柱痕跡が知られる。また、南壁では不整形ながらベッド状構造と考えられる高さ5cm前後の高まりが検出された。住居跡覆土内からは夜白式甕や前期甕、黒曜石フレイク・チップ、蛤刃石斧、石英長石斑岩と考えられる礫など少量が出土した。

出土遺物 (Fig.59) 03018は、小形の甕底部破片である。器面調整は、磨滅のために不詳である。器色は橙色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石を大量に混入し、一部に金雲母も混じる。底部径8cmを測る。03017は、底部中央を欠く甕底部破片である。器面調整は、外面にハケ・内面にナデ

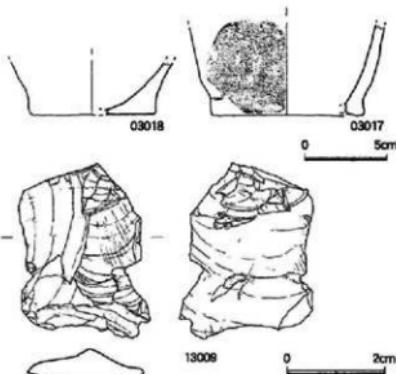


Fig.59 SC3016竪穴住居跡出土遺物実測図
(1/3×1/1)

を施す。器色は外面が灰褐色、内面が鈍い褐色を呈する。焼成は堅緻で、胎土には石英・長石砂を大量に混入する。底部径は9.5cmを測る。

13009は、黒曜石剥片である。内部に夾雜物が見られ、主要剥離面側にもリングの亂れが顕著である。剥片法量は、縦長・横長・厚さが $36 \times 27 \times 7$ mmで、重量6gを測る。

住居跡SC3066 (Fig.60)

本住居跡は、住居跡SC3016の北側に隣接して見つかった円形プランのもので、これよりやや小形である。西側の壁の一部を残し、他は北側で大攪乱に、東・西・南側で溝SD3006・3001・3023に切られて壁を失っている。残存する壁の延長からその規模を推定すると、直径は約6m、壁高は20cm程度を残す。住居跡覆土内からは黒曜石チップが若干出土した。

3. 石棺墓 (Fig.53-61, PL.9)

石棺SX3038は、調査区の西隅に位置し、調査区内では一基しか検出できなかった。石棺は、磁北よりやや東に長軸線を振って埋納されており、頭位は南西側を向いている。

また、石棺西側壁の一部及び蓋石は外圧によって棺内へ倒れたり、破碎して落ち込んでいる。

① 挖方 石棺墓の掘方は、二重となっている。外側の掘方は、隅丸長方形を呈し、長辺長が248cm、南側短辺長95cm・北側短辺長122cmで、深さは壁直下で5cmで、内部掘方に向かって傾斜している。また、内部掘方は、頭部にあたる南側の短辺長で50cm、北側足部で36cm前後を測り、バチ形をなす。長辺長は、180cm前後で、墓壇の深さは約30cmを測る。

② 石棺 石棺は、西側壁が被損をしているが、内部掘方内に残る石材据え付けの掘方で見ると、東側壁には3枚、西側壁にも3枚の石材が使用されていたと想定され、小口材とともに玄武岩礫が用いられている。また、蓋石は板石を用いた二枚を残しているが、何れも石材の周辺部は両面とも丁寧

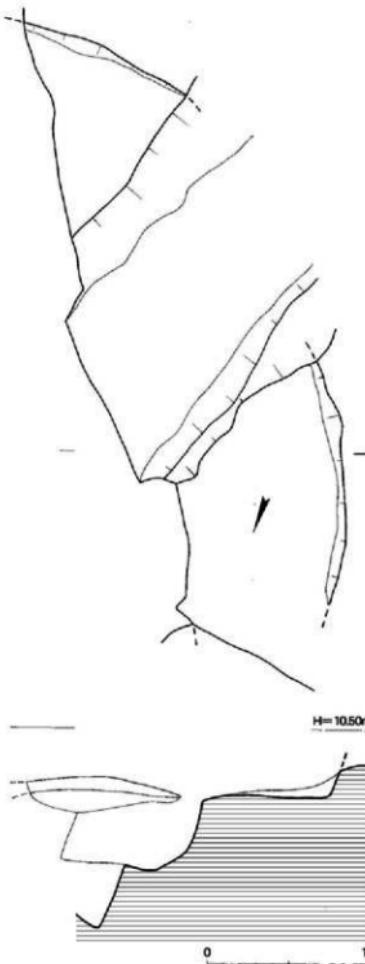


Fig.60 SC3066整穴住居跡出土状況実測図 (1/30)

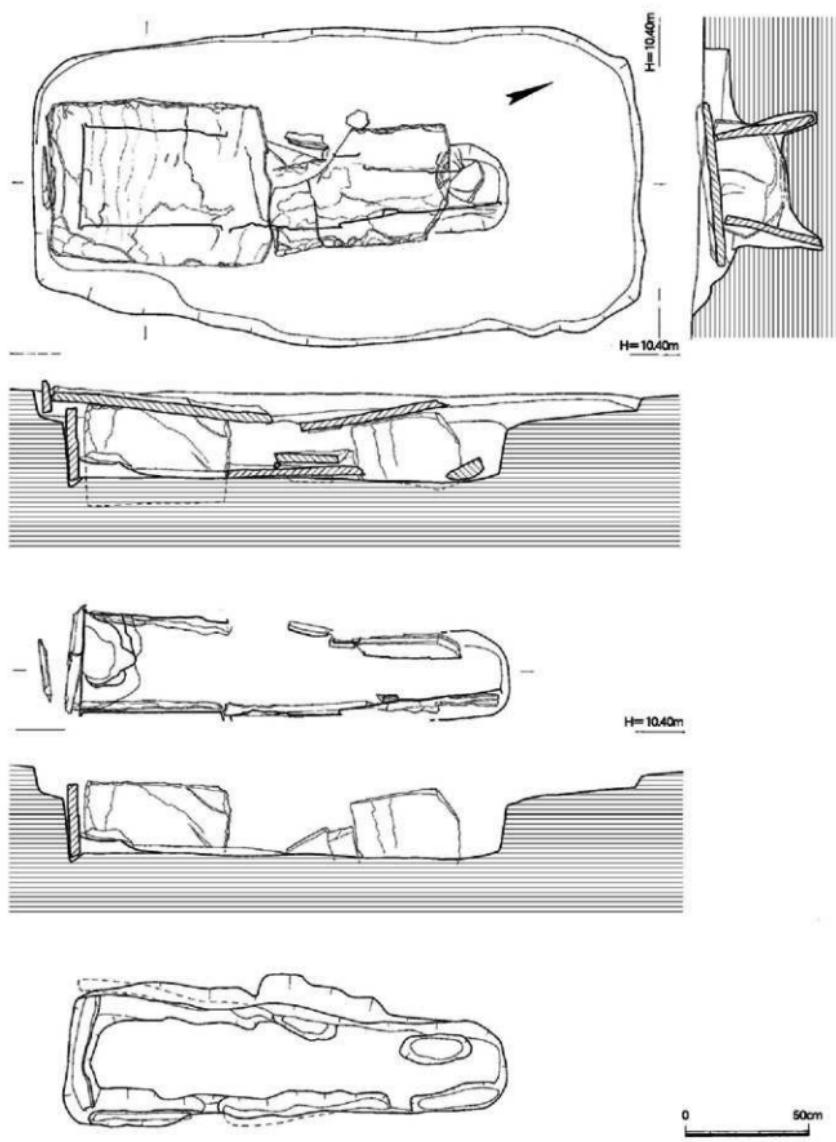


Fig.61 SX3038石棺墓出土状況実測図 (1/20)

な打剥によって整形されている。頭部側の蓋石は、短辺が65cm前後・長辺が90cm前後・厚さ4~5cmの長方形をなし、足側の蓋石は長辺が75cm前後・短辺が50cm前後・厚さ4cm弱の長方形となっている。

③ 内部施設 石棺の頭部にあたる小口には石材に造りつけた枕と想定できる施設が見つかった。小口から手前に幅25cm程度、床面からは高さ10cmほどに黄褐色ロームに黒褐色粘質土を混じた土を置き、最上面を20×25cm程に窪ませている。

SX3038では、共伴する副葬土器や副葬品は出土せず、掘方の埋土等から弥生中期壺破片・黒曜石チップ・土師器破片・棺材破片などが少量出土した。

4. 土坑 (Fig.53・62~69, PL.7・10・11)

土坑SK3010 (Fig.62・63, PL.7)

土坑は、調査区の南端、東壁にかかって検出された。本来のプランは、隅丸長方形と想定される。壁の立ち上がりは緩く、底面も中央が緩く窪む。規模は、長辺が1.9m・短辺が1.1m強・深さ0.3m以上である。隣接する貯蔵穴SG3002を切る。

土坑では、覆土から弥生時代前期壺・甕、土製纺錘車、玄武岩磨石、管玉、黒曜石フレイク・チップ、土師器高台付椀などが出土した。

出土遺物 (Fig.63) 03056は、やや上げ底の甕底部破片である。器面調整は、荒れのため不詳である。器色は灰褐色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石砂を多量に混入する。底部径は7.2cmを測る。03055は、底部の端部が僅かに円盤貼付底の手法を窺わせる壺破片である。内外面共に器面の荒れが著しく、調整は不詳である。器色は内外面共に鈍い橙色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石砂を多量に含む。底部径8.1cmを測る。

03054は、高台杯土師器椀の破片である。器面は荒れが激しく、調整は不明である。器色は内外面共に灰白色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石砂を多量に含む。底部径7.2cmを測る。

03057は、土製纺錘車である。ほぼ完形品である。器色は鈍い橙色を呈する。径は5.4~5.3cm、厚さ1.1cmで、重さ36.5gを測る。胎土は密で、焼成は堅緻である。

13029は、碧玉製管玉である。色調は緑灰色を呈する。長さ8.5mm、径4.5mm、孔径1.5×2mmで、重さ0.25gを測る。

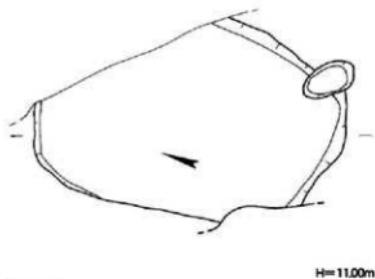


Fig.62 SK3010土坑出土状況実測図 (1/30)

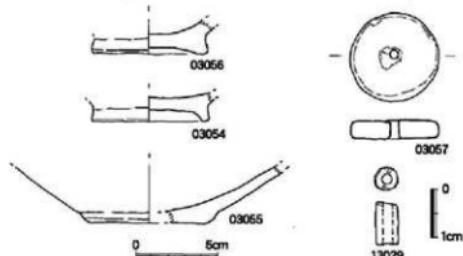


Fig.63 SK3010土坑出土遺物実測図(1/3-1/1)

土坑SK3011 (Fig.64・65、PL.7)

本土坑は、調査区南東隅の土坑SK3010に隣接し、切られており、より古い時期の所産である。プランは、長方形であったと考えられる。北側のコーナーが残り、短辺で1m、長辺で0.8m以上、深さ0.4mを測る。また、切り合ひから隣接する貯蔵穴SG3002より古いと考えられる。埋土内より前期甕破片、黒曜石石核・フレイクが少量出土した。

出土遺物 (Fig.65) 03058は、短く外開する口縁を有する甕破片である。器面は、磨滅のため調整が不明である。器色は内外面共ににぼい橙色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石砂を大量に含む。口径26.2cmを測る。

13031は、黒曜石石核である。自然面を打面とする石核で、殆ど片面に打剥痕がみられ、他面は蹠面を残す。法量は、縦長・横長・厚さが、 $22 \times 34 \times 16$ mm、重さ11.2gを測る。

13030も黒曜石石核である。自然面を打面とし、同一方向からほぼ全周に打剥痕がみられる残核である。法量は、縦長・横長・厚さが $20 \times 32 \times 29$ mm、重さ14gを測る。

土坑SK3012 (Fig.66)

本土坑は、調査区の南東壁際で検出した。全体プランは、長方形となるか。規模は、西側辺で1.1m、深さ5cm程度を測る。埋土内からは、弥生甕破片や黒曜石フレイク・チップなどの遺物が少量出土している。

土坑SK3035 (Fig.67・68、PL.11)

本土坑は、調査区北西側で検出された土壤墓である。方形周溝墓のSD3028の覆土内に営まれ、東側に隣接して供獻行為と考えられる土師器碗・皿の集積が見られる。

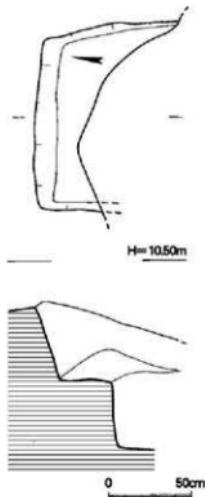


Fig.64 SK3011土坑出土状況
実測図 (1/30)

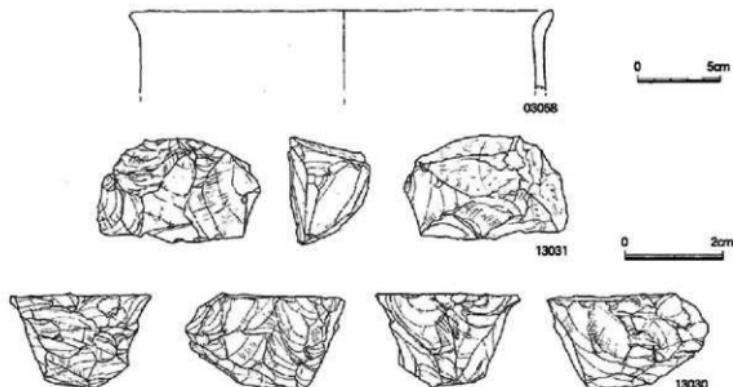


Fig.65 SK3011土坑出土遺物実測図 (1/3+1/1)

SK3035は、ほぼ東西方向に軸をとり、東小口部を失う。掘方規模は、長辺が1.7m以上、短辺西側が0.55m・同東側が0.5mを測り、東側にすばまる。また、深さは35cm前後である。東側小口の床面近くに土師器高台杯碗（03060）・同皿（03061）が正立の状態で出土しており、副葬土器と考えられる。

また、土壤墓の東側には高台杯碗（黒色土器）を主としてヘラ切り・糸切り底の皿が混じり合って出土した。碗類は伏せた状態のものが多く、全体を浅い土壤に埋納したとおもわれ、最上部には礫が置かれている。

出土遺物（Fig.68）03059は、外面に荒い条痕文を施す縄文土器鉢破片である。器色は褐～黄灰色を呈する。胎土に石英・長石砂を多量に混入する。

03060は、土師器高台杯碗である。調整はナデで、ロクロ回転は時計回りである。器色は灰白～黄橙色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径15.5cm・器高6cmを測る。03061は、土師器皿である。外底に板目圧痕を残す。器色は灰白色を呈する。胎土密で、焼成は堅緻である。底部径7cmを測る。以上03059～03061は土壤墓出土。

次に、03077は、土師器皿である。底部はヘラ切り後の板目圧痕が残る。器色は内外面共に鈍い橙色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。底部径6.2cmを測る。03067は、土師器杯である。底部は回転ヘラ切りで、板目圧痕を残す。器色は外面が灰白色、内面が鈍い橙色である。口径11.2cm・器高2.7cmを測る。03065は、土師器碗である。器面の磨滅が著しい。器色は外面が淡黄橙色、内面が鈍い橙色である。胎土は密で、焼成は堅緻である。高台部径8.7cmを測る。

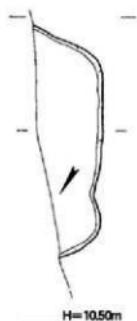


Fig.66 SK3012土坑出土状況実測図 (1/30)

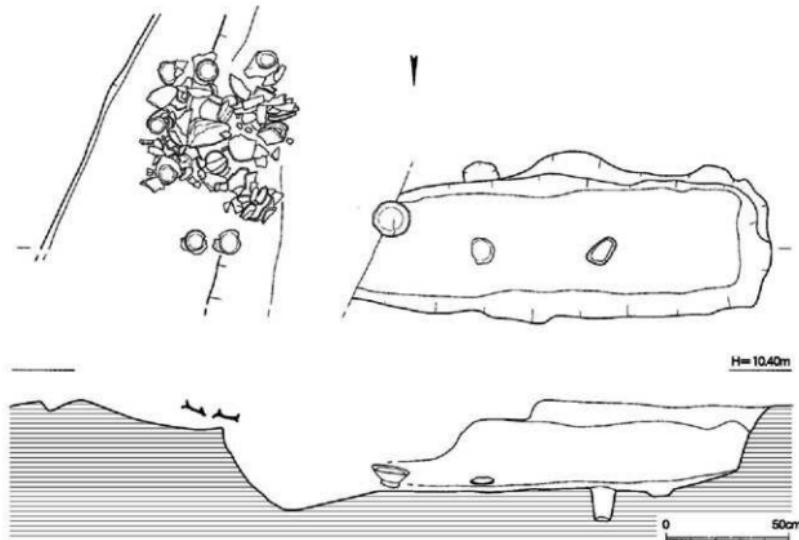


Fig.67 SK3035土坑出土状況実測図 (1/20)

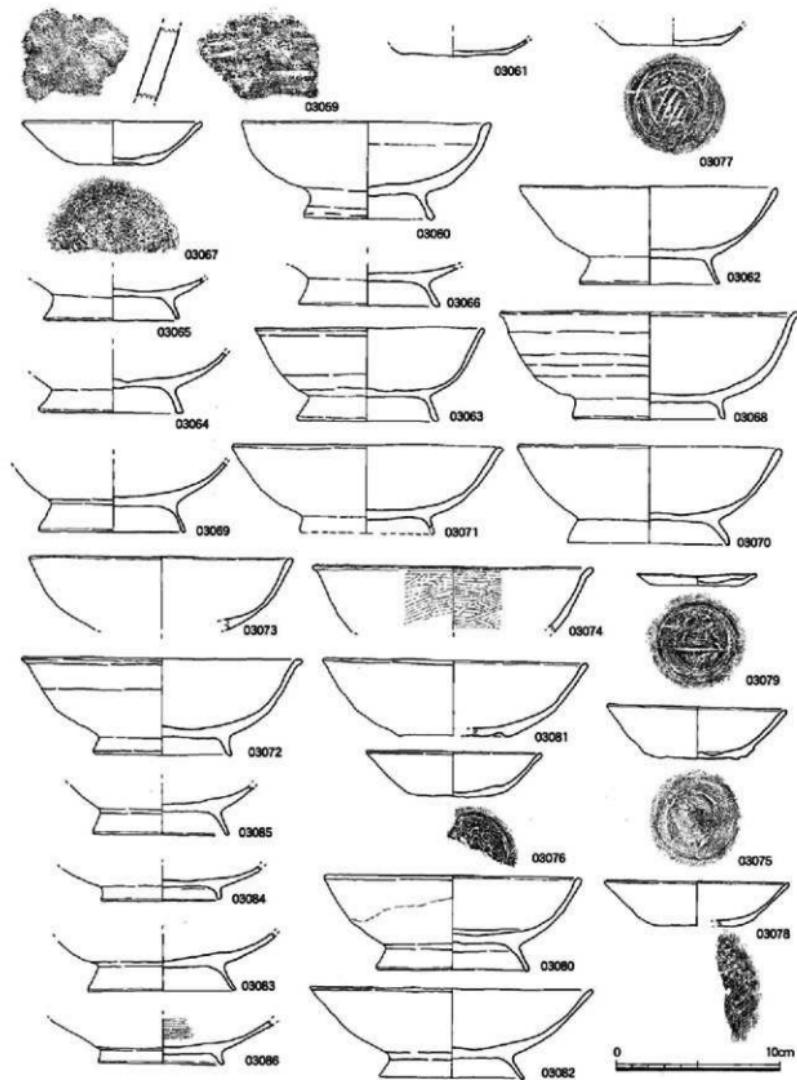


Fig.68 SK3035土坑出土遺物実測図 (1/3)

03064も内黒土師器の高台杯碗である。内面全面には炭素が付着する。器色は外面が鈍い橙色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。高台部径8.9cmを測る。03069は、土師器高台杯碗である。器面の調整は荒れのために不明である。器色は外面が鈍い橙色、内面が暗灰色である。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石・赤色粒を含む。高台部径9.2cmを測る。03066も土師器高台杯碗である。器面調整は荒れのため不詳である。器色は外面が淡黄橙色、内面が鈍い橙色である。高台部径は8.7cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。03063は、内黒土師器の高台杯碗である。内面に炭素が付着する。器色は外面が明灰色を呈する。胎土は密で、雲母を含む。ロクロ回転は時計回りである。口径14.3cm・器高5.8cmを測る。

03071は、内黒土器の高台杯碗である。内面に炭素が付着する。高台は細身で、外側に踏ん張る。器面調整はナデが一部に残る。外底部には板目が僅かに見える。器色は外面が灰黄褐色を呈する。口径16.8cm・推定器高5.4cmを測る。03062も内黒土器の高台杯碗である。内面には炭素が付着する。器面調整は、荒れのために不詳である。器色は外面が黄灰～橙色である。胎土には石英砂を少量含む。口径16cm・器高6cmを測る。03068は、大型の土師器高台杯碗である。杯部に比較して高台が低い。器面調整は、外面がヘラミガキ、内面にナデが残る。器色は外面が淡黄橙色、内面が灰白色を呈する。胎土に石英砂を少量含む。口径18.4cm・器高6.6cmを測る。

03070は、土師器高台杯碗である。器面調整は、荒れのために不詳である。器色は外面が灰白色を呈する。胎土には石英・長石・赤色粒を含む。口径16.4cm・器高6cmを測る。03073は、土師器碗である。器面調整は、回転ナデである。器色は外面が黄橙～黒褐色を呈し、黒斑が見られる。胎土には石英砂を多量に含む。口径16.5cmを測る。03074は、土師器碗である。内外面共に丁寧なヘラミガキを施す。器色は内外面ともに明黄橙～黒褐色で、外面には黒斑が残る。胎土は密である。口径17.5cmを測る。03072は、黒色土器の高台杯碗である。器面はミガキ・ナデが一部に残る。また、内外面共に赤色スリップが一部に残る。器色は外面が暗赤褐色を呈する。胎土は密である。口径17.4cm・器高6cmを測る。03085は、土師器の高台杯碗である。調整は、内外面共にナデである。器色は黄橙色を呈する。胎土には石英砂を多量に含む。高台部径8.5cmを測る。03084も高台杯碗である。調整は、内底部に不定方向のナデ、他は回転ナデを施し、内面には炭素の吸着が見られる。器色は外面が黄褐色を呈する。胎土には石英砂を含む。高台部径7.4cmを測る。03083は、土師器高台杯碗である。内面には炭素の吸着が見られる。調整は、内底部に不定方向のナデ、他は回転ナデである。器色は外面で明黄褐色を呈する。高台部部径9.3cmを測る。03086も高台杯碗である。調整は、内外面共にヘラミガキ・回転ナデである。器色は外面が暗灰黄色、内面が黒色を呈する。高台部径7.8cmを測る。03080は、土師器高台杯碗である。調整は、内底部に不定方向のナデ、胴部の内外面には回転ナデを施す。また、胴部の上半部から内面には炭素の吸着が見られる。器色は外面が明黄褐色～黒褐色を呈する。胎土に石英砂を含む。口径16cm・器高5.8cmを測る。03082は、杯のやや浅い高台碗

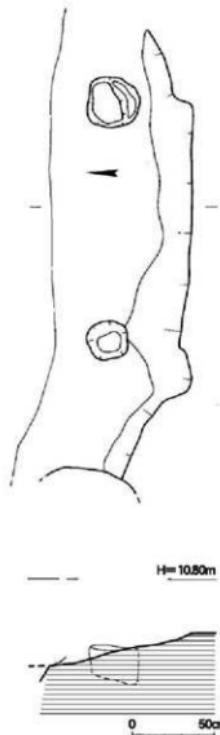


Fig. 69 SK3041土坑出土状況実測図 (1/30)

である。内面は炭素を吸着させる。調整は、内底部に不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。器色は外面が黄橙色を呈する。胎土には石英粗砂を多く含む。口径17.7cm・器高5.5cmを測る。

03081は、土師器高台付碗である。高台を欠失する。調整は、内底部は不定方向

に不定方向

のナデ、他は回転ナデである。器色は外面で黄橙～暗灰黄色を呈する。胎土には石英粗砂を含む。口径16.4cm・器高4.6cm以上を測る。

03076は、土師器杯である。底部は、へラ切り後に板目压痕が見られる。調整は、内底部に不定方向のナデで、他は回転ナデを施す。器色は外面が黄橙～橙色を呈する。口径11cm・器高2.75cmを測る。

03079は、小形の土師皿である。底部は糸切り離して、底部に不定方向のナデを施す。器色は鈍い橙色である。口径7.4cm・器高0.75cmを測る。03075は、底部へラ切り離して、板目压痕を残す。調整は、内底部に不定方向のナデを施す以外は回転ナデである。胎土は密である。口径11.2cm・器高3.2cmを測る。

03078も土師器杯である。器面調整も同一手法である。器色は黄橙色を呈する。口径11.5cm・器高3.7cmを測る。以上は全て土器集積部の出土である。

土坑SK3041 (Fig.69)

本土坑は、調査区中央の攪乱坑の縁辺で検出した。規模は、長さ2.8m以上、幅0.8m以上、深さ0.15m以上を測る段落ち状の造構である。造構の性格は不明である。共伴する遺物も出土していない。

5. 貯蔵穴 (Fig.53・70～76、PL.6・7・8・10)

貯蔵穴と考えられる竪穴は、4基が検出された。調査区南端の2基 (SG3002・3017) と北端部の2基 (SG3030・3040) である。

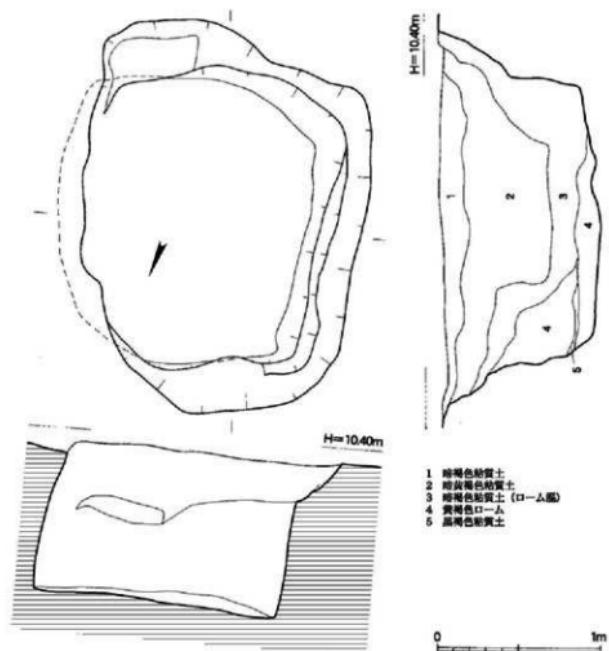


Fig.70 SG3002貯蔵穴出土状況実測図 (1/30)

- 1 黄褐色粘質土
- 2 暗灰褐色粘質土
- 3 黄褐色粘質土 (ローム層)
- 4 黄褐色ローム
- 5 暗褐色粘質土

0 1m

貯蔵穴SG3002 (Fig.70・71)

本造構は、調査区の南東端に検出され、SK3010に切られる。また、SK3011及びSC3005を切る貯蔵穴である。プランは、不整な隅丸長方形を呈する。規模は、長辺が2.5m・短辺1.7m・深さ約1mを測る。小口部の壁はほぼ直立するが、側辺の壁は緩く袋状をなす。造構の埋土は、最下層に黄褐色ロームブロック単純層(IV層)で、壁面の崩落に起因すると思われる。さらに上層は暗褐色粘質土(III層)、暗黄褐色粘質土(II層)、暗褐色粘質土(I層)と続き、崩落後緩やかに埋積していくものと考えられる。埋土中からは弥生前期壺や黒曜石フレイクなどが少量出土した。

出土遺物 (Fig.71) 03087は、弥生式土器壺の小破片である。外面の下端部に段を有する。器色は内外面共に赤味を帯びた黄褐色を呈する。外面にススが付着する。胎土には黒褐色及び赤色粒を含む。

03088は、弥生式土器壺底部である。器色は黄褐色を呈する。外面にススが付着する。胎土に石英砂の混入が多い。焼成は堅緻である。底部径8cmを測る。03089は、弥生式土器壺底部破片である。調整は、外底部でナデ、外面には研磨を施す。器色は淡赤褐色である。胎土に赤色粒を含む。焼成は堅緻である。

貯蔵穴SG3017 (Fig.71・72)

本造構は、調査区の南端で検出された平面が円形をなす袋状貯蔵穴である。内壁は袋状をなすが、位置によりその傾きが異なる。規模は、上部径が1.5×1.5mで、下部の床径が1.9mを測る。深さは0.8m程度を残す。北西壁付近の床面に径が30cm・深さ15cm前後を測る円形ピットが知られ、柱痕は約15cm前後である。昇降施設の痕跡か。

出土遺物 (Fig.71) 03095も弥生式壺の破片である。口縁端部は小さく外開し、頸部との境に緩い段を有する。内外面共に丹塗でミガキを施す。焼成は堅緻で、胎土に石英砂を多量に含む。口縁部径16

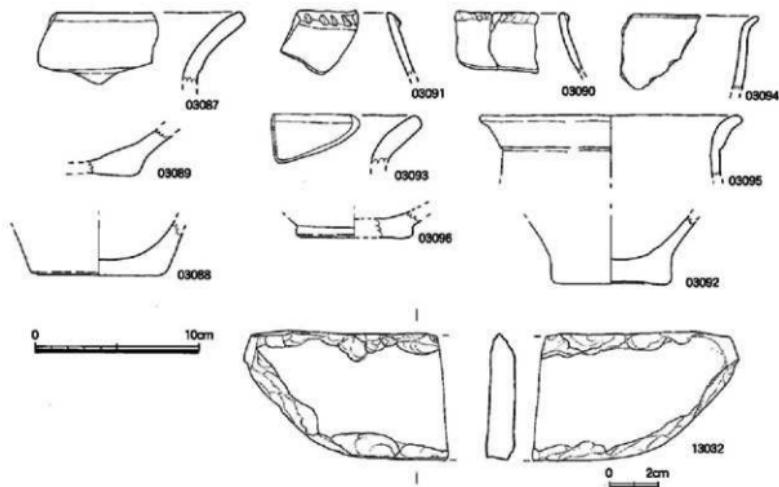


Fig.71 SG3002-3017貯蔵穴出土遺物実測図 (1/3-1/2)

回を測る。

03091は、夜臼式土器甕破片である。口縁端部よりやや下がった位置に低い刻み目突帯一条を巡らす。調整は、器面の荒れのために不詳であるが、外面にはスヌ付着か。焼成は堅緻で、胎土に石英粗砂の混入が多い。03090も夜臼式土器甕破片である。口縁端部に突帯一条を巡らす。内外面共に器面の荒れが著しい。器色は淡赤褐色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英粗砂を多く混入する。

03093も壺の小破片である。器面調整は、内面に横のミガキが残る。口縁部の内外面は黒塗りである。器色は外面が淡褐色である。胎土は密で、金雲母を含む。焼成は堅緻である。03096は、浅鉢底部破片か。円盤状の底部を有し、内外面共に研磨が残る。また、内面は黒塗りである。器色は外面が赤味を帯び黄褐色、内面が黒褐色を呈する。胎土には石英砂を少量混入し、焼成は堅緻である。底部径7cmを測る。03092は、やや上げ底となる弥生式土器腹底部である。内面には炭化物の付着が窺える。調整は、磨減のために不明である。器色は淡褐色を呈す。底部径7cmを測る。03094は、如意状口縁を広い、不明瞭な刻み目を施す。調整は、器面する。胎土は石英粗砂を多量に混入し、焼成は堅緻である。

13032は、石包丁未製品である。全体の約半分から折損している。刃部及び背部に丁寧な調整剥離が施されている。サイズは、残存長8.45cm・幅5.3cmで厚さ1.15cmを測る。玄武岩製。

腕中穴SG3030 (Fig.73・74- PI-10)

本遺構は、調査区の北西隅で検出された大型の貯蔵穴である。平面プランは、隅丸長方形を呈し、床面隅に4本とやや西よりの床面に1本、上縁部に1本の柱穴が伴う。竪穴の規模は、長辺が2.4m前後・短辺が1.7~1.9mで、深さは1.05~1.20m程度を測る。壁は、断面が袋状とならず、直立する形状となる。床面及び天端に掘られた柱穴は、何れも掘方の径が25~30cm・深さ30~40cmで、東壁下の柱穴では径が10cm強の四角柱の痕跡を残す。これらは壁に接して立てられたその配置や竪穴の壁形状から上屋の支柱の可能性がある。また、床面西寄りの柱穴は、深さ20cmと浅いが、昇降施設の基部の可能性がある。

本遺構の埋土中からは、夜臼式土器壺、板付II式甕・壺の他、石包丁未製品・打製石鎌・磨石・砥石などが出土した。また、床面から壁の立ち上がり20cmには多量の炭化米が出土した。これらは採集できたものだけでも大形のタッパー・ウェア2箱分があり、種同定、DNA測定などの鑑定結果を本報

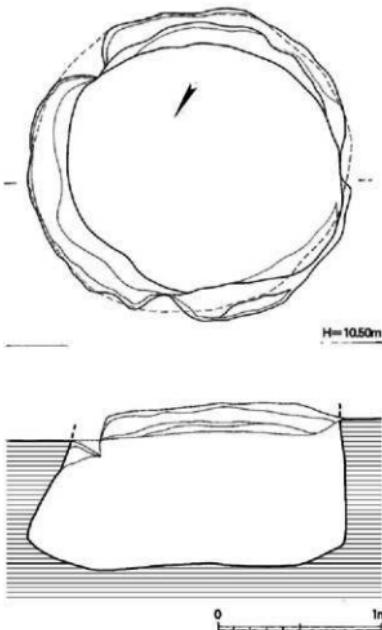


Fig.72 SG3017貯蔵穴出土状況実測図 (1/30)

告書中に別稿で掲載している。

出土遺物 (Fig.74) 03097は、夜臼式土器壺破片である。口縁端部に低い三角状の刻み目突帯を巡らす。調整は、磨滅のために不明である。器色は赤褐色を呈し、外面にススが付着する。焼成は堅緻で、胎土に石英砂を多量に混入する。

03100も口縁端部に刻み目突帯を巡らすやや薄手の夜臼式土器壺破片である。器面調整は、磨滅が著しいが内外面共にナナメの条痕文が残る。外面にはススが付着し、内面は赤褐色を呈する。

03099は、口縁端部よりや下がった位置に刻み目突帯を巡らす夜臼式壺破片である。器面調整は、外面に条痕文を残し、内面はナデ調整である。器色は黄色味を帯びた赤褐色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英粗砂を多量に混入する。

03098も口縁端部に浅い刻み目突帯を巡らす夜臼式土器壺である。器面調整は、外面に条痕文が残り、内面は指オサエ後にナデが見られる。器色は内面が明るい赤褐色を呈し、外面は二次焼成によるススが付着する。口縁部復元径20cm程度を測る。

03105は、刻み目が明瞭に残らない壺口縁部の小破片である。器面の磨滅の為に調整は不明である。器色は赤褐色である。焼成は堅緻であるが、胎土に石英砂を多量に混入する。

03102は、緩く外反した口縁端部の全面に刻み目を施した壺口縁部破片である。調整は、外面にタテハケメらしきものがわずかに残る。器色は内外面共に淡黄褐色を呈する。胎土には石英粗砂を多量に混入する。口縁部径は20cmを測る。

03101は、緩く外開する口縁を有する壺破片である。口縁部の刻み目は見られない。器面の調整は、磨滅のために内外面共に不明である。器色は淡黄褐色を呈する。胎土には石英粗砂を多量に混入する。口径は24.2cmを測る。03108は、円盤貼付状の底部を有する壺の底部破片である。器色は外面が黄褐色～赤褐色、内面が黒褐色を呈する。焼成は堅緻で、胎土には石英粗砂を多量に混入する。底部径は5cmを測る。03110は、やや上げ底となる夜臼式土器壺の破片である。器面は、外面にナデ調整が残る。焼成は堅緻で、胎土に石英砂を多量に混入する。底部径は6cmを測る。

03104は、やや大型の弥生式土器の甌底部破片である。器面調整は、外面にタテのハケメがわずかに残り、内面には指オサエが内底・胴部に残る。器色は赤褐色で、内面に焦げが見られる。胎土には石英砂を多量に含み、焼成は堅緻である。底部径は8.8cmを測る。

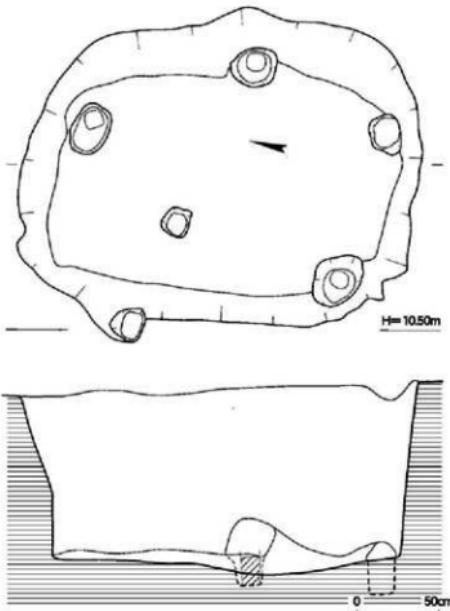


Fig.73 SG3030貯蔵穴出土状況実測図 (1/30)

は指オサエ後にナデが見られる。器色は内面が明るい赤褐色を呈し、外面は二次焼成によるススが付着する。口縁部復元径20cm程度を測る。

03105は、刻み目が明瞭に残らない壺口縁部の小破片である。器面の磨滅の為に調整は不明である。

器色は赤褐色である。焼成は堅緻であるが、胎土に石英砂を多量に混入する。

03102は、緩く外反した口縁端部の全面に刻み目を施した壺口縁部破片である。調整は、外面にタ

テハケメらしきものがわずかに残る。器色は内外面共に淡黄褐色を呈する。胎土には石英粗砂を多量に混入する。口縁部径は20cmを測る。

03101は、緩く外開する口縁を有する壺破片である。口縁部の刻み目は見られない。器面の調整は、

磨滅のために内外面共に不明である。器色は淡黄褐色を呈する。胎土には石英粗砂を多量に混入する。

口径は24.2cmを測る。03108は、円盤貼付状の底部を有する壺の底部破片である。器色は外面が黄褐色～

赤褐色、内面が黒褐色を呈する。焼成は堅緻で、胎土には石英粗砂を多量に混入する。底部径は5cmを測る。03110は、やや上げ底となる夜臼式土器壺の破片である。器面は、外面にナデ調整が残る。

焼成は堅緻で、胎土に石英砂を多量に混入する。底部径は6cmを測る。

03104は、やや大型の弥生式土器の甌底部破片である。器面調整は、外面にタテのハケメがわずかに残り、内面には指オサエが内底・胴部に残る。器色は赤褐色で、内面に焦げが見られる。胎土には

石英砂を多量に含み、焼成は堅緻である。底部径は8.8cmを測る。

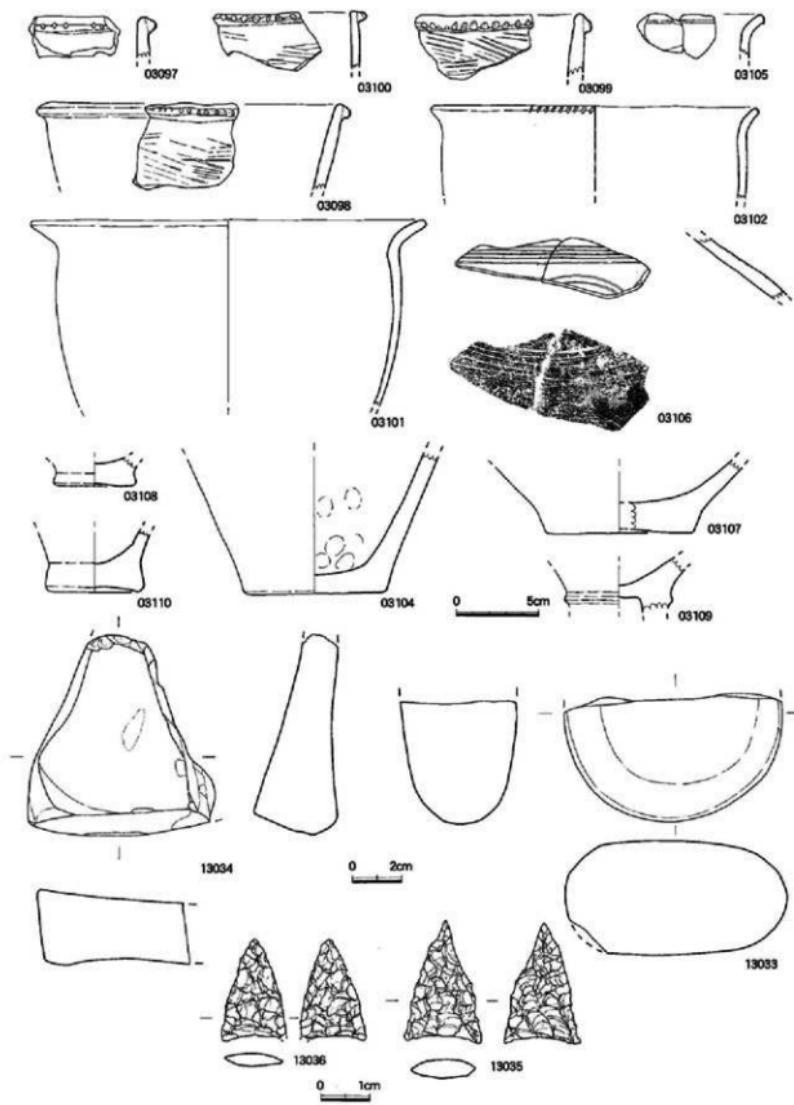


Fig.74 SG3030貯蔵穴出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)

03107は、やや上げ底の中型壺破片である。器面の調整は、磨減のために不明である。器色は淡黄褐色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英砂を多量に混入する。底部径は9cmを測る。

03106は、頸部に5条のヘラ描き沈線文とその下に2条の弧状沈線文を描く壺破片である。調整は不明であるが、外面に丹塗を施す。また、内面は黄褐色を呈する。胎土には石英砂を多量に混入し、焼成は堅緻である。

03109は、高杯の脚部破片である。杯部との境に低い三角突起を巡らしている。器面の調整は、磨減のために不明である。器色は黄褐色～赤味を帯びた黄褐色を呈する。胎土に石英砂を多量に含み、焼成は堅緻である。

13034は、良く使い込まれた板状の砥石である。大砥面の表裏、左側面に砥面が残る。サイズは、長辺で8.3cm、短辺で7.7cm、厚さ3.5cmを測る。砂岩疊を使用する。

13033は、全体の約半分を残す円盤使用の磨石である。長辺がほぼ9cm、短辺5cm以上、厚さ4.6cmを測る。13035は、黒曜石使用の石鎌である。基部は平基式に近く、緩く抉られる。調整は丁寧で、両面からの加工を施している。全長は2.5cm、重さ0.92gを測る。完形品である。13036も黒曜石の石鎌である。両面からの加工が丁寧な平基式の三角鎌で、脚端の一部を欠損する。全長2.1cm・残存の重量0.6gを測る。

貯蔵穴SG3040（Fig.75・76）

本遺構は、調査区の北西端で検出した典型的な袋状貯蔵穴である。上部を方形周溝墓SD3028によって削平されている。そのプランは、上部が長方形で、床面では円形をなす。上部は長辺が約1m・短辺で0.6m程度の規模であったと想定される。また、床面は中央部が緩く窪む形状をなし、 2×2.2 m程度のサイズと考えられる。深さは0.9m程度が残る。埋土からは弥生式土器壺・甕・鉢・高杯・蓋や黒曜石フレイク・紡錘車などが出土した。

出土遺物（Fig.76）03112は、如意状口縁を有する甕破片である。口縁の刻み目は見られず、器面の磨減も著しい。器色は黄色みを帯びた赤褐色である。胎土には石英砂の混入が多く、焼成は堅緻である。口縁部径20cmを測る。03121は、甕蓋の破片である。頭部は緩く窪み、外面に指オサエが見られ、これ以下ではハケ目調整か。内面は頂部に指オサエ・指ナデを施す。器色は橙～灰褐色である。胎土に石英砂を多量に含み、焼成は堅緻である。頭部径6.3cmを測る。

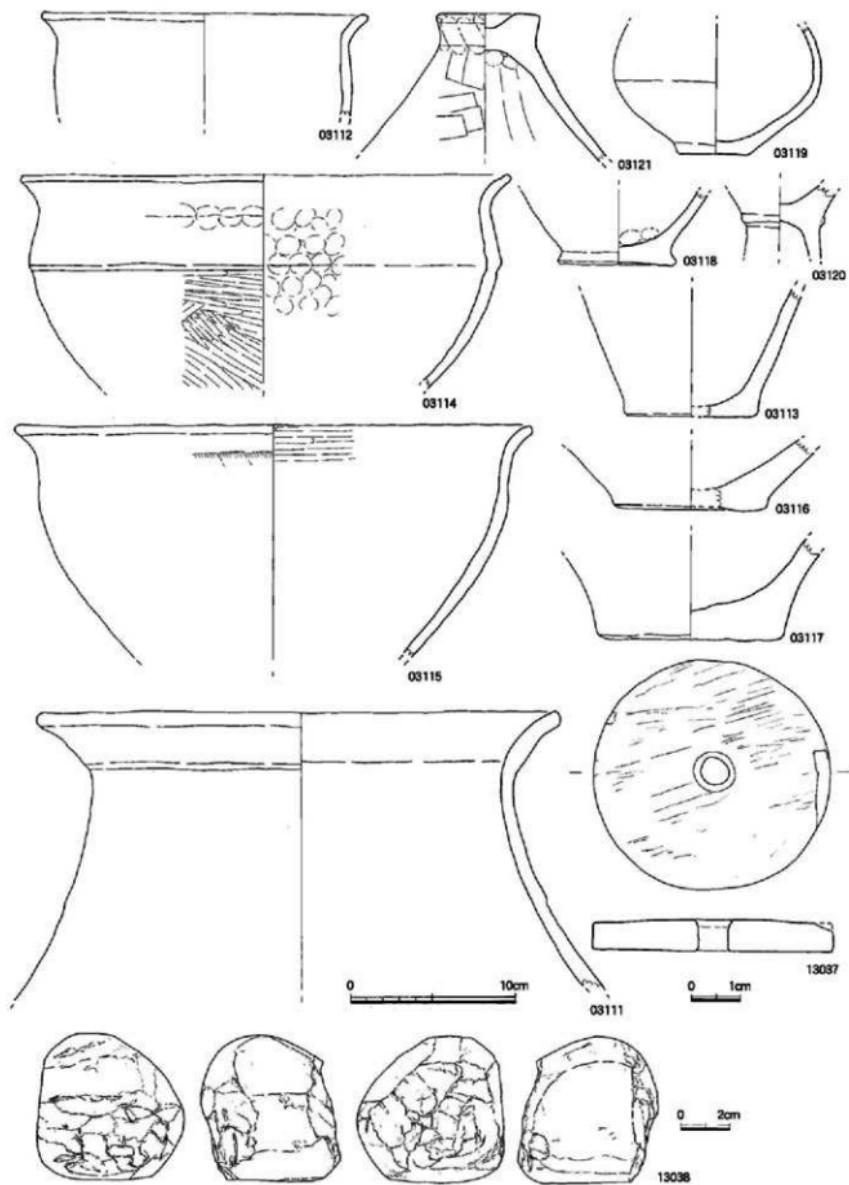


Fig.76 SG3040貯蔵穴出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)

03119は、半球状の胴部と緩い円盤底を有する小形壺である。頭部以上を欠失する。調整は、内外面ともに丁寧なヨコナデで、内底部に不定方向のナデが残る。器色は淡黄色である。胎土には石英細砂の混入が多い。底部径4.5cmを測る。03118は、やや上げ底の壺底部破片である。調

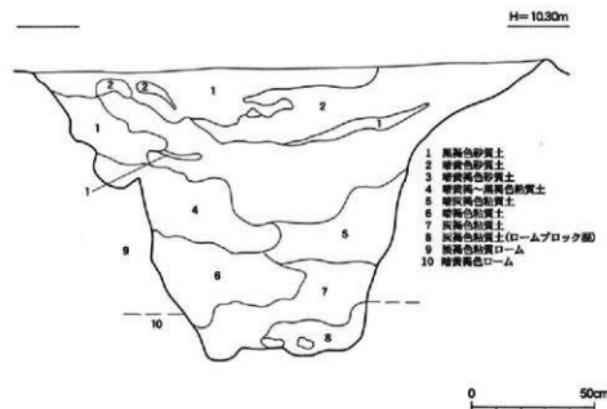


Fig.77 SD3001溝土層断面実測図 (1/20)

整は、内外面ともにヨコナデで、内底部に不定方向のナデを施す。器色は黄橙色で、外面に黒斑が見られる。胎土に石英細砂の混入が多い。底部径7.2cmを測る。03120は、高杯脚部破片である。杯との接合部に低い三角突帯を巡らす。調整はヨコナデで、脚内面には指ナデが、杯底部にはナデが見られる。器色は橙色である。胎土に石英粗砂の混入が多い。03113は、壺底部破片である。03112と同一個体の可能性がある。底部径8cmを測る。03116は、外底中央が緩く窪む壺の底部破片である。器色は赤褐色～灰褐色を呈する。底部径9~10cmを測る。03117は、大型の壺底部破片である。調整は、外面がヨコナデである。器色は黄橙～黄褐色である。胎土に石英粗砂を多量に含む。底部径11.4cmを測る。03114・03115は大型の鉢である。03114は、屈曲部に段を残し、口縁は端部近くで急激に開く。調整は、胴部外面に丁寧なヘラミガキを施し、口縁部の内外は指オサエ後にヨコナデ・研磨と考えられる。器色は暗褐～黄褐色である。胎土に石英砂を多量に含む。口縁部径30cmを測る。03115は、口縁が緩く外開する。調整は、外面がタテハケメ後にヨコ・ナメ方向の研磨、内面はヨコ方向の研磨を加えている。内外面共に黒塗りか。胎土に石英粗砂を多く混入する。口縁部径31.8cmを測る。03111は、大型壺破片である。口縁部下端は肥厚して低い段をなす。磨滅のために調整は不明である。器色は灰白～黄褐色である。胎土には石英砂を多く含み、焼成は堅締である。口縁部径32.6cmを測る。13037は、石製鋸鍼車である。一端を欠く。径4.7~4.8cm、厚さ0.7cm、重さ18.56gを測る。孔径5mmである。粘板岩使用か。13038は、敲石と磨石の両用である。タテ・ヨコ・厚さは、6×6×5.7cm、重さ345.76gを測る。玄武岩を使用する。

6. 溝状遺構 (Fig.53・77~84、P1.8・10)

溝SD3001 (Fig.53・77・78)

本溝は、調査区の南東から北東側へ蛇行しながら走る溝で、北側では大擾乱によって延長を断たれている。方形周溝墓SD3006・SD3023を切る。溝の断面は逆台形で、上部肩は東側では緩く立ち上がる。確認できた規模は、延長16m以上、幅1.8m前後、深さ1.2m程度である。

溝の上端部は擾乱のため削平を受けているが、現存する天端標高は10.20m前後である。

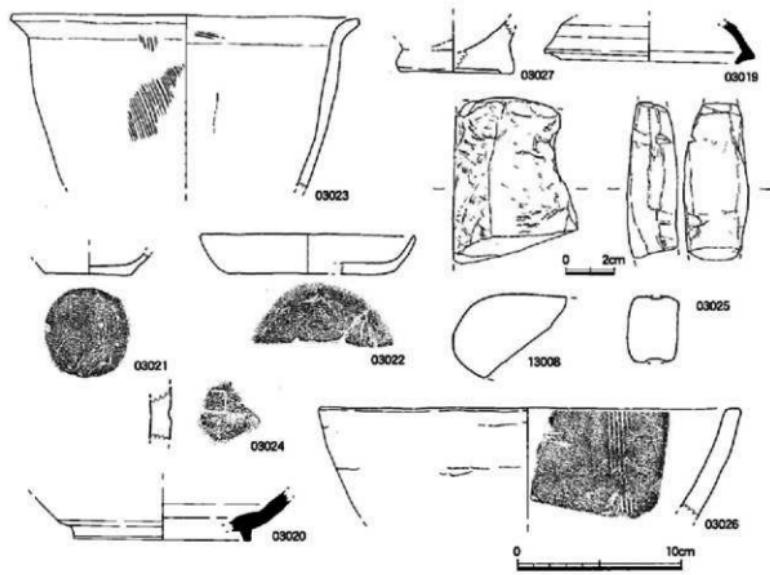


Fig.78 SD3001溝出土遺物実測図 (1/3・1/2)

溝埋土は、下部が粘質の強い灰褐色～褐色土が交互に堆積し（4～8層）、この上部は砂質土（1～3層）へと変化する。なお地山は鳥栖ローム（9・10層）である。

出土遺物 (Fig.78) 03023は、口縁が如意状となる弥生式土器甕破片である。器面調整は、外面には荒いタケハケメで、内面はナデを施す。器色は灰褐色である。焼成は堅緻で、胎土に石英粗砂を多量に混入する。口縁部径は27.6cmを測る。03027は、やや上げ底の甕底部破片である。調整は、荒れのために不明である。器色は純い赤色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英粗砂を多量に含む。底部径7.4cmを測る。03019は、須恵器杯蓋である。低いかえりが付く。内外面共にヨコナデで、天井部に「ハ」字形のヘラ記号が残る。器色は内外面共に青灰色を呈する。胎土に石英・長石細砂を少量混入する。03021は、土師器小皿である。糸切り底で、内外面ともにヨコナデ、内底にはナデが施される。胎土は密で、焼成も堅緻である。底部径5.4cmを測る。03022も、土師器皿である。糸切り底で、外底の板目ははっきりしない。器色は淡橙色を呈する。胎土に石英・長石粒を少量混入し、焼成は堅緻である。口径13.4cm・器高2.4cmを測る。03020は、須恵器高台杯である。器面調整は、外面にはヘラケズリを施し、内面はヨコナデである。器色は青灰色である。焼成は堅緻で、石英・長石粒を少量含む。高台部径11cmを測る。03024は、印文のある土師質土器破片である。火舎か。器色は褐色である。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石粒を多量混入する。03026は、土師質土器程鉢破片である。内面に底部から挿き上げた5本の串挿き文が残る。器色は灰白色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石・赤色粒を少量混入する。口縁部径26.2cmを測る。13008は、玄武岩製船刃石斧破片である。二次利用で叩き石としている。器面には敲打痕を残す。03025は、不明土製品である。磨滅が著しい方柱状の製品で、両端部ともに折損する。残存長・幅が6.4×2.7cmで、重さ43gを測る。器色は褐灰色を呈する。焼成は

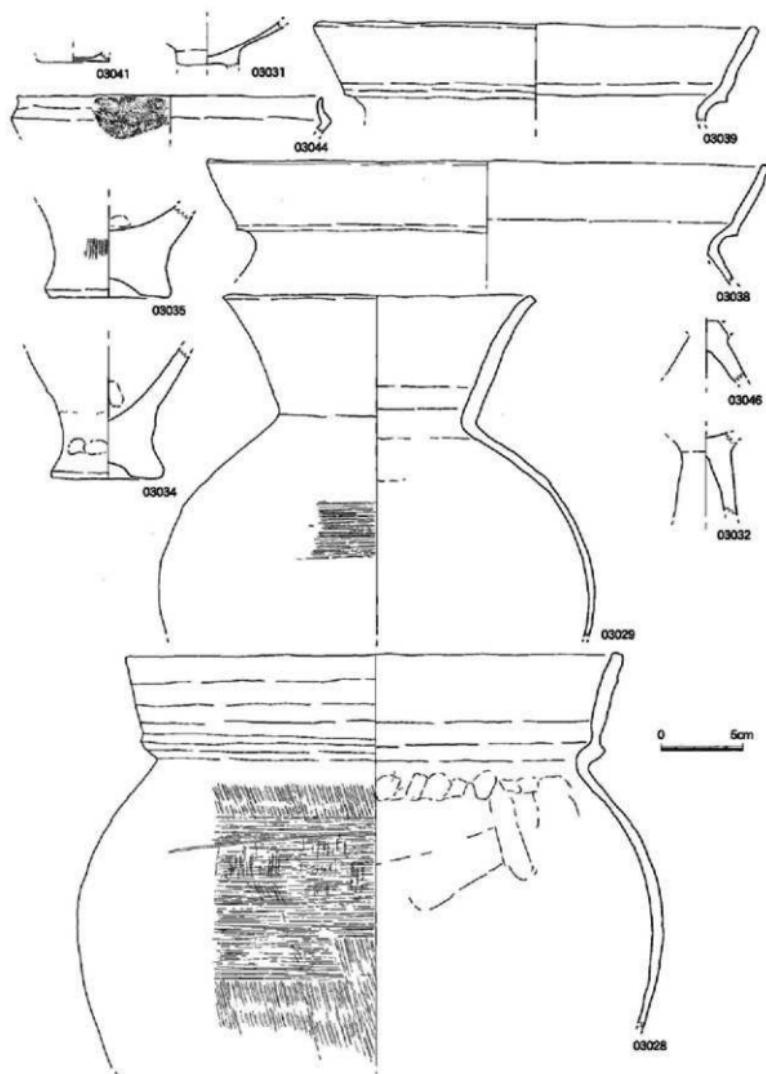


Fig.79 SD3006溝出土遺物実測図 1 (1/3)

堅緻で、胎土に石英・長石砂を少量混入する。

溝SD3006 (Fig.53・79~82、Pl.8)

本溝は、調査区の南半に残る方形周溝墓の周溝と考えられる溝である。調査では、南辺と西辺・東辺の一部が検出された。その規模は、南辺の外側辺長が14m強・内側辺長10m、幅1.8~1.4mを測り、深さ50~60cm程度が残る。また、西辺では擾乱によって延長が寸断されているが、外側辺長で11.5m以上・内側辺長9m以上を想定することができる。

また、溝内では南西隅に大型の土師器二重口縁壺、南辺の東寄りに中型の丸底壺・二重口縁壺が出土した。他に前期弥生式土器、黒曜石石核・フレイク、磨製石斧などが埋土中から大量に出土した。これらは溝掘削時に周辺の弥生遺構の擾乱により混入したものと考えられる。

出土遺物 (Fig.79~82) 03041は、土師器壺底部か。器色は褐灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。底部径4.5cmを測る。03031は、土師器高杯である。器面の荒れが著しい。器色は鈍い橙色である。胎土に石英・長石砂を少量含む。03044は、弥生式土器鉢である。器色は黄白色である。胎土には石英砂を少量含む。口径18.8cmを測る。03034・03035は、弥生前期末～中期初頭の甕底部破片である。器色はにぶい橙色である。底部径はそれぞれ7cm・7.9cmを測る。

03038は、土師器二重口縁壺である。口縁部下端は鋭く尖る。調整は、ヨコナデである。器色は灰白色を呈する。胎土に石英・長石砂を若干含む。口径35cmを測る。03039も土師器壺である。調整は、荒れのため不明である。胎土に石英砂を多量含む。口径27.6cmを測る。

03029は、溝南辺の東側から出土した中型の丸底壺である。調整は、胴部にヨコハケメが部分的に残る。口縁部はヨコナデで、胴部内面にはナナメのヘラケズリがわずかに見られる。器色は褐色である。焼成は堅緻で、胎土に砂粒を多量に含む。口径19.4cmを測る。03046は、土師器高杯の脚部破片である。短脚である。器色は鈍い橙色である。胎土に石英・長石砂を若干含む。03032も土師器の高杯脚である。器色は浅い黄橙色を呈する。

03028は、頸のつまた土師器の二重口縁壺である。調整は、胴部外面が荒いヨコ・タテ方向のハケメで、口縁部内外はヨコナデである。また、胴部内面は、指オサエ・ナナメ方向のヘラケズリが見られる。器色は灰白色である。胎土には石英・長石微砂を多量に含む。口径は30.4cmを測る。

03043は、朝鮮系無文土器の甕か。口縁端部の外面に粘土を張り付けるが、断面形はやや角張っている。器面調整は、磨滅のために不明である。器色は外面が鈍い橙色で、内面は褐灰色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石粒を少量混入する。復元口径20.2cmを測る。03036は、如意状口縁を有する甕である。器面調整は、荒れのために不明である。器色は明灰～橙色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石砂を多量に混入する。口径25.8cmを測る。03037は、如意状口縁を有し、口縁下端部に刻み目を施す甕である。調整は、不明である。器色は外面が褐灰色で、内面灰白色である。胎土に石英・長石粒を多量に含む。口径23.8cmを測る。03033は、小さい平坦口縁を有する甕である。調整は、不明である。器色は内外面共に明褐色を呈する。胎土に石英砂の混入が多い。口径28cmを測る。03042は、甕底部破片である。器色は外面褐灰、内面鈍い橙色を呈する。胎土に石英・長石砂を多量に混入する。底部径7cmを測る。03045は、大型壺底部破片である。器面調整は、不明である。器色は灰黄褐色を呈する。胎土には石英・長石砂を多く含む。底部径11.4cmを測る。03030は、土師器大型の二重口縁壺である。胴の張りは小さく、底部は丸底に近く緩い平坦部をなす。また、頸部はよくしまり、板小口を使用した綾杉状文様を巡らす。器面調整は、口縁部～胴部内面はヨコナデで、胴部外表面は上部にヨコハケメ・下部にタテハケメの痕跡が残る。また、頸部内面と胴部内面中位には指オサエが顯著に見られる。器色は、外面が褐灰色、内面灰褐色を呈する。胎土には石英・長石砂を少量含む。口

径29cm、署高64cmを測る。本溝に伴い、祭祀として使用されたものか。

次に、石器類は遅れていた弥生時代のものが多く出土している。

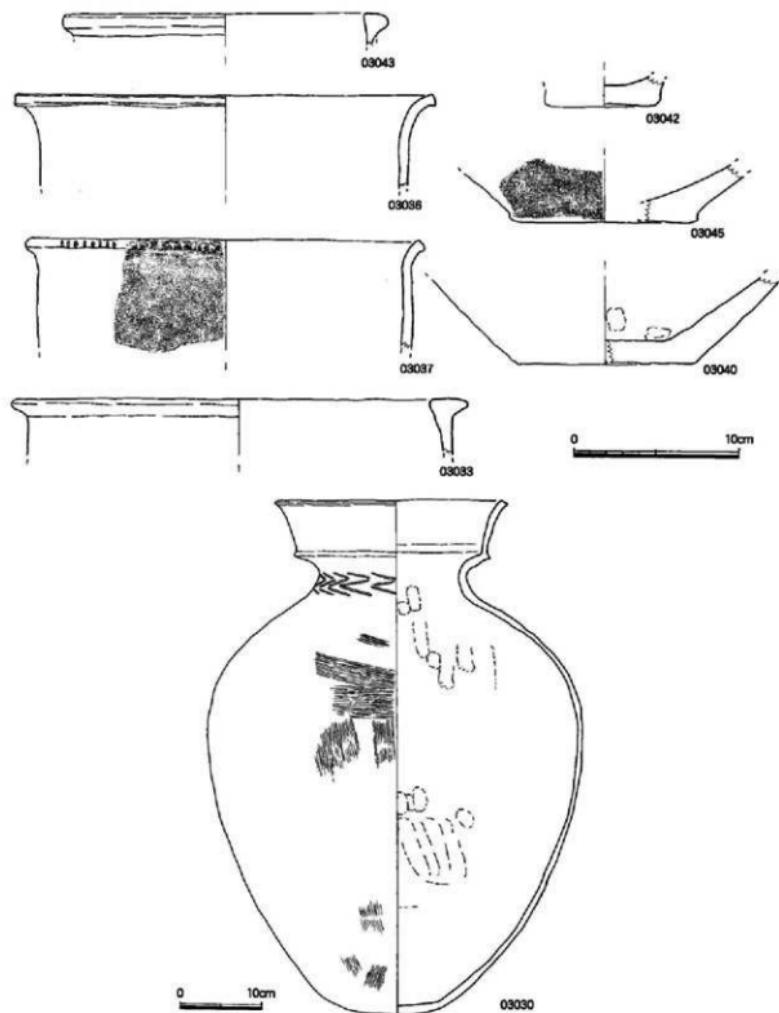


Fig.80 SD3006溝出土遺物実測図 2 (1/6・1/3)

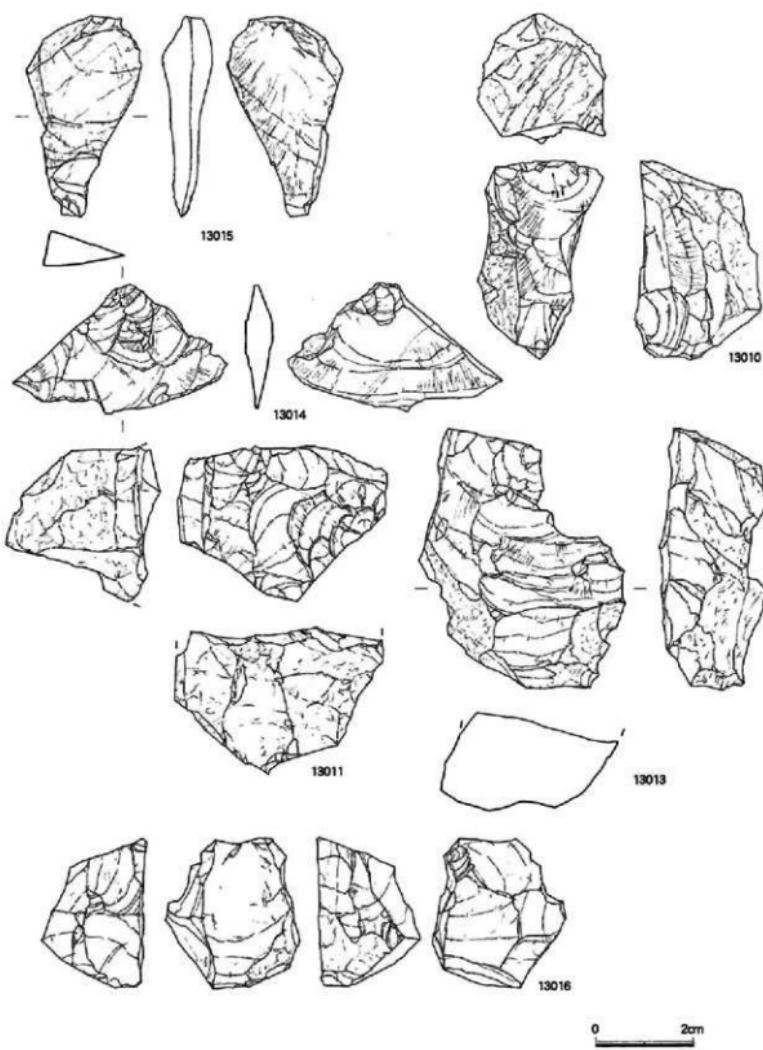


Fig.81 SD3006溝出土遺物実測図 3 (1/1)

13015は、長さ4.1cmを測り、左側辺に使用痕を持つ剥片である。13014も幅4.5cmとやや横長の剥片で、末端部に使用痕を持つ。13010は、高さ4cmを測る、自然面を打面とする石核である。13011も高さ・幅が3.1×4.3cmを測り、自然面を打面とする石核である。13013は、高さ・幅が5.3×4.2cmを測る石

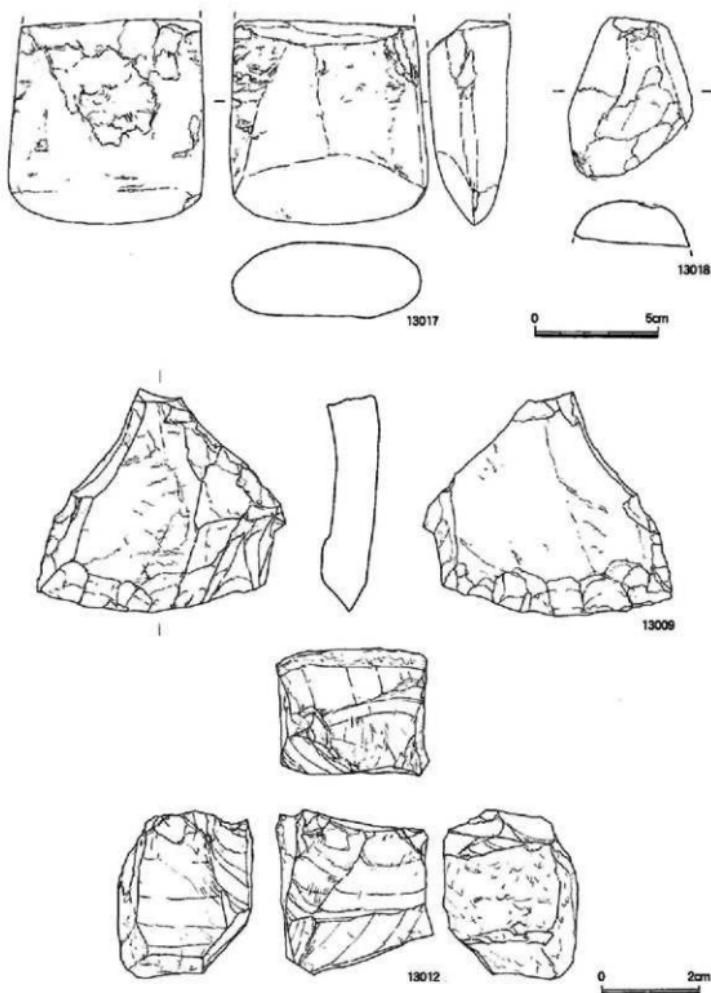


Fig.82 SD3006溝出土遺物実測図4 (1/2・1/1)

核である。13016も高さ・幅が3×2.7cmを測る核で、剥離痕から長さ4cm・最大幅1.9cm程度の剥片が得られたことが窺える。13012も高さ・幅3.3×3.2cmを測る方柱状の石材を利用した石核で、自然面を打面とする。以上は何れも黒色の黒曜石を使用する。13009は、サメカイト使用のサイドスクレイパーである。剥片の下端部側辺に両面からの大振りな調整剥離を加えて刃部としている。長さ・幅・厚さが4.6×5.1×1.3cmを測る。13017は、玄武岩使用の太形蛤刃石斧である。側辺には敲打痕を残す。刃部幅8cm、厚さ3cmを測る。13018は、砂岩使用の砥石である。約半分を欠損する。長さ6.5cm、幅5.1cm、厚さ2.1cm、重さ72gを測る。

溝SD3028 (Fig.53, PL10)

本溝は、方形周溝墓と考えられるSD3006の西側約6mに隣接するやや小形のものである。調査では溝の東辺が明らかとなり、隅部が丸い外周辺で長さ約9.7m・内周辺で長さ約8.5mを測る。また、深さは50cm前後を残す。横断面は緩い逆台形をなす。東辺中央付近では辺に沿う底面に長さ2.5m・幅0.5m・深さ0.3mの浅い掘り込みが確認され、内部から土師器の小形丸底壺・台付き鉢等が出土した。また、埋土には遊離した弥生時代遺物も多く出土した。

出土遺物 (Fig.83・84) 本溝に伴う遺物類は、土師器丸底壺・台付き鉢である。03050は、底部の一部を欠く丸底壺である。内湾気味に立ち上がる口縁に半球状の胴部を持つ。器面調整は、口縁部外側にヨコナデが残る以外は不詳である。器壁は非常に薄く仕上げられている。器色は外面が褐灰色、内面がぶい橙色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径10.4cm・器高9.1cmを測る。

03051は、やや大型の丸底壺である。器面調整は、口縁部外側にヨコナデが残る以外は不詳である。器壁も非常に薄く仕上げられている。器色は外面が明褐灰色で、内面にぶい橙色を呈する。胎土は非常に密で、焼成も堅緻である。口径14.6cm・器高11.1cmを測る。03052は、台付き鉢である。やや肉厚の低い脚に浅い鉢を載せる。器面調整は、剥落のために不詳である。器色は外面が橙色、内面が淡い赤橙色を呈する。胎土は非常に密で、焼成も堅緻である。口径13.9cm・器高5.7cmを測る。以上は溝東辺の土坑内出土。03053は、溝の確認のための北側拡張区出土の土師器壺である。半球状の胴部

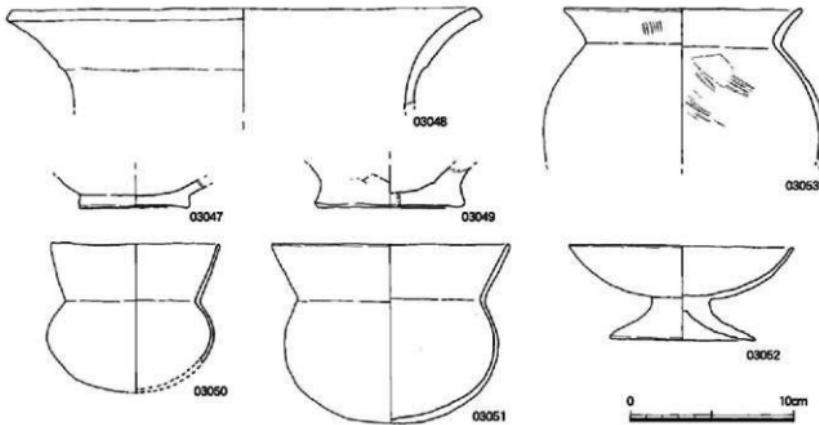


Fig.83 SD3028溝出土遺物実測図1(1/3)

に外開する短い口縁部をもつ。器面調整は、内外面に荒いナメのハケメが残る。器壁は非常に薄い。器色は内外面共に赤褐色を呈する。焼成は堅緻で、胎土に石英・長石砂を多量に混入する。口径14.8cmを測る。03048は、弥生前期土器壺破片である。外開する口縁部下端は、頸部との境で段をなす。

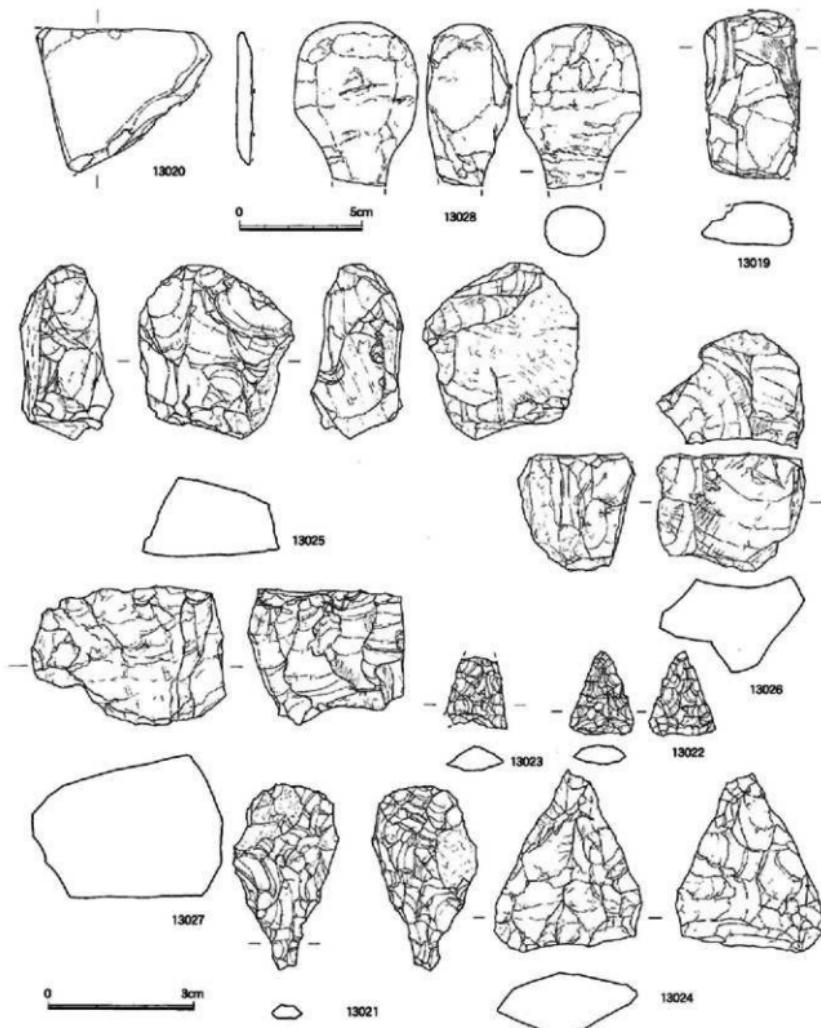


Fig.84 SD3028溝出土遺物実測図 2 (1/2-1/1)

器色は外面に赤褐色を呈する。口径29.2cmを測る。03047も弥生前期壺の底部破片である。円盤貼付底で、やや上げ底となる。器色は外面に赤褐色、内面灰褐色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。底部径6.8cmを測る。03049は、壺底部破片である。外底部にはケズリが残る。器色は外面褐灰色で、内面灰白色である。胎土に石英砂を多く含む。底部径9.3mmを測る。

次に、石器類である。13020は、磨製石包丁未製品の破片である。残存長7.2cmを測る。頁岩を使用する。13028は、砂岩を使用した穿孔具破片である。やや扁平な円形の頭部を有し、先端へ移行するくびれ部には敲打痕が残る。残存長6.7cmを測る。13019は、石斧破片である。玄武岩を使用する。13025は、裏面に自然面を多く残す核である。03026も自然面を多く残す核である。13027も剥片剥離作業が多く残る石核である。13022・13023は、共に基部の抉りの浅い平基式の三角鏃である。13022は長さ1.7cm・重さ0.58gを測る。13021は、突き錐である。刺突部は両面からよく調整される。長さ3.7cm、先端の厚さ2mm、重さ4.39gを測る。13024は、サヌカイト使用の石礫未製品か。横断面は菱形をなし、調整が未だ進んでいない。長さ3.6cm・幅3cm・厚さ1.3cmを測る。

溝SD3023 (Fig.53)

本溝は、中世溝SD3001に切られる溝で、調査区の中央を蛇行しながら南北に走るものと想定される。北東隅にはその延長が知られ、延長で10m以上、幅約1.5m、深さ約0.5cmを測る。

出土遺物 本溝の埋土中からは、造様に伴なわない弥生時代の甕破片、黒曜石やサヌカイトを使用したフレイクやチップ等の遊離した遺物と共に糸切りの土師皿も出土したが、小破片のために図示示示できない。

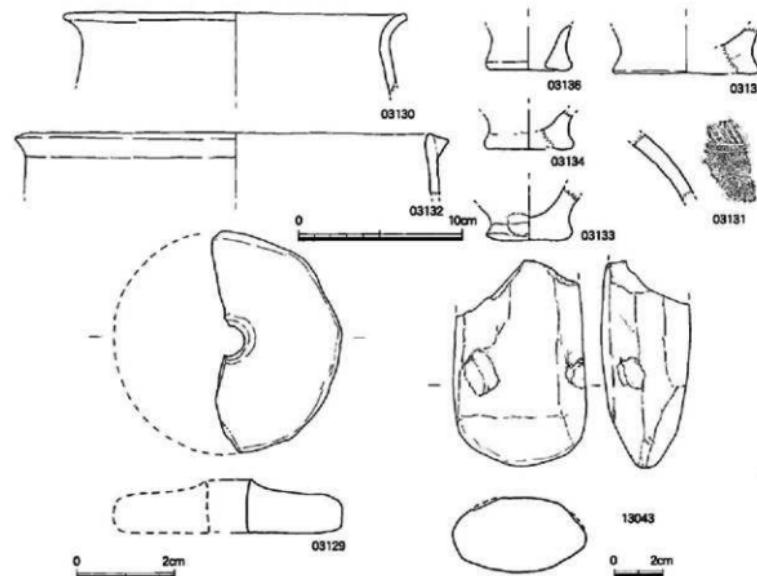


Fig.85 柱穴出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)

7. 柱穴・包含層・遺構検出面出土遺物 (Fig.85・86)

その他では、分布が散漫で建物としてまとまらない柱穴内出土遺物や調査区の東側・北側拡張区で出土した包含層の遺物それに遺構検出時に出土した遺物などがあるが、これらについて可能な限り図化を行った。

03130は、緩く外反する口縁を有する壺破片である。器面調整は、不明である。器色は内外面共に

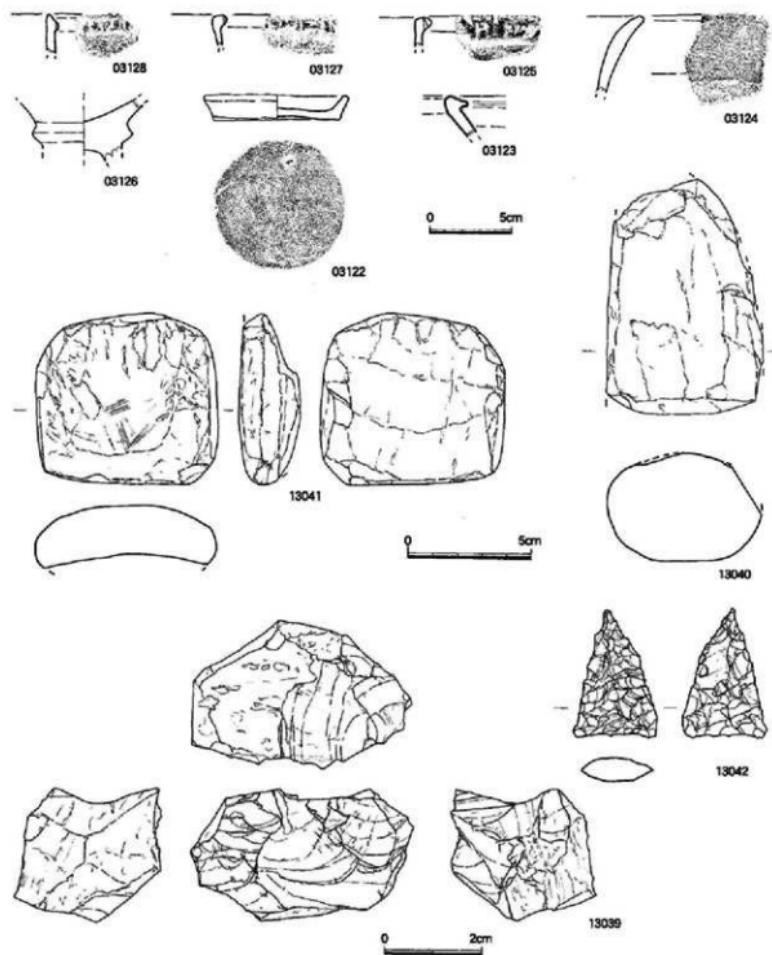


Fig.86 包含層・遺構検出面・東壁拡張部出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)

にぶい赤褐色を呈する。胎土に石英・長石砂を多量に含む。口径21.2cmを測る。SP3036出土。03136は、底部中央に二次的穿孔をもつ甕底部である。器色はにぶい橙色を呈する。胎土に石英砂を多く含む。底部径5.4cmを測る。SP3104出土。03135は、甕底部破片である。器色はにぶい橙色を呈する。胎土には石英・長石砂を多量に含む。焼成は堅緻である。底部径9.2cmを測る。SP3095出土。03134は、小形の甕底部破片である。器面調整は、不明である。器色は外面灰赤色、内面灰褐色を呈する。胎土に石英・長石砂を多く含む。底部径5.6cmを測る。SP3057出土。

03133は、底部端がやや上がる小形甕破片である。調整は、ナデである。器色は灰褐色である。底部径5.4cmを測る。SP3055出土。03131は、肩部に羽状文を巡らす壺破片である。器色は灰白色を呈する。焼成は堅緻である。SP3036出土。03129は、土製紡錘車である。全体の約半分を残す。復元径4.6cmを測る。器色は褐灰色である。SP3034出土。13043は、玄武岩使用の磨製石斧である。残存長8.4cmを測る。SP3102出土。

次に包含層・検出面出土の遺物類である。03128・03127・03125は、夜臼式土器甕の小破片である。何れも包含層（黒褐色粘質土・暗褐色粘質土）出土。03124は、口縁下部に緩い段を有する弥生前期甕破片である。包含層（暗褐色粘質土）出土。03126は、杯部との境に突蒂を巡らす高杯脚部破片である。包含層（暗褐色粘質土）出土。03122は、糸切り底の土師器皿である。口径7cm・器高1.5cmを測る。遺構検出土。03123は、褐釉陶器壺の小破片である。包含層（暗黄褐色砂質土）出土。

石器では、13041が、玄武岩使用の磨石及び叩石である。本来太形蛤刃石斧が半折したもの転用である。重さ192gを測る。東壁拡張区出土。13040は、磨製石斧の頭部残存品である。玄武岩を使用する。重さ416gを測る。東壁拡張区出土。13039は、黒曜石使用の残核である。剥片剥離でも原材のサイズから良好な剥片は得られていない。遺構検出土。13042は、黒曜石使用の平基無茎式をなす打製石鎌である。長さ2.6cm・厚さ5mm・重さ1.66gを測る。包含層（黒褐色粘質土）出土。

8. 小 結

これまでC区調査の各遺構について述べたが、本調査区で大まかに遺構の変遷を辿ると、まず竪穴住居跡・貯蔵穴・土坑などで構成される弥生時代前期集落に始まり、竪穴住居跡からなる弥生中期集落、方形周溝墓・石棺墓からなる古墳時代墓地そして台地周縁を横切る溝のある中世期といったよう区別できよう。

また、遺構・遺物の上で特徴的なものをあげると弥生前期の竪穴住居跡SC3005の壁構造である。削平が著しいが、少なくとも北・西壁には小形のピットが連続しており、壁立ちの一形態とかんがえられよう。同様のものは最近市内や市周辺遺跡でも多く類例が増えつつある。

また、前期の貯蔵穴SG3030は、袋状をなさない直立した壁を有し、床に上屋を支えるための柱穴を巡らした貯蔵施設として知られる。同様の形態は板付遺跡中央台地でも見られるが、今回調査では大量の炭化米が出土しており、また貯蔵土器などが見つかっていないことからも籠或いは藁編みの容器による保存も想定される。

さらに、方形周溝墓では、SD3006の溝内で出土した山陰系土師器の大型二重口縁壺やSD3028出土の台付き鉢形の土師器など数少ない資料が出土した。また、二重口縁壺が周溝の隅部底に置かれていることは他の周溝墓とも共通した点であり、同様の祖靈祭祀行為があったものと推測される。



1. 調査区東端部遺構出土状況（北西から）



2. 調査区東端部遺構出土状況（北西から）



3. SC3005、SG3002・
3017出土状況（西から）



1. SG3002、SK3011出土状況
(南東から)



2. SG3017出土状況
(西から)



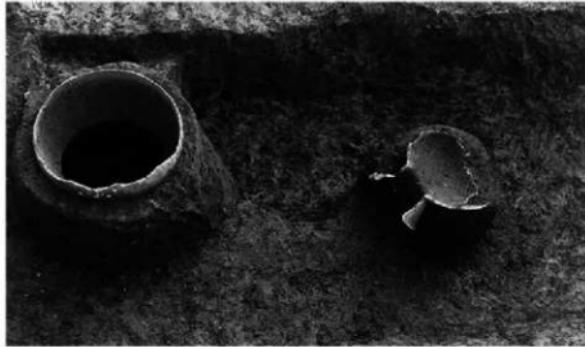
3. SG3002、SK3010
出土状況 (南から)



1. SC3005、SG3002・
3017出土状況(南から)



2. SD3006内土器出土
状況(西から)



3. SD3006内土器出土
状況(北から)



1. SX3038出土状況
(西から)



2. SX3038出土状況近影
(西から)



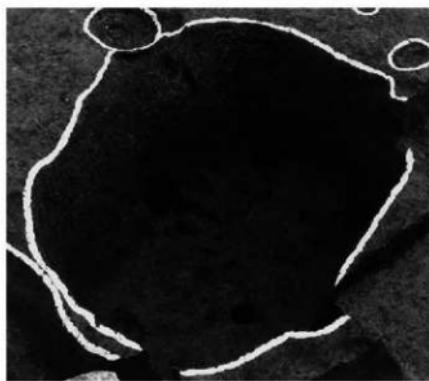
3. SX3038出土状況（蓋除去後）（北から）



1. 調査区西部遺構出土
状況（南東から）



2. 調査区西端部遺構出
土状況（南から）



4. SD3028内土器出土状況（北から）

3. SG3030出土状況（西から）



1. SK3035出土状況（東から）



2. SK3035の東側土器群（北から）



3. SP3068出土状況（西から）

第六章 D区の調査

1. 調査の概要

D調査区は、現道を挟んでA調査区の西側に隣接する三角形をなす狭隘な調査区である。

調査区では、土坑1基（SK4001）、溝状遺構8条（SD4002・4003・4004・4005・4006・4007・4008・4012）、それに柱穴12個が検出された。各遺構は、表土下30~50cmと比較的浅い位置で検出される。

また、狭隘な調査区であるが、溝状遺構が多く、これらは東西方向に向くものが殆どである。

遺構は、時期的には土師皿を投入した中世期土坑（SK4001）、溝状遺構では土器・石斧・打製石器などを出土する弥生前期後半溝（SD4004）や火壇・青磁碗などを出土する中世後期溝（SD4002・4005・4006・4007・4012）などがあり、弥生前期から中世期までの生活跡が主体となっている。

2. 土坑（Fig.87~90、PL.12・13）

土坑SK4001（Fig.87~90、PL.13）

本土坑は、調査区のほぼ中央で検出された不定形の大型土坑である。北側縁辺の立ち上がりを欠き、段落ち状の形状をなす。南側の壁は高さ20cm程度の規模を残し、壁面がやや弧状に膨らむ位置に一群の土師皿の集積が見られる。土器群は、土坑床面より10cm程浮いた位置で出土した。また、土坑の埋土は黄褐色砂質土である。土坑内では、前の複数の土師皿の他にフイゴ羽口・格子叩き目の平瓦破片などが出土した。

出土遺物（Fig.89・90） 土師皿の集積は10個体以上で、積み重ねられて投棄されたように思われる。04002は、やや大型の糸切り底の土師器皿である。外底部の板目痕はやや荒い。器面調整は、胴部内外面が回転ヨコナデで、内底には不定方向のナデが施される。器色はにぶい黄橙色～淡黄橙色を呈する。胎土には径1mm程度の石英砂を多量に混入する。焼成は堅緻である。口径13.9cm・器高3cmを測る。

04003もやや大型の糸切り底の土師器皿である。外底の板目痕は幅1.5cmとやや大振りである。器面調整は、胴部内外面が回転ナデで、内底には不定方向のナデが施される。器色はにぶい黄橙色～灰黄褐色を呈する。胎土には径1~2mm程度の石英・長石砂及び赤色粒を多量に含む。焼成は堅緻である。口径13.7cm・器高3.1cmを測る。

04004も糸切り底の土師器皿である。外底の板目痕は幅1.2~1.3mmを測る。器面調整は、胴部内外面が回転ナデで、内底には不定方向のナデが施される。器色はにぶい黄橙色～淡黄橙色を呈する。胎土には径1mm程度の石英砂を多量に含む。焼成は堅緻である。口径13.2cm・器高2.6cmを測る。

04005も糸切り底の土師器皿である。外底の板目痕は幅が6~8mmとやや目が詰まつものである。器面調整は、胴部内外面が回転ナデで、内底には不定方向のナデが施される。器色は淡黄橙色～にぶい黄橙色を呈する。胎土には径1mm程度の石英・長石砂及び赤色粒を多量に混入する。口径13.1cm・器高2.8cmを測る。焼成は堅緻である。

04006も糸切り底の土師器皿である。外底の板目痕は幅5mm前後と目が詰まっている。器面調整は、胴部の内外面が回転ヨコナデで、内底には不定方向のナデが施される。胎土には径1mm程度の石英・長石砂を多量に混入する。焼成は堅緻である。口径14.4cm・器高3.1cm前後を測る。

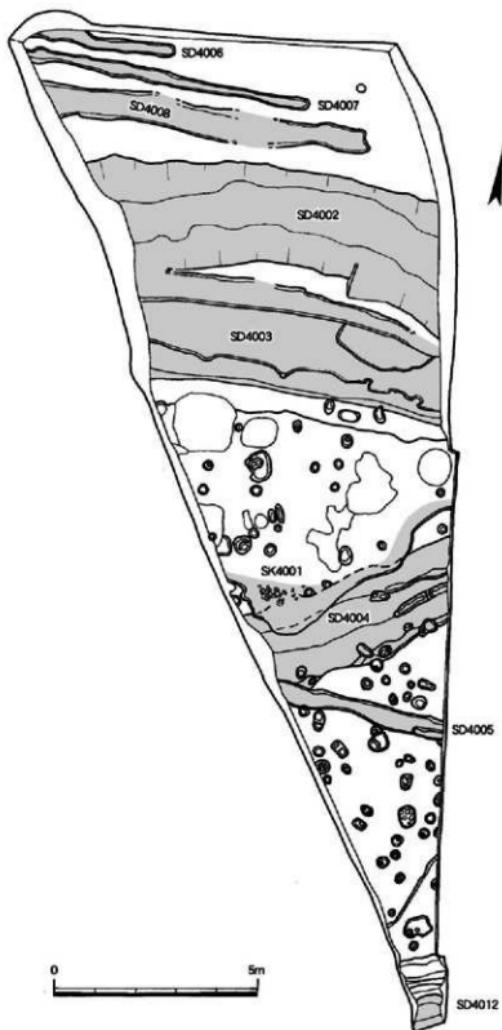


Fig.87 D区遺構全体図 (1/120)

04007も糸切り底の土師器皿である。外底の板目痕は幅6mm程度を測る。器面調整は、胴部の内外面が回転ヨコナデで、内底には不定方向のナデが施される。器色はにぶい橙色を呈する。胎土には径1mm程度の石英・長石砂を多量に混入する。焼成は堅緻である。口径13.1cm・器高2.6cmを測る。

04008もやや大型の糸切り底土師器皿である。外底の板目痕は幅が1.2cm前後を測る。器面調整は、胴部内外面が回転ナデで、内底には不定方向のナデが施される。器色は明黄褐色～灰黄色を呈する。胎土には径2mm程度の石英・長石砂を含む。焼成は堅緻である。口径14.4cm・器高3cmを測る。

04009も糸切り底の土師器皿破片である。外底の板目痕は磨滅のために観察できない。器面調整は、胴部の内外面が回転ヨコナデで、内底には不定方向のナデが施される。器色はにぶい黄橙色を呈する。胎土には径1mm程度の石英・長石砂及び赤色粒を多量に含



Fig.88 SK4001土坑内遺物出土状況実測図 (1/20)

む。焼成は堅緻である。口径12.5cm・器高3cmを測る。

04013も糸切り底の土師器皿である。外底に幅8mmぜんごの板目痕が残る。器面調整は、胴部の内外面が回転ヨコナデで、内底には不定方向のナデが施される。器色はにぶい橙色を呈する。胎土には石英・長石砂の他に雲母を多く混入する。焼成は堅緻である。口径14cm・器高3.2cmを測る。

次に、04001は須恵器の短脚高杯脚部破片である。器面調整は、脚外面がヨコナデで、内面にはヘラケズリが見られる。器色は淡灰色を呈する。胎土には径1mmいどろの石英・長石砂を多量に含む。焼成は堅緻である。

04011は、平瓦破片である。外面に荒い格子目叩きを施し、内面には荒い布目痕が残る。器色は灰色である。胎土には石英・長石砂を含むが、密である。焼成は堅緻である。

04012も平瓦破片である。外面に荒い格子目叩きを施し、内面にはヘラナデが残る。器色は青灰色を呈する。胎土には石英・長石砂と共に黒色微粒を少量混入する。焼成は堅緻である。

04010は、フイゴ羽口破片である。器色はにぶい橙色を呈する。胎土には石英・長石砂を多量に混入する。焼成は堅緻である。

14001は、半月形石包丁の未製品破片である。頁岩使用か。背部及び刃部に調整打剥を残す。残存長・厚さは7.8×0.8cm、残存部重さ67gを測る。

14002は、サヌカイト使用のサイドスクレイパーである。バルブを残す縦長剥片の側辺にリタッチを加え、刃部としている。サイズは、長さ・幅・厚さが6.4×3.7×1.4cmで、重量34gを測る。

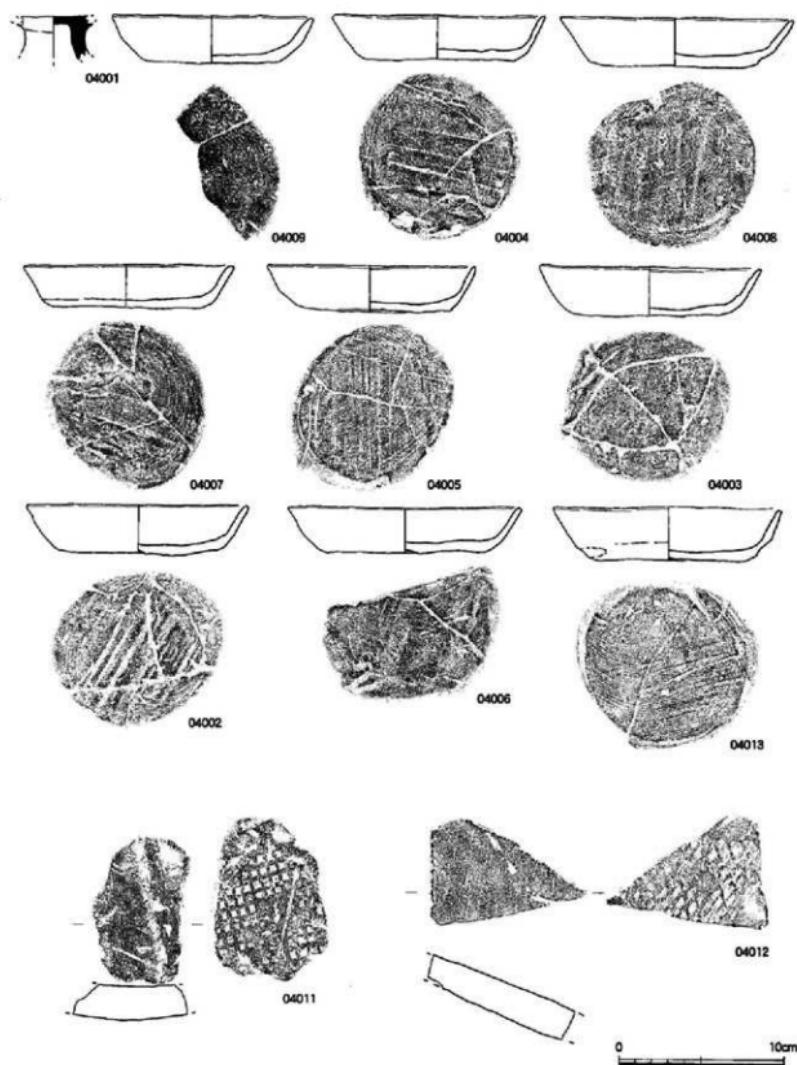


Fig.89 SK4001土坑出土遗物实测图 1 (1/3)

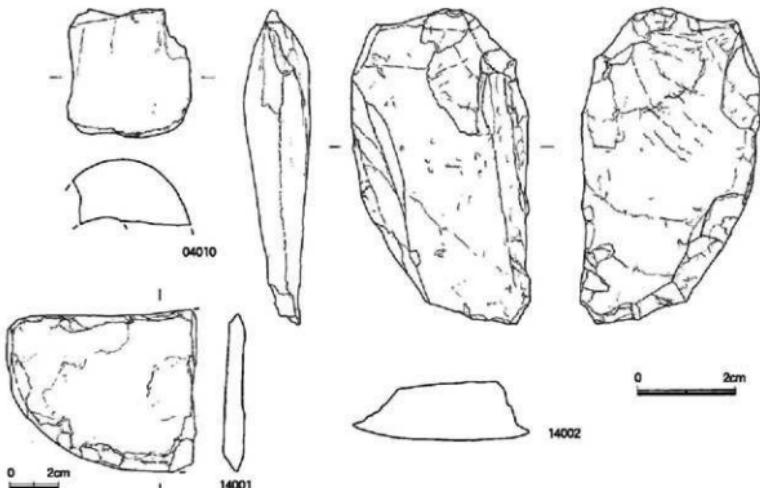


Fig.90 SK4001土坑出土遺物実測図2 (1/2+1/1)

3. 溝状遺構 (Fig.87・91~95, PL.12・13)

本調査区では、丘陵西側の谷部付近の地点に位置するためか、SD4004のように時期の異なる一部の溝を除き、殆どが東西方向に走る8条の溝を検出した。

溝SD4002 (Fig.87・91・92, PL.13)

本溝は、調査区北側で検出された東西溝である。南側に隣接する溝SD4003と平行し、切り合っているものと考えられる。その規模は、東西長9m以上、幅2.7m前後、深さ0.8m程度を残す。その断面形は、深い皿状をなし、東側端では南側へ、また西側端では北側に緩く立ち上がる。

溝付近の丘陵基盤となるのは鳥栖ローム層であり、上部は暗黄褐色、その下部は手に取ってみるとバサバサの土質をもつ暗茶褐色ロームとなっている。なお、上部暗褐色ロームの残存面は、標高9.6m程度を測る。

また、溝内の埋土は、Fig.91土層図に見られる様に、全体に黒褐色～灰褐色粘質土が交互に堆積し、最下層は灰褐色粘質土となっており、機能時も激しく流れている痕跡は認めにくい状況である。

溝内の埋土からは量的にそれほど多くはないが、土師器皿・瓦質土器火舎・土師器捏ね鉢・白磁や青磁碗の小破片が出土し、周辺に生活域が展開していたことを具体的に示している。

出土遺物 (Fig.92) 04017は、小形の糸切り底をもつ土師器皿である。器面調整は、内外面の荒れのために不明である。器色は外面が明褐色で、内面にぶい橙色を呈する。胎土には石英・長石砂と共に赤色粒を含む。焼成は堅緻である。口径3.4cm・器高1.2cmを測る。

04016も中型の土師器皿である。器面調整は、荒れのために不明である。器色は内外面共に灰白色を呈する。胎土は密であるが、石英・長石砂を若干混入する。焼成は堅緻である。口径11cm・器高2.1cmを測る。

04015も糸切り底の土師器皿破片である。器面調整は、磨滅のために不明である。器色は内外面共

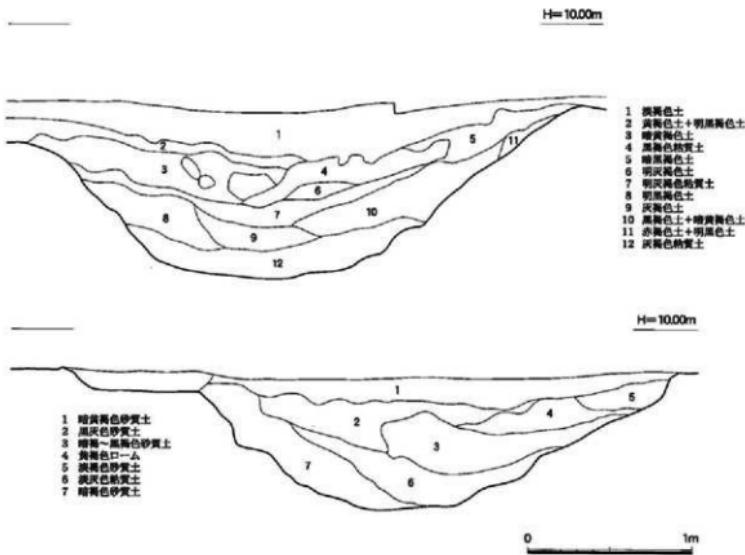


Fig.91 SD4002溝東西壁土層断面実測図 (1/30)

に灰白色を呈する。胎土には石英・長石砂を少量混入する。焼成は堅緻である。口径11.2cm・器高2cmを測る。

04014もやや底部の丸い糸切り底をもつ土師器皿である。器面調整は、磨滅のために不明である。器色は内外面共ににぶい黄橙色を呈する。また、胎土には石英・長石微砂及び赤色粒を少量混入する。焼成は堅緻である。口径12.9cm・器高3.1cmを測る。

次に磁器類では、04021が低い高台を付す白磁皿か。内外面に灰白色釉を施す。調整は、外面に回転ナデ、内面にナデが見られる。胎土は淡黄色を呈し、白色粒を多く混入する。高台部径4.2cmを測る。04022は、鏘運弁文を配する龍泉窯系青磁碗破片である。器面調整は、内底部に不定方向のナデ、他は回転ナデが観察できる。高台の豊付き及び外底部は露胎となる。釉は灰色を帯びたオリーブ色を呈する。高台部径6.1cmを測る。04023も龍泉窯系青磁碗の破片である。外底部を除く全面に緑~青緑色釉を施す。器面調整は、内底部に不定方向のナデを施し、他は回転ナデである。また、見込みには花文の陰刻が見られる。胎土は灰色を呈する。高台部径6cmを測る。04024も龍泉窯系青磁碗破片である。外底部を除く全面に灰色を帯びたオリーブ釉を掛ける。器面調整は、内底部にナデが見られる。また、高台端部には重ね焼きの際に置いた粘土の痕跡が残る。胎土は緻密で、灰色を呈する。高台部径6.55cmを測る。

次に、04019は、土師質土器捏ね鉢破片である。内湾気味に立ち上がる口縁は、肥厚して端部が跳ね上げ状となる。器面調整は、外面がヨコナデ・指オサエで、内面には横方向のカキ目が施される。器色は内外面共に灰白色である。また、胎土には石英・長石砂を多量に混入する。焼成は堅緻である。

04018は、瓦質土器火舎の破片である。内湾する口縁部は、端部を垂直に切る。また、外面には、

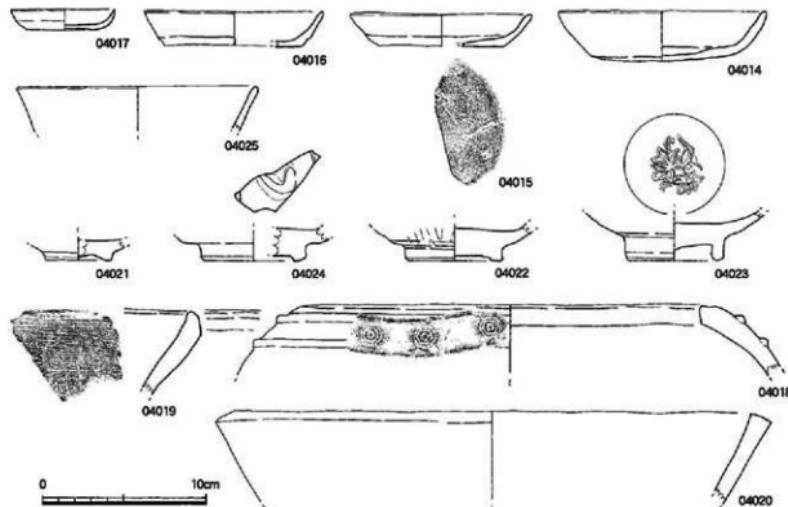


Fig.92 SD4002溝出土物実測図 (1/3)

二条の低い貼付突帯を巡らし、突帯間は六角形甲文のスタンプを連続押印して飾っている。

04020は、土師質土器の捏ね鉢破片である。器面調整は、荒れのために不詳である。器色は外面が黄褐色で、内面は灰褐色を呈する。また、胎土には石英・長石砂を多量に混入する。焼成は堅緻である。口径32cm程度か。

溝SD4003 (Fig.87・94)

本溝は、調査区北側で検出され、中世溝SD4002に隣接する。その規模は、長さ7.5m以上、幅3~3.2m、深さ0.8~0.9mを測る。溝は両岸共に幅0.5~0.6m、比高差0.2m程度の段をなしている。溝中心部の断面形は緩い皿形をなす。溝埋土からの出土品は少ないが、底部径が8cm程度を測る糸切り底の土師皿の破片が出土している。(Fig.94 04026)

溝SD4004 (Fig.87・93・94、PL.12)

本溝は、調査区南側で検出された溝である。方位を北東から南西にとる直線的な溝である。その規模は、長さ5.5m以上、幅2m、深さ約0.6m程度を残すものである。溝上端部の標高は、約9.2mと考えられる。溝の横断面形は壁の立ち上がりが緩い逆台形をなす。また、溝の埋積はFig.93の土層断面に見るように、放棄後緩やかに起こったものと観察される。溝内の埋土からは夜臼式土器・板付I~II式土器破片を中心とした土器類が出土した。

出土遺物 (Fig.94) 04028・04029・04048・04050は夜臼式土器甕の口縁部小破片である。口縁端部の刻み目突帯の位置が異なるものもある。何れも器面調整は、条痕文である。04048・04050は6層(黒褐色粘質土)出土。04030は、やや屈曲して外反する口縁下端部に刻み目を施す甕破片である。器色は淡黄褐色を呈する。胎土に砂粒を多く含む。04043は、やや上向きの刻み目突帯を巡らす夜臼式土器甕である。口径19.6cmを測る。6層出土。04049も同様の甕と考えられる。口径20cm程度を測る。04046は、口縁端部いっぱいに刻み目を施す甕である。外面にタテハケメを施す。口径20cm程度を測

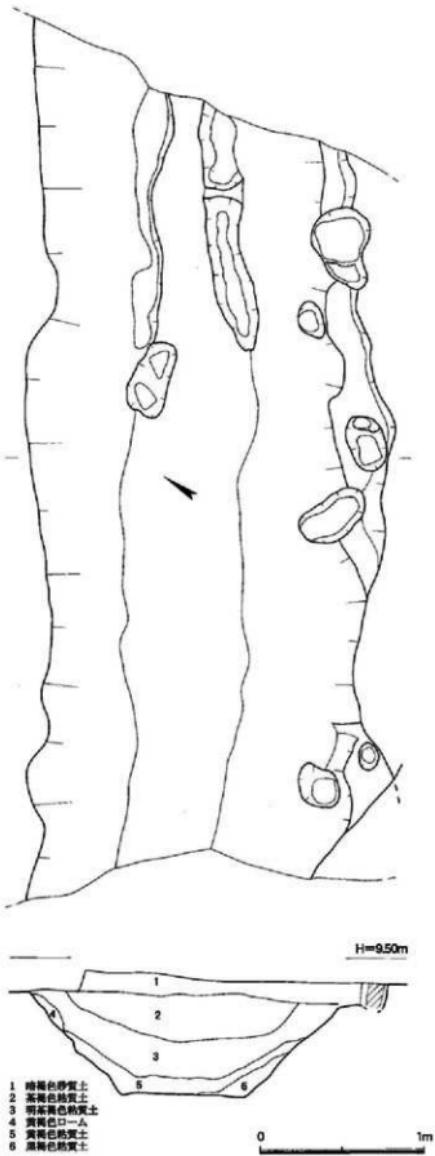


Fig.93 SD4004溝出土状況図実測図 (1/30)

る。6層出土。04032・04033・04039
 • 04047は壺口縁部破片である。04039
 は外及び内面の一部が丹塗である。ま
 た、04047は内外面共に丁寧なヘラミガ
 キを加える壺で、6層の出土である。
 04027は、外面に条痕文を残す甕破片で
 ある。04037は、外底部にヘラケズリ
 を施す甕である。04041は、夜臼式土
 器甕底部である。04042は、やや上げ
 底の甕底部破片である。この2点は6
 層出土。04040・04034も甕底部破片で、
 04040は6層出土。04036は、甕底部破
 片である。04031は、中期にかかる分
 厚い上げ底の甕底部破片である。04038
 は、上げ底をもつ甕底部破片である。
 04035は、甕底部破片である。

次に石器では、14004が太形蛤刃石斧
 破片を二次転用した敲石・磨石である。
 器の全面に擦過痕が見られる。現存長
 12cm・厚さ3.7cmで、重さ567gを測る。
 玄武岩使用。

溝SD4005 (Fig.87・95)

本溝は、調査区の南側に位置し、ほ
 ぼ東西方向に走る小溝である。その規
 模は、延長4.5m以上、幅は一定しない
 が0.5~0.35m、深さ0.1~0.15mを測る。
 本溝は、北側のSD4002・4003等とほ
 ぼ平行する位置にあることから、地割に
 関連する造構と推定される。

出土遺物 (Fig.95) 本溝からの出土
 品は、調査区が狭隘である点からも少
 量である。04051は、須恵器杯の底部
 破片か。立ち上がりは緩く、やや上位で
 屈曲する形態である。器面調整は、
 外底部がナデで、胴部外面にヘラケズ
 リを加える。また、内面には回転ナデ
 が見られる。器色は灰色である。また、
 豆土には石英・長石砂の他に黒色粒の
 混入が見られる。焼成は堅緻である。
 底部径7cmを測る。

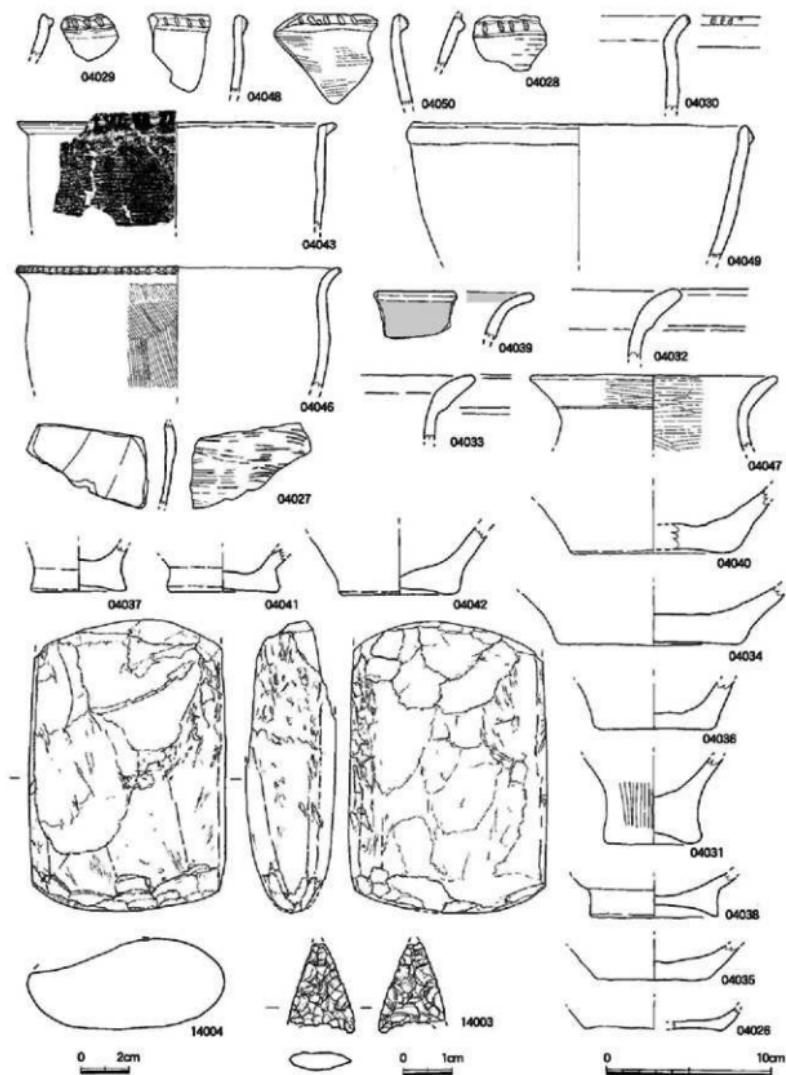


Fig.94 SD4003-4004溝出土遺物実測図 (1/3・1.2・1/1)

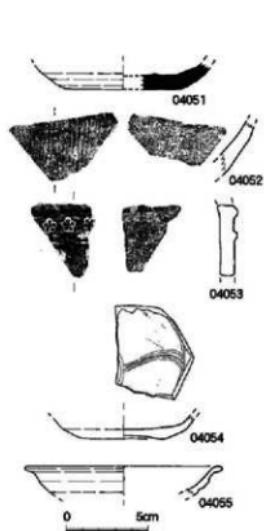


Fig.95 SD4005・4006・4007・4012東側拡張区出土遺物実測図 (1/3)

がる。溝の規模は、全長8m以上、幅0.5~0.8m、深さ10cm弱の浅いものである。溝の埋土内からは遺物は出土していない。

溝SD4012 (Fig.87・95)

本溝は、調査区の南端隅で検出された。調査範囲が狭小なために南側の立ち上がりが確認できていない。溝の軸向きは東西方向と考えられるが確定できず、或いは土坑である可能性もある。深さ0.4mを測る。

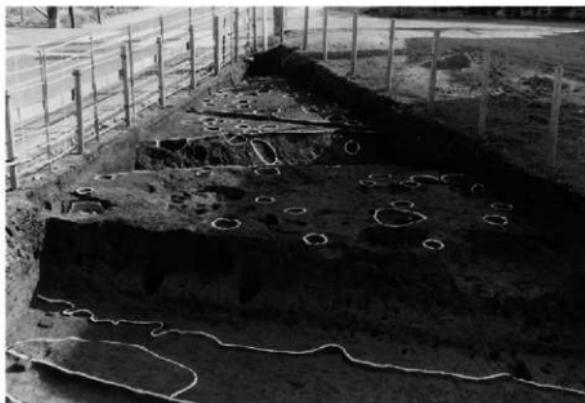
出土遺物 (Fig.95) 04054は、同安窯系青磁皿の破片である。見込みに草花文や櫛描きによる電光文が見られる。外底部は露胎で、他には黄色みを帯びた淡灰緑色の釉を掛ける。底部径5cmを測る。

他に造構出土の遺物ではないが、SD4003の東側拡張区で出土した口縁部がやや反転する綠釉陶器皿04055がある。釉は淡緑色で全面に掛ける。胎土は白っぽい褐色である。口径12cmを測る。

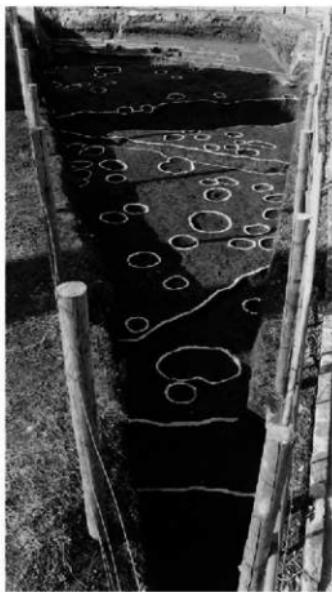
4. 小 結

これまでD区の検出遺構について個別に説明を加えてきたが、本調査区は現在使用している道路との関連で狭隘であり、各遺構の全体像を十分に把握することが困難であった。

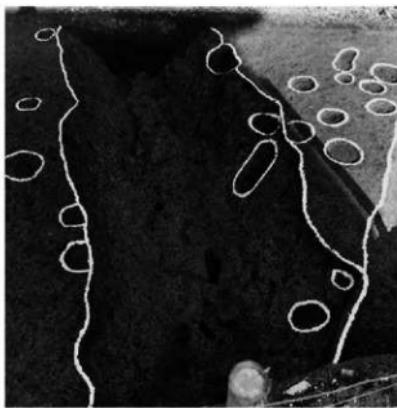
ここでD区の主な成果を述べると、溝SD4004は環濠となるかは不詳であるが、弥生前期集落を区画する溝である可能性が高く、本遺跡での該期の集落の一端を知ることができた。また、溝SD4002・4003に見られる大型の東西溝は、出土遺物から15世紀頃の居館施設の一部であると想定できよう。溝の南側のSD4005もこれらに平行しており、屋敷の区画に関連すると考えられ、SK4001土坑はこの生活域に営まれた廃棄土坑とも理解できよう。



1. 調査区南部遺構出土
状況（北から）



2. 調査区全景（南から）



3. SD4004出土状況（西から）



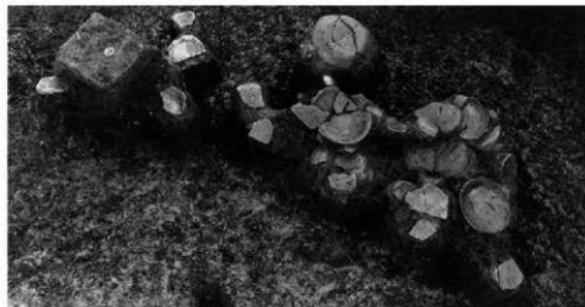
1. SD4002出土状況（東から）



2. SD4002出土状況（西から）



3. SD4002東壁土層
断面（西から）



4. SK4001遺物出土
状況（北から）

第七章 E区の調査

1. 調査の概要 (Fig.96・97)

平成15（2003）年度の第11次調査で最初に着手した調査区で、第10次調査C区の北側に隣接する。御供所井尻線建設にかかる五十川遺跡の要調査範囲のうち最も北側に位置し、遺跡の西限にあたる。

調査に先立ち、5月12日に地元住民へ事前の挨拶回りを行い、15日から重機による表土剥ぎを開始した。作業は2日間で終了し、引き続きF区北半部の表土剥ぎに入った。19日に現場養生等の条件整備を行い、翌20日から遺構確認作業を開始した。発掘調査はF区北半部と並行して進め、全景撮影などを同時にを行い、平板測量、遺構実測などの記録作成を含めて全ての作業を7月7日に終了した。7月10日からF区の反転と並行して重機で埋め戻した。

E区は平面台形をなす調査区で、8~14m×18mを測り、北西側が広い。調査区の面積は上端で202m²を測る。南東側は生活道路に面し、北東側は道路境界である。南西側はC区と一部重複するよう調査区を広めに設定した。北西側はセメントブロック壁があり2mの段差となっている。標高は地表面が11.6m前後、遺構面が10.2~10.3mで、表土から遺構面までの深さは1.3m前後である。

遺構面は鳥栖ロームで、削平により平坦面をなす。上面には50cm前後の暗褐色土（畑耕作土か）と黒褐色土（包含層）が乗るが、擾乱が著しく土層図は示せない。調査区の西から北を巡る比高差2mのセメントブロック壁は段丘崖の名残りを留めるものであり、低地で行った試掘調査では、台地脇では削平されて遺構が存在しないこと、更に北西側では沖積堆積層となることを確認している。E区の遺構はセメントブロック壁のすぐ際まで伸びており、台地は北西側にもう少し伸びて沖積面へ落ちていたものと推定される。

検出した遺構は、弥生時代の貯蔵穴3、古墳時代前期の方形周溝墓2、古墳時代後期の土坑2、弥生~古墳時代の土坑1、室町時代の溝2、及び詳細時期不明のピット多数である。また、調査区内にはごく最近のものと考えられる擾乱坑が2基あり、家屋解体時に不法投棄されたとみられる廃材が埋め込まれていた。

遺構実測の基準線は、予定道路軸線を基準にC区で設定したものを使って使用した。



Fig.96 E区位置図 (1/1,500)